樹季少年の憂鬱

丸焼きどらごん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死神の不手際によって命の炎を消された男は、代わりに平行世界で若くして死ぬはずだった自分に魂と寿命を詰め込まれてその世界で生きることになる。

しかしそこは「地獄先生ぬ～べ～」の世界だった！　しかも転校先は童守小学校５年３組ぬ～べ～クラス。

トイレ怖い用具室怖い階段怖い壁すら怖い……これはそんな学校でビビりながら生活していく小学生になった男……藤原樹季の日常の記録である。

※基本的に主人公がビビるのを眺めるお話。完結とかは特に考えず、のんびり原作の

お話を切り取った短編集みたいな感じで書いていく予定です。
※書きたい話から書いていくので、更新の順番的に時系列はけっこうバラバラ。最新話を「新しいお話」に表示した後、次の話が来たら原作のナンバー順に「色々なお話」に収納していきます。

目次

ざっくり主人公紹介とお話の更新順　1
最初のお話
憂鬱０個目　何故この世界だったのか　4
俺の運転テクがうなった日（#１０激突！の巻より）　22
色々なお話
玉藻てんてーと俺（#１３　鬼の手VS火輪尾の術より）　31
喫煙者にはつらい世の中になりまして（#１９　魔の１３階段より）　41
ロイヤルプラチナノーブルフラッシュレインボーだよ馬鹿野郎！（#２４　Aが来た！より）　52
我が家にタヌキがやってきた！（#４３　変身！ポンポコポンより）　65
誰かに知ってほしかった（#４５　前世の記憶より）　70
ゆきめたんと俺（#４９　真夏の雪女より）　83
たまには譲れぬ意地もある（#５４　人面瘡より）　92
そこはエデンだった（#５５　妖怪あ

かなめより）――――――――――――108
イタコギャルと俺（#74　霊能力美少女イタコギャル・いずな　より）118
貯金と外車（#86　ぬ～べ～、外車を買うより）――――――――――――132
毛玉のホワイトクリスマス（#114　幸運のケサランパサランより）140
聞いたら来る系はヤメロ（#129　ブキミちゃんより）――――――――――――151
見えない方が幸せだよと叫びたい（#177　霊能力者の作り方より）162
ドキドキ☆一週間同居生活！（#236　メリーさんの巻）――――――――――――177
ジャンプのモラルは海賊マーク（#241　鬼娘・眠鬼現る！より）――――――――――――204
番外編
番外編：枕返し先輩プロデュース平行世界旅行ｉｎハリー・ポッター――――――――――――226
番外編：枕返し先輩プロデュース平行世界旅行ｉｎハリー・ポッター2　242
新しいお話
秋の空と燃えるいずなの恋心（物理）

（#118　謎の人体発火現象より）

ざっくり主人公紹介とお話の更新順

短編集と銘打ってるわりに進むにつれて地味に能力が増えたり知り合いが増える主人公。何処から読んでもだいたいわかるように、書きたいものから書く故にバラバラなお話の更新順と合わせて彼についての紹介文をざっくり書いておこうと思います。

■名前：藤原　樹季
■年齢：２５歳→１１歳
■経歴：
・地獄先生ぬ～べ～は小学生の頃に従兄弟にもらった単行本で愛読していた。
・ある日、死神と思われる馬骸骨頭の不手際により命の炎を消されてしまう。そして若くして死ぬはずだった平行世界の自分に残りの寿命と魂を詰め込まれて転生したが、そこがまさかのぬ～べ～世界。しかも転校先は童守小学校５年３組だった。
・ちなみに平行世界の樹季は原作「＃６１恐怖の心霊写真」にて登場する転校の途中事故で亡くなった生徒。２５歳の樹季の魂が体に入る際に何故か時間が逆行し事故は回避されたが、１１歳の樹季は事故の時に亡くなっており、平行世界の２５歳の自分に

残りの人生と家族を託して成仏した。

・転生した影響か霊能力の才能が開花してしまい、妖怪や霊が跋扈する外が怖くてしばらく不登校に。担任の鵺野鳴介（ぬ～べ～）に相談した結果、彼に霊能力のコントロールを習うことになる。

・＃４５前世の記憶、の話にて鵺野にだけ自分の転生事情を話しているが、地獄先生ぬ～べ～という漫画については話していない。

■霊能力：

・霊視（見る事、聞くことへの特化。時には霊に話しかける事も出来る。この能力だけ無駄に高性能で見たくないのに見ちゃうし聞きたくないけど聞いちゃう）

・結界（自室の壁にびっしり般若心経を書き込んでおり、一応魔除けの結界になっているらしい。体育の無い日は魔除けに体にも般若心経を書き込んで登校している）

・物への霊力付与（玉藻を封じるミサンガを作った時に思いがけず才能発揮。将来的にはちょっとした封印具くらい作れるかもしれない。しかし現在の性能はカス）

・ヒーリング（霊力によって自分や他人を癒すことが出来る。しかし性能はカス）

・上記のヒーリングが出来る事が影響しているのか、優しい気をしているため動物になつかれやすい。

各話の更新順（書きたい話から書いているため更新の順番がバラバラ。目次では原作のナンバー順に並び替えています）

1，憂鬱０個目　何故この世界だったのか
2，俺の運転テクがうなった日（＃１０激突！の巻より）
3，そこはエデンだった（＃５５　妖怪あかなめより）
4，喫煙者にはつらい世の中になりまして（＃１９　魔の１３階段より）
5，玉藻てんてーと俺（＃１３　鬼の手ＶＳ火輪尾の術より）
6，ロイヤルプラチナノーブルフラッシュレインボーだよ馬鹿野郎！（＃２４　Ａが来た！より）
7，誰かに知ってほしかった（＃４５　前世の記憶より）
8，ゆきめたんと俺（＃４９　真夏の雪女より）
9，イタコギャルと俺（＃７４　霊能力美少女イタコギャル・いずな　より）
10，貯金と外車（＃８６　ぬ～べ～、外車を買うより）
11，聞いたら来る系はヤメロ（＃１２９　ブキミちゃんより）
12，たまには譲れぬ意地もある（＃５４　人面瘡より）

最初のお話
憂鬱０個目　何故この世界だったのか

例えるなら、それは極寒の水の中に突き落されたような感覚だった。

暗い暗い空間の中に、ぼうっと白いものが浮かぶ。目を凝らすとそれが馬の頭骸骨だと気づいた。

そしてだんだんと見えるものが増えていき、その頭蓋骨に黒い外套をまとった人間の体がくっついていること、その手にタロットカードに描かれた死神が持つような巨大な鎌が握られていることにも気づく。そして、その人物？　の前には揺らめく光源……儚げな炎を灯した無数の蠟燭がずらりと並んでいた。

ふと、骸骨が一つの蝋燭の前に屈む。そして骸骨なので分かりにくいが、おそらく息を吹きかけたのだろう……蝋燭の炎がすうっと空気に溶けるように消えた。それを見

た俺は、抑えようもない寒気に襲われる。何か……何か、とても大事なものを奪われたように感じたのだ。

すると、骸骨がこちらを見た。

骸骨は喋らない。だが、その代りに字幕映画のように眼下に白文字で何やら文字が浮かび上がった。

『間違えた。隣の蝋燭を吹き消すつもりが、お前の命の炎を消してしまった』
『不祥事だ。不祥事だ。怒られる』
『仕方がない、お前の存在を無かったことにしよう』
『この世界から消えてしまえ』
『代わりに、死ぬはずだった別の世界のお前にお前の魂とお前が残り生きるはずだった分の時間をくれてやる』
『さあ行け。我は残りの仕事で忙しい』

その意味を理解する間もなく、俺の意識は黒く塗りつぶされた。

＋＊＋＋＊＋＋＋＊＊＊＊＊＊＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

　鵜野鳴介はとある一軒家の前で気合いを入れていた。というのも、その家に住む自身の生徒に初めて会いに来たからだ。
　鵜野は数年前に童守小学校５年３組の担任に就任した、おそらく国内で唯一の霊能力教師である。霊地場となっている童守小学校でおこる様々な事件に対応するため、童守小学校の校長に乞われてこの町にやってきたのだ。
　すでにいくつかの霊現象に遭遇しそれを解決してきた彼だが、今回は純粋に教師としてこの家に来ている。というのも、この家に住む少年は鵜野のクラスに編入してくる予

定だったのだが……童守町に着いた途端、家に引きこもってしまい一歩も外に出ようとしなくなってしまったからだ。

両親に話を聞くところによると、越してくるまでは新しい学校を楽しみにしていたらしい。だというのに少し前から活発だった以前とは人が変わったようにふさぎ込んでしまい、家というよりもまず部屋からほとんど出てこないらしい。

両親は引っ越しで疲れてしまったのだろう、デリケートな年ごろだししばらくはそっとしておこうと気を使って学校を休むことを許容した。しかしあまりにも引きこもりが長く続いたので、困って担任である鵺野に相談してきたのだ。どうか学校の楽しい様子を話して息子の不安をぬぐってほしいと。

両親の意向でしばらくは学校側からの接触も控えていたのだが、ＯＫサインが出たのなら張り切らないわけがない。鵺野……生徒からはぬ～べ～のあだ名で呼ばれる彼は、今から何を話して聞かせようかと頭の中で学校の楽しい出来事をあれこれと思い浮かべていた。

しかし、ひとつ気になる事がある。鵺野は同時に両親から不思議な話を聞いていたのだ。

何でも引っ越す直前、件の男児は急に「引っ越しの荷物は業者の人に任せて、俺たちは電車で行こう」と言い出したのだ。しかもそうでなくては自分は行かないと駄々をこ

ね、珍しい息子の我儘に「引っ越すのが不安で少し我儘になっているのかも」と考えた両親はそれを受け入れた。結果……彼らは生き延びた。

なんと引っ越しの日、彼らが使うはずだった道路で大きな事故があったのだ。それも時刻を考えると、もし車で行けば確実にそれに巻き込まれていたはずだと母親が青ざめた顔で言っていた。鵺野の霊能力教師という評判を聞いて、半信半疑ながらも誰かにその話を聞いてほしかったのだろう。「いきなりこんな話ごめんなさいね。でも、なかなかこんな不思議なこと人に話せなくて」と、すっきりとした顔で笑っていた。

偶然。

その言葉を使えば、この事は運が良かったのだと流せる話だ。しかし鵺野はどうにもそれが気にかかっていた。何か理屈があるわけでは無く、あえて言うなら「勘」が訴えていると言えばいいのだろうか。しかし霊能者である彼の勘はなかなか馬鹿に出来ないのだ。

「ま、考えるより先にまず会ってみないとな」

鵺野はそうやって気を取り直すと、母親に断って二階にあるという生徒の部屋へ向かった。

　そして生徒の部屋の前に立つと、咳ばらいをした後出来るだけ明るい声で呼びかけた。

「樹季くん、初めまして！　君のクラスの担任の鵺野鳴介だ。入ってもいいかな？」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

　藤原　樹季（ふじわらいつき）、それが俺の名前である。そしてその名を呼ぶ声が部屋の外から聞こえ、久しぶりに聞く両親以外の声にびくりと肩がはねた。

　俺はこの町……童守町に越してくる前、普通の小学生だった。引っ越しに寂しさを覚

えながらも無邪気に新しい学校を楽しみにしていたころが懐かしいぜ……。それが何を間違ったのか、今の俺は俺であって本当の藤原樹季ではない。彼の記憶は持っているが、本人では無いのだ。

というのも、この体に現在入っているのは「２５歳の藤原樹季」の精神だからだ。人に言っても病院を勧められるだけだからこの事実を知るのは本人である俺だけだが……俺しか知らないからこそ、自分の記憶や精神性を疑ってしまい結構ツライ。

何故こうなったか初めから記憶を辿ると、まず２５歳の藤原樹季として生活していたころまで遡る。といっても何か劇的なことがあったわけでも無い、代わり映えの無い日常が続いていただけだったのだが……その終わり方だけは劇的だった。

黒い空間。命の炎。間違って消された俺の命。クソッタレ死神。

うん……思い出すたびに腸が煮えくり返る。

正直記憶はあいまいで断片的な記憶を繋ぎあわせるのには数日を要した。そして夢か現か分からないが、この非現実的な状況を作り上げた原因を朧気ながら理解したのだ。

俺は、他の誰かの代わりに間違って寿命の火を消されてしまった。あの馬骸骨の死神もどきの究極の凡ミスである。そしてあいつ、自分のミスを隠すために俺の魂を元居た世界から弾き飛ばしやがった!!　赤点隠す小学生じゃねぇんだぞクソが!!

詫びのつもりなのか、俺の魂が入れられたのは平行世界の俺の体だった。しかし死神が「死ぬはずだった別の世界のお前にお前の魂とお前が残り生きるはずだった分の時間をくれてやる」と言ったのに違わず、この世界の俺は若くして死ぬ運命にあったらしい。魂を入れられた瞬間、今の俺と同じ声……つまり小学生の俺の声が「俺の代わりに、父さん母さんをお願い。あの世で待ってるから、いっぱい生きていっぱい土産話を聞かせてよ」と体をすうっと何かが通り抜けるような感覚と共に聞こえたのだ。そして直後、眼前に迫るトラック、衝撃、両親の悲鳴、激痛というビジョンを見て……小学生の体になっていた俺は、汗びっしょりで寝ていた布団から飛び起きたのだ。そして起きた場所は、狭い一人暮らしのアパートではなく懐かしいかつて住んでいた実家の俺の部屋だった。

多分、あのビジョンは本当にあった出来事だ。そしてこの世界の俺はあの時死んだ。

死神の都合に合わせた気まぐれなのか、それともこの奇跡に便乗してあの子……この世界の俺がせめて両親を守ろうと頑張ったのか、俺はその事故が起きる数日前の世界で目を覚ました。そして事故が起こると分かって黙っているほど馬鹿でもない。車を使わず電車で引っ越し先まで行こうと提案し、事故が起こることもなく俺も両親も健在のまま今に至る。ただしこの世界の俺の魂は消えて……多分、あの世に行ってしまったが。

ここまでは、信じられないながらも頑張って受け入れた。この世界の自分に申し訳なく思いつつも、彼の願い通り親孝行してたくさん思い出を作って生きて死んだらあの子に聞かせようと奮起もした。……が、俺は現在進行形で親不孝をしている。部屋に引きこもって不登校とか、両親が心配しないはずがない。

けど、けど!!

死神！　何故、この世界というかこの町を選んだ!!

部屋の外から聞こえた声は、俺に目をそらしていた現実を突きつけた。

「樹季くん、初めまして！　君のクラスの担任の鵜野鳴介だ。入ってもいいかな？」

（オワタ）

さよなら前の世界。こんにちは、地獄先生ぬ～べ～世界。

とりあえず俺はぬ～べ～こと鵺野鳴介を部屋に招き入れ「散らかっていてすみません」と言いながら座るように促した。しかし電気がつけられた部屋の様相を見て、鵺野先生はあんぐりと口をあける。

「……え、ええと……達筆なんだね」

そして汗をかきながらも笑顔で褒め言葉をひねり出してくれた彼を見て「ああ、いい人だな」と思いちょっとだけ肩から力が抜けた。しかし両親には「コレ」はナウでヤングなインテリアファッション的なものだと言って通しているのだ。不登校の引きこもりで今さらだが、心のヒーローであった彼に変な心象を持たれたくないという思いが働き俺は口を開いていた。

「壁紙をファッショナブルにしようと思って……」

「いやいやいや!?　落ち着かんだろう！　めちゃくちゃ魔除けの効力発揮してるのは凄いが！　ちょっとした結界じゃないか！」

「え、マジすか！」

おお！　気休めだとばかり思ってたのに、この壁一面の般若心経はちゃんと魔除けの効果を発揮していたのか！　コツコツ書道セットの墨擦って書いた甲斐があったぜ！　よく調べなかったから般若心経で魔除けには効果あるのかな？　と思ってたけど、

「魔除け、魔除け……！」と念じながら書いたからな。そうか……効果あったのか……！

思わず喜んでしまうと、そんな俺を見た鵺野先生は少し考えるそぶりを見せると「間違っていたら済まない」と前置きしてからこう言った。

「もしかして君は、霊が見えるのか？」

俺はしばらく考えたのだが、現状では前にも後ろにも進めないと悩んでいたことも事実。とりあえず平行世界だの魂云々は話さず、起こるはずだった事故を予知（？）したことから始まって、ある日突然霊が見えるようになったのだということから話し始めた。

ある日っていうか、正確には俺がこの世界の俺とドッキングした日からなんですけどね!!

超常的な現象を体感したせいなのか、俺の霊感は飛躍的にアップしてしまったらしい。越してくる前や引っ越すまでの道中は「なんか視界の端でちらちらするものがあるな～」程度だったのに……この童守町についてからというもの、居るわ居るわ、見えるわ見えるわ。浮遊霊なんて可愛いもので、妖怪チックなもの……魑魅魍魎の数々が、とにかく視界を邪魔してくれた。貧血をおこして倒れるなんて初体験までしちゃったぜ。

ははっ……はぁ……。

しかも嫌なことに気づいてしまった。「童守」という地名、どこかで聞き覚えがあったのだ。そして転校先のクラスの担任の名前を知った俺は、すみやかに部屋に引きこもった。お外コワイ学校コワイ。だって……だって！　童守町に幽霊に妖怪に鵺野鳴介っていうかぬ～べ～って、思いっきり「地獄先生ぬ～べ～」じゃないですかヤダー！

……ヤダー……。

むせび泣いた。

地獄先生ぬ～べ～。それは国民的少年誌、週刊少年ジャンプで過去に6年ほど連載していた漫画の名前である。

連載当時は幼かった俺だが、小学生中学年ごろに従兄弟の兄貴から漫画全巻をプレゼント（という名の古本整理）されてから大好きになった漫画だった。少年漫画のヒーローといえばドラゴンボールの孫悟空などが思い浮かぶ。もちろん悟空格好いい、スーパーサイヤ人格好いい！　とも思うものの、小学生だった俺にとってのヒーローは鵺野鳴介だった。そしてあまりにもはまり、同級生に貸し出して彼らに俺と同じくトラウマを刻み付けたのだ。

うん……トラウマ。

何故ぬ～べ～がヒーローかって、それは小学生だった俺たちの身近な恐怖だった「幽霊」や「妖怪」を格好良く倒してくれる存在だったからだ。もちろん人間性込みで好きなんだけど、とにかく頼もしかった。小学生ってわけもなく「怪談」とか「怖い話」って好きじゃん？　いや、全部そうだとは言わないし大人になっても好きな奴はいっぱいいるけどさ……とにかく、ビビりのくせに怖い話への好奇心が抑えられないのだ。

そんな俺たちに素晴らしく面白い話を提供してくれるとともに、数々のトラウマを心に刻み付けて行ってくれた漫画……それがぬ～べ～である。中でも「その話を聞くと自分のもとにやってくる」系の話を読んでしまった時は「全国紙でヤメロよ！　やめろよぉ!!」と恐怖に縮み上がった。魔人ブウよりも怖かった。

いや、普通に少年誌らしい強敵、熱いバトルや格好いいライバル、可愛いヒロイン、人間ドラマと少年漫画してたんだけどね。妖怪以外にも超常現象とかも扱ってて超面白かったんだけどね。そして何より当時の俺らに極上のエロス（確実に同級生の何割かはこの漫画で新しい性癖に目覚めたと思っている）を提供してくれた素晴らしい漫画なんだけどね。

だけどそれが現実になったとか地獄か。確実に毎日ちびる自信があるわ!!

小学生にしてオムツ着用必至である。

そんな馬鹿ナーと笑い飛ばせるほど、俺の精神は図太くなかった。これで妖怪とか見えちゃわなければ「たまたま同じ名前」で納得出来たかもしれないが、妖怪という現実の壁が大きく俺の前に立ちふさがり、ついでに逃げ道もふさいできやがる。そうなると、この現実を受け入れるしかないわけで……でもそうすると身動き取れなくなるわけで……。

「突然色々見えるようになって……。もう怖くて怖くて……家から一歩も出られないんです」

内心を吐露するにつれて、視界が涙で歪んでいく。

せめてこの町から出たいと思っても、仕事の関係で越してきたばかりの両親にそんなこと言えるはずもなく、せめて毎日が学校の怪談☆な童守小学校に通わないという抵抗しか出来なかった。つーかこの町おかしいよ……小学校はいわずもがなで、他にも3歩歩けば何かしら目に入ってくるようなもんだもん……。学校行っても一人じゃ行動できねぇよ……。

トイレも行けないだろ？　用具室に物取りにも行けないだろ？　うっかり人気のな

い校庭とかも見れないだろ？　階段の数にびびっていちいち数数えながら登らなきゃだろ？　音楽の授業で暇でも目が合っちゃいそうで壁にかけられた肖像画のカツラっぽい奴数えることも出来ないだろ？　飼育小屋の前を通るたびに動物が血みどろで死んでるかもって怯えなきゃだろ？　絵画の前を通るたびに頭から食われないかとビクビクしなきゃだろ？　プールに入っては足引っ張られやしないかと怯えなきゃだろ？

入口の像が動き出さないかってビビりながら毎朝登校しなきゃだろ？　神経すり減るわ!!!!　怖いものが上げても上げてもきりが無くて追い付かねぇよ!!　全部覚えてるわけじゃないが、とにかく怖いってことは覚えてるよ!!

「そうか……。何かのきっかけで、突然霊能力が開花してしまったんだな。今まで見えなかっただけに、余計に怖かっただろう。ご両親に心配かけたくなかったんだろうが、誰にも言わず一人でよく耐えたな。偉いぞ！」

「ぜ、ぜんぜぇぇぇぇ!!!!!!」

俺は泣いた。

全力で泣いた。

だって、本当に怖かったんだ。中身いい歳こいて大泣きするなんてみっともないけど、俺は今小学生！　泣いたっていいんだ！

背中をさすってくれる鵺野先生の手は大きくて頼もしかった。二次元から三次元に

なった彼は当然漫画とは違って見えたけど、でもその人柄に「ああ、この人ぬ～べ～なんだな」って思った。馬鹿にしないで俺の話をちゃんと聞いてくれた。気遣ってくれた。……俺を安心させるように笑顔で俺の我慢を褒めてくれた彼は、間違いなく俺のヒーローだった。

しかし、現実は非情である。

「よし！　それなら、俺が霊能力の扱い方を教えてやろう！」

「え？」

「な～に、心配いらないさ！　実は同じクラスにもすごい才能を持つ子がいてな。その子の指導もしてるんだ」

「えっと……！」

「俺もかつて恩師に助けてもらった身でな……。君のことは他人ごとに思えん」

「そのっ」

「クラスの奴らも気の良い連中ばかりで楽しいぞ！　ぬ～べ～クラスは霊現象に慣れてるし、君の霊感が強いからって怖がったりしないさ」

「あのですね……！」

俺の頭の中を色々な言葉や映像が巡る。しかし学校に行かないという選択肢をはじ

き出す答えは出なかった。

最良、最良なのだ。ぬ～べ～の指示してくれた選択肢は、俺にとって最良の提案！霊が怖ければ身を守れるように霊能力を身に着ければいい。至極真っ当である。

でも大前提として、俺は怖い目に合うのがまず嫌なんだよ!! 学校行ったら下手したら1日に2～3のペースで怪現象に遭遇するんじゃないか？ コミックの巻数を考えてそれをぬ～べ～が転勤するまでの1年に詰め込むとなると!! 全部が全部おきるか分からないけど、でも、確実に紙面のトラウマをいくつか現実で目の当たりにするわけで……!

だが、いくら考えようとこのまま引きこもっていても何も解決できないという答えにしかたどり着けなかった。

項垂れた俺は、絞り出すような声で言った。

「ご指導お願い申し上げます……」

せめてもの希望として「エロイベント来い！」を胸に抱き、俺は鵺野先生に深く頭を下げた。

俺の運転テクがうなった日（#１０激突！の巻より）

鵺野先生が俺の家を訪ねて来てくれたことをきっかけに、俺は彼から霊能力についての指導を受けることになった。同時に脱・不登校もしたわけだが……出来ればこれは少しでも霊力のコントロールを身に着けてからがよかったな。せめて浮遊霊とか見なくて済むくらい霊力抑えられるまで……いや、贅沢はよそう。一流の霊能力者（本物）に教えを乞うことが出来る幸運に感謝するべきだろう。だからそれまでは我慢……我慢だッ！　見えたとしても、居ないと思ってれば居ないのと同じだって、そんな感じの台詞を某死神漫画の妹ちゃんが言ってた！　まさに金言。……俺は何が見えようと、絶対に無視してみせる。もちろんちびったりなんてしない。

……いやでもやっぱ怖いからさ、体育の無い日は体に般若心経を書き込んで登校するのが日課になってるんだけどね。

腱鞘炎になりながらも壁一面に書き込んだ経験が生きて、今じゃ何も見なくてもさらさらっと書き込めるのさ！　でももしバレたら間違いなくあだ名が「耳ある芳一」になるだろうから、服を脱ぐ必要がある日は大量のお守りをランドセルのありとあらゆる隙間に詰め込んで気休めにしている。へへっ、この世界の俺がとっておいたお年玉がお守

りに消えたぜ……。

ちなみに学校だが、妖怪云々抜きにしても小学生の中に入るとかキツイワーと思っていたんだが……なんか、普通に馴染めた。つーか、あれだ。小学生のノリって楽しい。あれかな、男はいつでも心は少年ってことかな。俺の精神年齢が低いわけじゃ無いよな……？　だよな……？

最初こそ不登校していたこともあって委縮していたのだが、休み時間にクラスの男子が先生に内緒で回し読みしていたジャンプを見てテンション上がったのが思えばきっかけだった。だってこの頃のジャンプのラインナップといったらテンション上がらずにいられるかっての!!　例えば今週号の目次だが、ドラゴンボールだろ、幽遊白書だろ、スラムダンクだろ、こもれ陽の下でだろ、ＢＯＹだろ、ＤＮＡ２だろ、こち亀だろ、ダイの大冒険だろ、新ジャングルの王者ターちゃんだろ、忍空だろ、ボンボン坂高校演劇部だろ、とってもラッキーマンだろ、チビだろ、変態仮面だろ、ろくでなしブルースだろ、ジョジョの奇妙な冒険だろ、モンモンモンだろ、ペナントレースやまだたいちの奇跡だろ、アウターゾーンだろ……ほぼ知ってるよ!!　超有名作品ばっかだよ!!　それが一堂に会して同じ雑誌に載ってる奇跡……ッ！

俺、今日から絶対ジャンプを捨てない。場所が無いと言われても積み重ねてベッドにしてでも未来まで取っておく。

そう、平行世界とは言え、俺の年齢が違った事からも考えられたがこの世界は俺の生きていた２０００年代の日本では無いのだ！　だから連載作品も過去のものなんだ。

俺は初めてちょこっとこの世界に来られてよかったと思ったんだ。本当にちょこっとだが。

そして無事にクラスに馴染めたのであるが、恐れていた妖怪関係の事件には幸いまだ一度も遭遇していない。クラスのみんなからちらほら聞くのだが、今のところ俺はそれを上手く回避しているようだ。なんという幸運！

こうしてのんびりと小学校生活に馴染んだ俺だったが、今日は初めての遠足だ。

バスでの遠出に年甲斐もなくうきうきしてしまい、綺麗な景色と母さんが作ってくれた弁当に舌鼓を打った。ああ……懐かしいなぁ……。なんか、別の世界に来たっていうよりタイムスリップしたみたいだ。

甘い卵焼きの味に思わず泣きそうになって、誰かに見られる前にごしごしと滲んだ涙をぬぐった。

しかし、遠足は帰るまでが遠足ですとはよく言ったもので。

「ブレーキが利かない!!」

『ええ!?』
（ジーザス）

遠足の帰りのバスで、バスのブレーキが利かなくなった。
ああそうさ！　嫌な予感はしてたさ!!　この道事故が多いねっていう話題からバスガイドさんがこの鬼門峠には霊界に通じる鬼門があるって説明して、それに便乗して鵺野先生が鬼門について説明しだしたとこから嫌な予感とか超してたよ!!　バスガイドさんが生き残った人の証言で事故当時の状況を説明したのが止めだよ！　まんまその状況をトレースしたみたいに、ドーンという大きな音がしてからバスのブレーキが利かなくなりやがった!!
しかも幽霊を恐れて走っているバスから無謀にも飛び降りようとした運転手さんがたった今輪切りにされました！　はい、トラウマ！
「おえええええええ!!」
「い、樹季くん！　大丈夫なのだ!?」
我慢できずに吐いた俺を誰も責めまい。他にも何人か吐いてたし……ゲロ袋にインさせた俺は優秀な方だった。つーかまこと、お前良い奴だな。自分も怖いだろうに隣の席の俺の背中さすってくれてさ……。

しかし礼を言う暇もなく、俺はバスに並走するように現れた妖怪がとりついた車を直視してしまい悲鳴を上げた。ヒィィィィ!!　デカい！　グロい！　怖い!!　大きい音がしてから隣に居たのは見えたけど、直視してしまうと余計に怖い!!

「沙裏鬼（じゃりき）……霊界の表層部に居て現世との間を往復するだけの無害の妖怪なのに、何故!?」

「何故じゃなくて「鬼門を開けろ」って激オコですけど!?」

思わず叫んだ。さっきからこいつ超言ってるよ！

「！　たしかにそう言っている。というか樹季、このノイズ交じりの声をよくすぐに聞き取れたな」

「感心してないでどうにかしてください鵜野先生ぃぃぃぃ!!」

「うわっ」

「キャーーーーー！　危ない！」

「突き落されるぞ！」

妖怪の奴、俺をビビらすに留まらずバスに体当たりしてきやがった！　多分そうやってここで事故をおこしまくったんだろう。

『帰セー!!』

「ッ！　そうか……、何らかの理由で鬼門が閉じられて帰れないから怒っているんだ」

「それで人を襲うのか!?」
　死んだ運転手さんに代わって運転をする鵺野先生の横で驚く広がそう言うが、帰してほしいなら頼む態度ってもんがあんだろうが!!　死なせてどうする！
　内心激しく突っ込みつつも、妖怪がバスの後ろに移動したのを見て俺はよろよろと席を立った。
「せ、先生……運転変わります……妖怪が後ろに……うえっぷ」
「いや無理だろう!?　というか樹季、顔真っ青だぞ！」
「ひいいいい!!」
　背後から悲鳴とガラスが壊れる音がした。
　俺の申し出を最初断った鵺野先生だが、妖怪がその鋭い爪で後部座席の後ろの窓をやぶったのを見ると覚悟を決めたように俺を見た。
「出来るんだな!?」
「は、はい……おえっ」
「いや無理だろ！　具合悪そうだし！」
「じゃあ広お前がやれ！　サッカーで鍛えたお前の運動神経ならなんとか「やりますお願いしますやらせてください!!!!」
　鵺野先生の声を遮って、俺は無理やりハンドルを奪った。じょ、冗談じゃない！　マ

ニュアルで、しかも大型バスだぞ!? リアル小学生に命を預けられるほど俺は心が広くないんだ! だったら俺はやる!! 二度同じつっこみを受けようとも俺がやる!!
「お前って案外熱い男だったんだな……見直したぜ!」
「でも、やるからには頑張ってよ!? みんなの命がかかってるんだから!」
広と郷子の言葉に頷く。この2人は何かと活発でクラスの中心に居るから、最初馴染めなかった俺にもよく話しかけてくれた子達だ。他にも子供がたくさんいる……もちろん自分の命も大事だが、それ以上に大人として子供を守る責任があるのだ。たとえ今は小学生でも、いくら怖くてもここは踏ん張らねば。
「まかせろ! 俺はオートマ限定じゃなくてマニュアルで免許を取ったんだ!」
「いやそれは嘘だろ」
「小学生で免許取れるわけないでしょ」
「……」
いや、もっともなんだけどさ……キメ顔でどやった自分が恥ずかしい。でも嘘じゃないもん……俺、親父の実家が農家だったからトラック運転できるようにってちゃんとマニュアル取ったもん……。休みの日とかじいちゃんとばあちゃん手伝ってたもん……。
しかしへこんでいる場合ではない。俺はなんとかハンドルを切り、カーブの多い難所を越えていく。後ろでは鵜野先生が妖怪を静めようと頑張ってくれているのだ。俺は

俺で、彼が妖怪を何とかするまで持ちこたえねば。
そして途中で鵺野先生が鬼門が閉じて妖怪があの世に帰れなくなっていた原因に気づいた。なんでも新しく出来た高圧線の高圧電流が鬼門の磁場を歪めていたのが原因だったらしい。
「樹季！　俺は奴をバスから切り離す！　お前はバスを避難所に入れるんだ！」
「わ、わかった！」
俺は先生の指示をうけ、彼が妖怪を切り離したことでいくらか自由が戻ったバスの運転に集中した。避難所を見据えハンドルを切り、ブレーキもエンジンブレーキもありったけきかせる。
「先生―っ！」
背後で広たちの悲鳴とバリバリと電気がショートしているような激しい音が聞こえたが、気を取られている場合ではない。
最後まで集中し、俺はなんとか緊急避難所にバスを停止させた。
「た、助かった……」
ぐったりとハンドルにもたれかかりながらも、後ろを見ればボロボロで黒焦げの先生

がこちらにサムズアップを決めていた。妖怪の姿は無く、さっき鬼門の歪みの原因に気づいていたから何らかの方法でそれを正して妖怪をあの世へ帰したのだろう……。

こうして、俺のぬ～べ～クラスでの初・妖怪事件は終わったのだ。

これがきっかけで「ちょっと頼れる奴かも」とクラスで認めてもらえるようになったのは嬉しいが、もうこんなことは懲り懲りだ。でも……まだまだあるんだろうなぁこういうこと……。

ああ、憂鬱だ。

色々なお話

玉藻てんてーと俺（＃１３　鬼の手ＶＳ火輪尾の術より）

昨日玉藻てんてーが来た。おう、妖狐玉藻さんだぜ。ぬ～べ～のライバルキャラになる予定の齢４００歳のお狐様だぜ。教生と偽ってやって来たんだぜ。人化の術ってやつを完成させるために広の頭蓋骨を狙って来たんだぜ。歯ぎしりするレベルのイケメンだったぜ。

知らないふりをするのが物凄く大変だった。

だって、あの人（人じゃないけど）絶対鋭いだろ。もし万が一俺が変な目を向けていることに気づかれて、下手なちょっかい出されちゃたまんねぇよ。まあ広以外に対しては興味が薄いようで、適当にあしらって人気を得るに努めてた程度だから俺の杞憂だったわけだが。

彼との戦いで鵺野先生は大怪我をすることになるが、俺にはどうすることも出来ないし彼は自分で玉藻について気づいて対策を講じるのだから俺が原作知識でもって口出ししたとしても意味が無い。むしろこの戦いを経て玉藻は鵺野先生に興味を持ち後々ライバルながらも頼もしい仲間になってくれるのだ。俺に出来る事なんて本当に何も

無いだろう。

けど広たちと玉藻につけさせるミサンガを作るのは手伝った。ま、さっさと作って玉藻に遭遇する前に俺は帰ったけどな。薄情なようだが俺に出来るのはそこまでだ。

広は最初玉藻になついたように見えたが、危険を感じた鵺野先生の指示によって玉藻に白衣観音経で作ったミサンガをつけさせたのだ。ちょっとご機嫌取りをしたくらいでは広たちの鵺野先生への信頼は揺るがない、ということだろう。先生の事を信じる広に迷いはなかった。

そして翌日広に話を聞けば、案の定激闘を繰り広げて鵺野先生は大怪我をしたらしい。……しかし、それでも包帯を巻いてるとはいえ普通に出勤した鵺野先生は凄いと思う。そして偉いとも思うが、トラックに跳ねられた上に打撲、裂傷、骨折の怪我のオンパレードでも元気そうにしているあたり妖怪呼ばわりされても仕方がないと思った。とんでもないタフさである。さ、流石主人公……。

でもって玉藻だが、こちらも一回負けたくせにしれっと復活して出勤してきていた。といってもあちらも怪我は深刻らしく、耳を澄まして会話を聞いたところによると一時休戦を申し込んだようだ。

それにとりあえず安心して、俺は広たちに声をかけてから先に教室へ戻ろうとした。

しかし、その時だった。

「やあ、樹季くん。おはよう」
「お、おはようございます玉藻先生」
　何で話しかけてくるんだよ！　肩に手を置かれて呼び止められたから無視することも出来ず、俺は恐る恐る振り返った。そこには予想に違わず、憎らしいほどにキラッキラした笑顔を振りまく妖狐玉藻。助けを求めようにも、ちょうどタイミングが悪く周りに誰も居ない。
「あの、俺に何かようですか？　もうすぐホームルームなんで教室戻りたいんですけど……」
「何、そう時間は取らせないよ。ただこれを外してほしくてね」
「これ？」
　玉藻が俺の肩から手を外し、右手を指さす。見ればその手首には昨日俺が作った白衣観音経ミサンガが巻かれていた。
（え、なんでまだミサンガが？　たしか一時的な足止めにしかならなかったって広が……）
「経文で作られたミサンガ、これにはしてやられたよ。他のは大したことがなかったがこれは別だ。拘束力は一日経って弱まったが、まとわりついて離れないのが不快でね。これを作ったのは君だろ？　外してくれないか」

「ミサンガって、何のことです？」
「とぼけなくてもいい。これからは君の臭いがするからすぐわかったよ。私の正体も知っているんだろう？」
「ぐっ」
ずいっと顔を寄せられて思わず後ずさる。うおお！　イケメンの無表情怖ェ!!
っていうか、離れないってなんだ!?　え、俺のミサンガそんな効果抜群だったの!?
何でだよ！
……あ。そういえば、ちょっとでも効果を発揮しますようにって自分の髪の毛を一本編み込んだんだった。髪の毛は霊力が溜まりやすい場所だって聞いたことがある気がするから、願掛けのつもりで一本だけ。まさかそれか？　たしかに俺の霊力って微妙に強いみたいだけど、それが理由か!?　おい、ちょっとしたアイテム作れてんじゃねーか！　よし、これで護身用のアイテム作り放題だぜ！　ひゃっほう！　……とか、現実逃避してる場合じゃないな。つーか聞いた感じ時間経過に合わせて効力薄まるっぽいし、玉藻も鬱陶しいから外したい程度っぽいし……特にいいこと発見したわけでもなさそうだ。むしろ変に機嫌を損なった可能性がある。
「わ、わかったよ。外せばいいんだろ？」
どうせ効果は大したことないんだ。さっさと外して機嫌を取った方が良さそうだと、

俺は玉藻の右手首に巻きついていたミサンガを力任せに引きちぎった。
「ありがとう。……フフッ、君はどうやら将来有望な霊能力者のようだ」
「やめてくださいしんでしまいます」
冗談でもそんな褒め言葉いらねぇよ！　俺は霊力のコントロールは身に着けたいけど先生みたいに妖怪と戦えないから！　霊能力者になる気とかないから！
用は済んだだろうし、俺は脱兎のごとく逃げ出した。……まあ、結局玉藻も教室に来るから後で顔を合わせる羽目になるんだけどな。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

妖狐玉藻はミサンガを引きちぎるなり、律儀にも「失礼します」と言ってから逃げて行った藤原樹季という生徒を彼の背中が見えなくなるまで目で追っていた。その左手は右手をさすっており、その手の下の右手首にはうっすらとした赤い跡が残っている。

（今は微弱な力だが、わずかとはいえこの玉藻の力を封じた才能は素晴らしいな）

昨日生徒たちが作ったミサンガで一時的に四肢の動きを止められた玉藻だが、すぐに霊力で引きちぎって経文で出来た拘束具を無効化した。だが、その中で右手首のひとつだけが千切れずに残っていたのだ。

もともと生徒の中でも霊力が高い子供だと思ってはいたが、まさか霊具を作り出せる能力を備えているとは驚きだ。霊具と言っても単独では指先の動きを鈍化する程度の効力しか無かった上に時間が経つにつれてその効力は失われていったが、それでも玉藻が自力で外せない品を作った……それだけで評価に値する。むしろ将来性を考慮すれば脅威と言ってもよいだろう。

強力な霊能力者はそれだけで厄介だが、その力を品物に込められるとあらば対妖怪の品がある程度流通してしまう。脅威は言い過ぎかもしれないが、人化の術を完成させて人間界に災厄をもたらす際に邪魔になる事は間違いない。

「しかし、今は未来の可能性よりも鵺野先生ですね」

そう言って玉藻はふっと笑う。……興味がわいたのだ。あの教師に。

自分を倒した初めての男、鵺野鳴介。何度倒しても生徒のために起き上がり、ついには負けた。４００年の長き時を生きた妖狐が、人間ごときに負けたのだ！

玉藻はあの男の何処からそんな力が湧いてくるのか知りたいと思った。偶然や時の

運もあるだろうが、それだけで片付けられない何かがある。その秘密を知れば自分の中の何かが変わる。……そう考えると、不思議と心が躍った。

「どれ。手始めに鵺野先生を幻術で引き付けて、広くんに今までの彼の戦いについて聞いてみようか」

そして彼はその後、生徒を守るために妖狐族と戦った霊能力者をことごとく葬って来た「火輪尾の術」を空海レベルまで耐え、最終的に炎を切り裂くに至った鵺野を目の当たりにする事となった。

（鵺野先生……。あなたの力のその秘密、この玉藻が必ずいただく！）

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

鵺野先生が今度は火傷をおった。どうやらまた玉藻とやりあったらしい。だっていうのに、放課後の日課となっている俺の霊力コントロール修行に付き合ってくれるんだから頭が下がるぜ。

せめて何か出来ないかと半分冗談のつもりで、鵺野先生の恩師である美奈子先生の得意技だったというヒーリングを試してみた。っつっても「痛いの痛いのとんでけ～」レベルのおまじないだが。でも先生なら可愛い生徒の気遣いってだけで元気になってくれそうだからな。女子生徒でないのが申し訳ないが、少しは気休めになるだろう。

「治れ～治れ～……なんちゃって」

「……なあ、樹季」

「はい？」

「なんというか……。お前、俺が思ってる以上に凄いかもしれん」

「え？　どういうことですか、それ」

「えっとだな。お前は冗談のつもりなんだろうが……効いてるぞ」

「……何が？」

「ヒーリング」

「……はい？」

　鵺野先生の言葉が最初理解できず、俺はハトが豆鉄砲くらったような顔をしていたと思う。
「疲労をわずかに取る程度だが、イメージだけでヒーリングが出来るなんてすごい才能だぞ！　えっと……けど、言いにくいんだがな……その……」
「あの、覚悟するんで一思いに言ってくれませんか。デメリットは何です」
「お前って変なところで潔いなぁ。えーとだな、お前は覚えもいいし、今の段階でも俺が小さいときに悩まされたような霊障には悩まされなくていいと保証出来る。けど高い霊力は本人の意思に関係なく時に力の強い妖怪や霊を刺激するんだ。いくら隠しても、格の高い相手にはバレてしまうからな。つまり」
「襲われやすくなる、と」
「う、うん。そういうことだ。でもそんな死刑宣告されたみたいな顔するなら自分で言わなくても……。えー、だから、その……な？　俺も精一杯フォローするから、樹季、お前もうちょっと本格的に霊能力を学ぼうか」
「……」
「だ、大丈夫だ！　先生に任せろ！　き、きっとどんな妖怪にも負けない霊能力者にお前を育ててみせ「嫌だ」……樹季？」

「嫌だぁぁぁあああああああああ‼‼　霊能者になんてなりたくないぃぃぃぃぃぃぃ‼‼」

俺の慟哭が、夕日差し込む校舎の中に木霊した。

喫煙者にはつらい世の中になりまして（＃１９　魔の１３階段より）

今日、広たちに魔の十三階段を数えてみないかと誘われたが断固として拒否した。件の階段は旧校舎にある屋上に続く階段だが、普通の階段すら数えて恐る恐るのぼっているというのに何故わざわざピンポイントで「魔」とか噂されてる場所に行かねばならんのだ。俺は絶対に行かないからな!!

……いや、一応心配だから鵜野先生に広たちが階段んとこ行ったって言っておいたけど。さっき奴らが無事に「やっぱ何度数えても１２段しかなかったぜ～」とぼやきながら帰って来て安心した。

なんでも鵜野先生によれば「魔の十三階段は悪い子にしか見えない」とのことらしいが……う～ん、この回ってたしか克也メインの話しだったか？　けどさっきは広、郷子、克也の３人で行って何も無かったみたいだしなぁ。

ま、何も無いならそれが一番だ。そう思いながら、俺は校舎裏を歩いていた。

今日は掃除当番だったから焼却炉にゴミ箱を持っていかねばならんのだ。……うう

うっ、本当はこの学校で一人行動はなるべく避けたいんだけど、ゴミ捨てに行くだけなのに誰かついてきてっていうのもカッコ悪いしなぁ……男のプライドと恐怖を天秤にかけた結果プライドを取るあたり、まだまだ俺もひよっこである。時にはプライドを捨てないといけない時もあるってのにな……。

しかし焼却炉に行く途中、ふと違和感を感じてくんっと鼻を鳴らす。なんか嗅ぎ慣れてたけど今はもう懐かしいにおいがしたような……。

「って、あ！　克也お前タバコ！」

「げっ、樹季!?」

気になってにおいを辿ると、そこには煙草をふかす克也がいた。小学生のくせに妙にタバコを吸う姿が様になっている。慌てたようにのけ反って背後の壁に頭をぶつけた克也は、痛がりながらもしどろもどろに言い訳しようとしていた。が、見てしまった以上誤魔化せるものでは無い。

ここは心を鬼にしてガツンと言ってやらねば。今は同級生とはいえ、俺は大人なんだ。小学生の喫煙を見過ごすことなどできない。

しかし俺の口から出たのは別の言葉だった。

「た、頼む！　俺にも一本分けてくれ！」

「え？」

「ちゃうわ馬鹿野郎!!」
「え!?」
　思わず飛び出た言葉に、自分で突っ込んで自分の顔面にパンチした。あ、アホか！
叱るどころかたかってどうする!!　でもあのにおいを嗅いだらつい……！
「無し、今の無し！」
「え、樹季ってタバコやんの？　そっかぁ……真面目そうなお前がなぁ……へぇ～！
そっかぁ……！」
　おい、何嬉しそうにしてんだよ！　ちょっとワルな俺にも仲間がいたぜみたいな顔すんなよ!!　叱りにくくなるだろ!?
　けど、つい本音が飛び出てしまった俺をどうか許してほしい。誰に許しを乞うているのかも分からないが、とにかく言い訳がしたかった。
　だって俺、２５歳だったんだぜ!?　喫煙してＯＫなお年頃！　しかも超ヘビースモーカーだったんだよ!!　今では小学生のまっさらな体で超健康生活中な俺だけど、この世界に来る前はヤニと友達だったのだ。セブンスターたんは親友。
　だが煙草を吸い始めて早５年……喫煙者が背負う業を理解するには十分な期間だった。不本意だがせっかく小学生からやり直せてるんだし、同じ轍は踏むまい。
　俺は咳払いして気を取り直すと、克也の肩をがっつり掴んだ。

「克也、悪い事は言わん。タバコはやめておけ」
「はあ？　でも、今お前くれって言ってたじゃん。樹季だって吸ってるんだろ？　何でそんな奴に注意されなきゃならねーんだよ」
「だから、今の無しだって！　それに（今の）俺はタバコ吸った事無ぇよ！　……とにかくだな、端的に言うぞ。タバコはな、吸ってる姿っちゃあ格好いいが駄目だ。何が駄目って、健康とか当たり前のことはすっとばして言うがとにかく金喰い虫なんだよ!!
　たとえば今、セブンスターは２２０円だろ？　１９０円のジャンプよりはちょっとお高いが、まだ安い。それが将来的に倍になるんだぞ。倍だぞ倍!!　最終的にひと箱４６０円だ！　２０本４６０円……一本あたり２３円だぜ!?　これを一日ひと箱吸ってみろよ。一か月で１４０００円弱だ！　１４０００円が安月給の手取りをどんだけ追い詰めると思う!?　１４０００円あればいい肉食えるし値上がり前のねずみの王国のワンデーパスポートをペアで買えるお値段だ！　ペアで行く相手は居なかったけどな！
　それだけの金が消えるのに、はまっちまえばやめられないんだぞ！　しかも税金ばかり上がって金をむしり取るくせに、喫煙者の立場は日に日に追いやられるばかり……！
　道で吸えば子連れのお母さんに白い目で見られ、会社で喫煙スペースに行けば上司と鉢合わせて気まずい思いをして、行く先々で喫煙お断りの文字の羅列に遭遇する……！
　一部のマナーの悪い連中のせいで余計にそれが加速するんだ!!　そんな金ばかりか

かって白い目で見られる煙草を、早いうちから始めたらそれだけ色んなものが無駄になるんだぞ！　せめて吸うなら二十歳になってからにしろ！　分かったか!?」
「お、おい落ち着けよ。あと何言ってんだお前」
　タバコのデメリットについて力説してたらドン引きされた。い、いかん……デメリットというなら、せめてもっと健康面から攻めるべきなのに思いっきり私情が出てしまった。
「……とにかくだ！　今回は黙っててやるから、もう吸うなよな」
「へいへい、わかったよ」
　降参とばかりに手をあげて了承した克也だが、これはあんまり真面目に受け止めてないな。……まあ長い付き合いになるんだろうし、また似たようなことがあったらその都度口うるさく注意してやめさせればいいか。

　そしてその日の放課後、明日行われる全国模試にむけて補修が行われた。一応中身大人で、勉強から離れてしばらく経つとはいえ小学生レベルなら問題ない俺は当然帰ろうとした。みんな居るとはいえ、放課後の校舎に残るとか怖すぎるからな！　……と

か思ってたのに、広に「お前だけ逃がさんぞー！」とつかまり、俺の事を勉強面でのいいライバルだと思っているらしい昌に「お互いあまり心配ないとはいえ、万全の態勢で明日を迎えようよ！」と熱く引き留められて残る羽目になってしまった。何故に！

……とほほ。

しかしその途中、克也がこっそり教室を抜け出している場面を発見してしまった。忍者かあいつは。

またシケモクふかして休憩でもするのか？　お前だけ許さん！　と思ったら、気づけば「トイレに行ってくる」と言って俺も教室を出ていた。廊下の蛍光灯がついてるとはいえ、人気の少ない校舎はやっぱり怖い。が、若者の喫煙を許すまいという崇高なる使命感が俺を突き動かし、薄暗くなってきた外にビクつきながら廊下を進む。

するとその途中で何か陶器が割れる音がしたと思ったら、職員室から克也が出てきた。手には何やら白い紙と……ちょ、まさかとは思うが勉強が嫌だから答案用紙を盗んだのか？　あと隣に誰か居るな。う～ん、向こうの蛍光灯切れかかってて薄暗いな。見辛い……そう思って目をこらしたが、俺はすぐにそれを後悔した。

「かちゅや!?　じゃねぇ克也！」

「！　またお前かよ樹季！」

悲鳴じみた声で叫ぶと、克也はチッと舌打ちして隣に居た人物と一緒に廊下の奥に駆けて行ってしまった。俺はぶるぶると震える足のせいで動けなかったが、陶器が壊れる音を聞いたからか鵜野先生と広たちが駆けつけてくれた。それを見たら一気に力が抜けて座り込んでしまい、そしてそのまま鵜野先生の足にすがって克也が駆けていった方角を指さす。

「先生！　か、克也が……克也が頭ぐっちゃぐちゃの脳みそはみ出た奴に連れてかれた！」

「！」

「え？　今の隣に居た子の事？　たしかに見たことない子だったけど、普通だったわよ？」

郷子が不思議そうに言うが、しかし俺ははっきりと見たのだ。克也と一緒に居た奴はどう見たってご臨終必至の怪我を負った人間……というか、完全にアウトだろアウト！

絶対妖怪とか霊の類だろあれ!!　何でみんな見えてないの!?　なんで俺だけあのグロ画像直視しちゃったの!?　てか本性が見えてたら克也君はついて行きませんでしたねそうでしたね！　あれか、擬態か！　だったらもっとちゃんと化けろよ何で俺だけ見えてんだよ!!　ちょ、ちょびっとちびりそうになっただろ!?　ちびってないけどな!!

「いかん！」

「ちょっと、ぬ～べ～!?」

鵺野先生がぱっと走り出し、その後を郷子と広も追う。あと気になってついてきたのか、まことも一緒だ。追うのはいいが、広お前何故俺の腕をつかんだ！　「行くぞ樹季、しっかりしろよな！」じゃねぇよ！　郷子も「もう、だらしないわねぇ」じゃないよ！

２人して引っ張らなくていいよ!?　お願い俺は置いてって!?

が、その願い空しく気づけば旧校舎の屋上へと続く魔の１３階段へと来ていた俺たち。でもって、階段の一番上で何やら異空間に引きずりこまれそうになっている克也。そしてその足元を見れば、本来あるはずのない階段が……血で出来た１３段目が出現していた。

「は、はなせー！」

「克也ー!!」

ついには引きずり込まれ、異空間に消えた克也が「ひぃぃ！　血の部屋だー！」という声を響かせる。どうやら見えなくなっただけで、まだ空間は閉じきっていないようだ。

「ぬ～べ～！　克也が消えちゃった！」

「見ろ！　血の階段が！」

広と郷子がその現状を指さして叫ぶと、額に汗をにじませた鵺野先生がここの霊は何

度も成仏させようとしたが、経文に耳も貸さない奴らだと言った。聞けばここの霊たちは皆子供のようだが、悪い子にしか階段を見せないって事は仲間になりそうな奴を引きずり込もうって腹か。しょ、小学生のくせになんて質の悪い……！　いや、子供の霊だからこそ余計に我儘だってこともあるのか。

　鵺野先生が閉じた異空間を鬼の手で切り裂くと、その中は文字通り血の部屋だった。何処とも知れない場所から赤黒い血が壁一面に滴り、腰までつかるほどの血だまりとなっている。むわっと押し寄せてきた濃厚な血の臭いに吐き気がした。

　その中に血まみれの霊たちに体中をつかまれた克也が居て、こちらに必死に助けを求めてきた。

「たすけてくれ～先生～～っ！　俺、こんな奴らの仲間は嫌だ！」

「克也を放せ！　さもないと全員鬼の手でたたっ切るぞ！」

　しかし、霊達は鵺野先生の言葉にケタケタ笑って「やれるもんならやってみろ！」

「知ってるんだぜ？　てめえが子供には手出し出来ないってことを」と、全く怯える気配が無い。……これにはビビりの俺もカチンときた。だからこそ、鵺野先生の横を抜けて克也を助けに血の部屋に飛び込んだ広たちのあとに続いてしまったのだろう。クソガッキヤぁ！　調子こいてんじゃねぇぞ！　ってな。後で思い返せばノリに呑まれてしまったんだと思う。この時ばかりは恐怖心が吹き飛んでいた。

でもって、果敢にもバットと椅子で霊を殴る広と郷子（克也に引っ付いているからかまさかの物理攻撃有効である）、霊の背中にひっついて克也から引きはがそうとするまことに負けまいと俺も拳を振るった。

俺の拳はなかなかのもんだったぜ？
だけど、当たった場所が悪かった。よりにもよって……よりにもよって、最初克也を連れてった脳みそむき出しの奴の脳みそに拳を突っ込んじまった。

「ぎゃあああああああああああああああああああ!!!!」
口に！　今口に何か入った！　ぴゅって何か跳んできたぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!　ぶじゅって何か潰れたぁぁぁぁぁぁぁ!!　目測誤ったわクソがぁぁぁ!!!!!
「お、おい樹季!?　ッ、しょうがねぇな」
後で聞けば、白目向いて気絶した俺を克也が抱えてあの部屋から出てくれたらしい。助けたつもりがまさかの助ける対象に助けてもらう体たらくとは……。克也に「樹季ってあんがいビビりだったんだな」って笑われて凄く恥ずかしかった。うっせ！　平気な

お前らの神経が図太いんだよ！

そんなわけで俺としては酷く情けないが、その件の後から克也が前より気安く話しかけてくるようになった。

みんなに助けられたからか、鵜野先生が何か言ったのか……克也は前よりもっとクラスに馴染んで、スッキリした顔で「本当の仲間ってのはお互いの欠点を補いながら成長していくんだってよ」としたり顔で言っていた。まあ色々危なっかしい所はあるけど、あんなクソガキ霊どもに仲間扱いされるような奴じゃないよお前は。

だからってビビりの俺に連れションやらゴミ捨てに付き合ってやる代わりに勉強教えろって言うあたり、ちゃっかりしているけどな。けど答案用紙を盗んだことを先生にちゃんと謝って自分で勉強する気になっただけ大きな進歩か。よーし、せいぜいビシバシ教えてやろうじゃんか！

ちなみに、俺はその後しばらく大好物だった白子が食べられなくなった。

ロイヤルプラチナノーブルフラッシュレインボーだよ馬鹿野郎！（＃２４　Ａが来た！より）

Ａに出会うとこう聞かれる。赤が好き？　白が好き？　青が好き？

青と答えれば水に落とされて殺される。
白と答えれば体中の血を抜かれて殺される。
そして赤と答えれば、血まみれにされて殺される……。

。。。。

気づいたのは放課後、帰路の途中だった。

今日は童守町全体を何やら物々しい雰囲気が包んでいる。大人たちは一枚の紙を手にあたりを警戒し、パトカーが何台も道を行き交っていた。

よそよそしい態度をとったかと思えば、ピリピリとしながら子供たちに早く帰れ、寄り道をするなと警告する大人に子供たちは困惑する。俺はその様子を見ながら喉が酷く乾くのを感じた。

（まさか、今日なのか）

ごくりとつばを飲み込んで、手に汗を握った。そしておぼつかない足取りで歩き、帰り道の途中の駄菓子屋で爆竹とＢＢ弾、玩具の銃を買い込んだ。情けない装備だが、事前に準備できなければ俺に出来る自衛手段などこんなものだ。

本当なら、さっさと家に帰るべきだ。今はまだ早い時間で、空も青く怪しい夕暮れ時までには時間がある。

だけど今日はたしか広たちが教室に残って、学級新聞を作っていなかったか……？

ああそうだ。そういやさっき、教室を出る前に「お疲れ～。まだ随分とかかりそうだな。

頑張れよ」と声をかけたんだっけ。

そう考えたら、気づけば俺はなけなしの装備を手に学校へと戻っていた。広、郷子、美樹はやはりまだ教室に残っていて、「あれ、樹季どうしたの？」と聞かれて俺は引きつった笑いで「忘れ物」と嘘をつく。ドジだと笑われて、俺も内心を悟らせないように笑った。多少引きつっていたのはご愛嬌だ。

その後他の大人たちのように妙にピリピリとした雰囲気の鵜野先生に早く帰るようにと促されて、俺たちは帰宅することになった。

最初こそ鵜野先生に無理言ってでもつきそってもらおうとも思ったが、多分大人が近くに居れば”あいつ”は出てこないだろう。もちろん会わないのが一番いいけど、それだと別の誰かが被害にあうか日をずらして別の日に襲われるかもしれない。……そう考えたら、遭遇した時の対策もろくに無いのに俺は先生に何も言えなかった。

多分、俺のせいじゃないけど俺のせいで別の誰かが死ぬかもしれないってのが怖かったんだ。「本当に会うわけないかもしれない、大丈夫かもしれない」って甘えもあったんだろうな。

けどそれで広たちが本当に奴に遭遇してしまったなら、不確定ながら未来を知ってたのに対策出来なかった俺の責任だ。誰がそれを知らなくても、俺は、俺自身だけはそれを知っている。だからせめて俺に出来る精一杯をやろうと思ったんだ。後になってと

んでもない自惚れだって痛感することになるんだけどな。
太陽が姿を隠し始め、それに伴って足元の影が伸びていく。
広たちは俺が違和感を感じたように周囲のものものしい雰囲気を疑問に思ったようで、町全体の嫌な空気に不満そうにしていた。

そして、ふと周囲から人の気配が途切れた時だ。人の視線から外れ、ぽっかり空いた空白。俺たちだけしかいない空間。
そこに奴は来た。

『赤が好き？　白が好き？　それとも青が好き？』

血で染まったような真っ赤なマントに、シルクハット。黄昏時の薄暗い空気にぼやっと浮かぶ白い仮面。……手品師か、はたまたどこぞのサーカスから抜け出してきた道化師か。何も知らなければ、その奇妙な風貌に笑ったかもしれない。しかし俺は知っている。コイツの正体を。

怪人A。30年間も捕まらない、下校中の子供を狙った殺人鬼。すでに100人以上が惨殺されているという。噂によればもとは普通の床屋だったが、子供のいたずらで店が火事になり大火傷を負ったAは、子供を酷く憎んでいるという……。

だけど頭で考えていたように体が動かない。そしてそんな俺の気も知らないで、男の妙な格好に笑っている広、郷子、美樹が問いに答えてしまった。

「俺は燃える闘魂の赤！」

「あたしは清純派の白！」

「わたしはブルーベリージャムの青！　で？　答えると何かくれるわけ？」

答えた後にお気楽にも男に近づく美樹を見て、固まっていた体が跳ねるようにして動く。

「ロイヤルプラチナノーブルフラッシュレインボーだよ馬鹿野郎!!!!」

俺はやけくそに叫ぶと、父さんからくすねて持っていたライター（キャバクラの名前が書いてあったのには目を瞑る）で爆竹に火をつけ赤マントの男こと「怪人Ａ」に投げつけた。

「え、樹季!?」

「簡単に言うぞ！　そいつはロリショタ限定変態妖怪殺人鬼だ！　近づくな殺されるぞ!!」

「いい!?　なんだそりゃ！」

「広、女子後ろに下げろ！　でもって逃げろ！　鵺野先生呼んでこい!!」

少しでも怯めば足がすくむと、怒声に近い声で叫んだ。しかし突然のことに広も郷子も美樹も戸惑っている様子で、いまいち動きが鈍い。そしてＡは爆竹などものともしないようにマントで振り払うと、ぼそりとつぶやいた。

『レインボー……七色……プラチナ……白……。つまり、全部』

「まさかのポジティブ解釈にビックリだよ!!」

そんな前向きに物事を考えられるなら火傷にくじけず真っ当な人生を生きてくださ

いクソが!!

俺は微量ながら霊力を込めて玩具の拳銃でＢＢ弾を撃つが、浮遊霊程度ならともかく当然ながら人間相手じゃ効きやしない。

そうなのだ……。この男、妖怪じみてはいるが生身の人間である。強かろうが弱かろうが、そもそも霊能力が効くわけなかった。しかし無抵抗というわけにもいかず、残りの爆竹も全部投げつけようとライターに手をかけた。

が、気づけば音もなくＡの仮面が真正面に迫っていた。

のっぺりとした白い仮面の下からのぞくぎょろりとした目と視線がぶつかり、俺は金縛りにあったかのように固まった。

「「樹季!?」」

「ひっ！」

強く手首を掴まれ、その強い力にぞっと体が震える。引っこ抜こうにもビクともせず、俺は今さらながら大人と子供の力の差というものを思い知った。赤子の手を捻るように、という表現がふと頭をよぎる。

……妖怪相手じゃないと、化け物じみていようが正体は胸糞悪い殺人鬼だと、そ

う思ってちっぽけな大人としての矜持を奮い立たせたつもりだった。だけど俺は今の自分も無力な子供であるという自覚が薄かったらしい。手を振り払えないってだけで怖くて怖くてたまらなかった。

だけど、ただ黙ったままでは良いようにされるだけだ。

思いっきり虚勢だが「テメェのタマキンぶっつぶしてやらぁ!!」と叫んでＡの股間めがけて足を蹴り上げた俺頑張った。超頑張った。けど、つま先が捕らえたのは布だけで……はずしたぁぁぁぁぁぁぁ!!!!　なんだよこいつ足超長ェよ!!　マントで分かりにくいけど股の位置たっけぇな!!

で、そうこうしてたら気づけば体を抱え込まれて宙を舞っていた。見上げれば仮面の下から酷い火傷のような爛れた肌をのぞかせるＡの顎……こんなローアングルいらんわ！　どうせ下からのぞくんだったら女子高生のパンツとかが良かった。

けど、そんな阿呆な事考えてる余裕はすぐに無くなった。

俺はＡに学校の屋上にある貯水槽に連れて行かれ、まず逆さに吊るされて首にいくつもの細い管をぶっ刺されて血を抜かれた。そしてそのまま体を真正面から鎌で切り裂かれる。あたりには俺の血が飛び散り、切り傷の方は浅いものの「あ、これ死んだ」と思った。けど反面、考える力が残ってる分まだ大丈夫だとも思ったんだが……。

貧血で意識がもうろうとする中、ぶっといロープに石をくくり付ける奴の姿が映る。

そしてそれは俺の体にくくり付けられ……。って、おい。

待て待て待て!!　死ぬ、今の時点で死んでないのが嘘みたいだがそれはガチで死ねる!!　助けられる前に死ぬ！　出血した状態で重石付きで水の中放り込まれたら普通に死ぬ!!

しかし意識に反して俺の体はぐったりとして動かない。そして俺の小さな体が持ち上げられて……。

「そこまでだ！」

ぬーべー先生イィィィィィィ!!!!!

もう駄目だ、そう思った時だ。我らがヒーロー、鵺野先生が駆けつけてくれた!!　ナイス、圧倒的ナイスタイミング!!　流石主人公!!　あんた最高だ!!

　Ａは鵺野先生を見ると、思いのほか潔く逃げ出した。しかし俺は忘れていない……俺以外に、奴に回答してしまった子供の事を。
「せ……んせ……」
「樹季、樹季！　大丈夫か!?　待ってろ、今すぐ救急車を呼んでやるからな！」
「俺は……まだ、大丈夫……だけど、広たちが……危ない……あいつらも、Ａに答えちまってる……」
「！　しかし、」
「い……行って！　行ってくれよ!!　すぐ下だ！　俺は、自分のヒーリングで、なんとか、する……から！」
「樹季、お前……」
　渋る鵺野先生を行かせるために、何とか回復しようと自分自身にヒーリングをかけた。すると以前より効果が増したのか、叫ぶ力くらいは戻って来たようだ。心なしか傷も少し塞がった気がする。……ヒーリングって、自分にもかけられるんだな。ぶっつけ本番の思い付きだったが良い発見をした。
「行ってくれ！　お願いだから！」
「くっ、……わかった。お前の気持ち受け取ったぞ！　広たちは絶対に助ける！　それまで死ぬなよ！」

「っす！」

鵺野先生と拳を突き合わせると、俺はぐったりと体を地面に投げ出した。

ヒーリングの力を意識して体中に広げ、回復を促す。どうやら他人に施す場合でなければ手のひらから気を発する必要は無いようだ。霊能力に目覚めた時は全力で能力を地面に叩き付けたかったが、命が助かるならそう悪いばっかりのもんでも無いか……。

それにしても馬鹿やったもんだ。

鵺野先生みたいにとはいかなくても俺だって中身だけとはいえ大人だ。無意識に妖怪相手じゃビビって駄目でも人間相手ならちょっとは子供を守れるかもって思ったんだろうなー……。いや、フタを開けたらキチガイ殺人鬼ってレベルを超越した化けモンだったわけだが。子供とはいえ人一人抱えて屋上までひとっ跳びってなんだよ。怪人ってか超人だろ。

時間稼ぎくらい出来るかと自惚れて、爆竹の音で大人が駆けつけてくれないかと期待した。……だけどその結果がこの様だ。かっこ悪ィな、俺。

「頼むぜ、先生。あいつらを助けてやってくれよな……」

出来る限りの回復をした後、俺は意識を手放した。

目覚めた先は病院だった。

気絶していた時間はそう長くなかったらしく、ベッドの傍には鵺野先生、広、郷子、美樹が居て目覚めた俺に口々に声をかけてくれた。両親にも連絡してくれた後らしく、もうすぐ２人とも来るらしい。……驚かせただろうなぁ……。

「樹季、大丈夫か!?　ったく、無茶しすぎだぜ。……けど、助かった。ありがとな」

「広……。お前らは大丈夫だったのか?」

「ああ、ぬ～べ～が助けてくれたからな！」

「そうそう！　Ａの体からこう、バリバリって幽体を引っ張り出しちゃってさー！　あいつすっごく慌ててたのよ！」

「美樹、樹季は病み上がりなんだからあんまり近くで大きな声出さないの！」

「郷子、お前も結構声デカいぞ?」

「え、あ、ご、ゴメンナサイ……」

普段通りの様子に、思わず笑ってしまった。でもって傷に響いて超痛かった。

鵺野先生に聞けばAは鵺野先生と戦った後、ダルマストーブの火がマントに燃え移って窓から落ちて死んだらしい。しかしその後噂で死体が何処を探しても見つからないと聞いた。……どこまでも不気味な奴である。

貧血でくらくらするわ切り裂かれた傷は痛いわ、真っ青な顔で駆けつけた両親には泣かれるわ、仲間を心配する気持ちは立派だがもっと自分の事も考えろと鵺野先生に諭されるわ……散々な一日だった。

しばらくは相手がサンタクロースでも、赤い色の服は見たくない。

我が家にタヌキがやってきた！（＃４３　変身！ポンポコポンより）

今日学校にタヌキが出た。しかもただのタヌキではなく、エクトプラズマという霊媒物質を使って変身する正真正銘の化けタヌキである。

そいつは鵺野先生に化けて律子先生にイタズラしたり、５年３組の給食を食い尽くしていったり、真っ裸（もちろん鵺野先生の姿のまま）で爽やかに走ったり……直接的に俺たちへの被害は無かったものの、鵺野先生を社会的に殺そうとする恐るべき相手だった。ま、まあその原因は鵺野先生の妄想をタヌキが読み取ったせいだったりするわけだが……。律子先生には山芋（比喩）という被害まで出したし……うん。恐るべき相手だったな！

みんなでタヌキを探す際、ビビりの俺が見つけてしまったら俺の今までの恐怖体験を感じ取ってとんでもない妖怪キメラに変身してしまうのでは……。そう思ってあまり真面目に探さなかったのだが、ふと気になって掃除用具入れを開けたら見つけてしまった。最近無くしものをしてもすぐに見つけられる事が多く、勘が鋭くなったのかと喜んでいたがこんなところで発揮されなくても……。

が、いざ見て見れば霊媒物質を発して変身しようとしているもののタヌキは可愛かった。俺動物好きだけど、実家の時は面倒見切れないだろうから飼うなって言われて、一人暮らしの時はペットNGのアパートだったから身近に動物居たことなかったんだよな。だからつい可愛くて手を伸ばせば、思いのほかすんなりと頭を撫でさせてくれた。

そのまま抱き上げて「捕まえたぜー」とクラスのみんなに報告すると、最初は恐る恐るだったものの皆も可愛い可愛いとタヌキに寄って来た。すると好意的な感情を寄せられたからか、タヌキはエクトプラズマを発することをやめて大人しく俺の腕に抱かれて撫でられていた。……可愛いな、こいつ。

鵜野先生にも「よくやったぞ樹季！」と感謝され、今回の騒動は非常に穏やかな終わりを迎えた。

しかし問題はこのタヌキをどうするか、だ。一応しばらく学校で飼って変身しないように教え込むという運びになったが……問題は俺である。

なんというか、タヌキに懐かれた。俺が離れようとすると切なげに鳴くわ、それでも離れようとすると変身して（美樹の記憶を読み取ったのかろくろ首になって首だけ伸ばして来て泡吹くかと思った）ついて来ようとするわ……撫でて抱き上げただけなのに、何故こうも懐く。俺は動物限定の撫でポスキルでも持っているのか？

「多分、こいつはお前の気に惹かれてるんだろう」
「気？」
　鵺野先生の言葉に首をかしげると、俺に抱かれて気持ちよさそうに目を瞑っているタヌキを撫でながら先生が言う。
「ヒーリングを使えるお前の気は優しい慈しみの気配がするんだ。動物は人間より霊感が強いし、特にこいつなんて変身までする。色んな人間に捨てられたコイツにとって、優しい感情を向けてくれたお前の気に安心して仲間みたいに思っているのかもな」
「はあ……そっスか……」
　あながち撫でポスキルが間違っていなかった件。え、じゃあ俺がこいつ可愛いな～優しくしたいな～って思えば動物は俺にベタ惚れ？　な、なんてこった……！　こりゃあ、もっふもふのおさわり天国も夢じゃないぞ！
　と、冗談言ってる場合じゃないか。この分だと帰宅する時もついてきちゃいそうだなぁ……。
　ふと見下ろすと、目を覚ましたのか俺を見上げてくるつぶらな瞳と目があった。
「うっ」
　や、ヤバい……！　撫でポとか言ってる場合じゃないぞ。俺の方が落とされそうだ。というか、あと一押しされたらまず……

ペロッ

「先生、こいつ俺が飼います」

頬っぺたを舐められて瞬時に俺の心が陥落した瞬間である。

その後俺は、前の世界の時のように「面倒見切れないだろうからダメ」と反対されるも、今年の誕生日プレゼントとクリスマスプレゼントはいらないからと両親にねだりにねだってタヌキを飼う許可を勝ち取った。

色々申請したり許可をもらうのが大変だったが、なんとか先日タヌキは我が家族になった。化けタヌキだけあって普通のタヌキより（といっても普通のタヌキがどんなもんか知らんが）頭がいいコイツはすぐに両親にも気に入られて、現在我が家のアイドル

である。

今日も俺の使い捨てカメラが火を噴くぜ！　後で父さんに仕事帰りに印刷出して来てくれって頼まないとな！

多分以前の生活にこいつがいたら、今頃俺は慣れないインスタグラムやフェイスブックにも手を出して画面をタヌキの写真で埋めていただろう。きっとユーチューブにも手を出してたな！　こいつの愛くるしい姿を全世界の人間に見せてやりたいぜ！

ちなみに名前は「豆太郎」にした。豆みたいに小さくてつぶらな瞳が可愛いからな！

これは日頃の憂鬱な気持ちが少し軽くなった、ちょっと嬉しい出来事の話。

……まあ、おまけで化け癖を治させるという使命が追加されたんだけどな。

豆太郎は現在俺と一緒にぬ～べ～先生と修行中である。

誰かに知ってほしかった（#45　前世の記憶より）

今日、広の母親が学校にやってきた。といっても、彼女の生まれ変わりである幼稚園児の女の子なのだが。

平行世界の自分に魂が入るという転生と言えるのか分からない俺の奇妙な転生と違って、彼女は輪廻転生を経て新たな生を受けた正真正銘の転生者だ。……と、思う。見るのが初めてだから確証はないけど、時々その少女に優しい笑みを浮かべた大人の女性の幻影が重なって見えたのだ。多分あれが生前、というか前世の姿なのだろう。

あまりにも前世についての記憶が鮮明であり、前世の傷跡まで体に受け継いでいた少女。鵺野先生が鬼の手で彼女の記憶を探り、れいこちゃんという幼稚園児が本当に広の母親の生まれ変わりだということが分かった。

その後、本当なら母親として生きていた時に広にしてあげたかっただろう世話を甲斐甲斐しく焼き、楽しそうに（広は恥かしそうに）町を巡る2人を俺、鵺野先生、郷子、美樹が見守る。最初は迷ったのだが、どうにも他人ごとに思えなくてついてきてしまったのだ。

そしてあっという間に一日過ぎて夕暮れ時……。広のお母さんの記憶は、幼稚園児の

れいこちゃんから消されることになった。
「前世の記憶は強すぎると……この子、れいこちゃんの人格にとってよくないんだって。そりゃそうだよね……。いつまでもお前のお母さんで居たいけど、そうしたらこの子のお母さんが悲しむものね。そんなことは出来ないわ」

ずくんと、心に何か突き刺さった気がした。

そして一言お母さんと呼んでほしかったと、結局最後まで恥ずかしがってその一言が言えなかった広の前で彼女の前世の記憶は鬼の手の力によって消された。
しかしそうなってやっと素直になれた広が、少女の体にすがって本当は寂しかったと、恥かしくて言えなかっただけなんだと泣き叫ぶと一瞬だけ……本当に一瞬だけ、今まで幻影のようだった前世の姿が実体化した。つかの間の邂逅に「馬鹿ね……男の子がめそめそ泣くんじゃありません。でも……やっとお母さんって呼んでくれたのね。ありがとう、広ちゃん」と言って、広の頭を撫でてから満足そうに消えていった広の母さん。……それを見ていたら、気づけばすっと目から涙がこぼれていた。

その後、俺は「聞いてほしい話がある」と言って鵺野先生の部屋にお邪魔していた。両親に遅くなることを連絡すると、後で仕事帰りの父さんが迎えに来てくれるとのことだ。残業で少し遅くなるらしいが、その方が好都合だった。……多分、長くなる。

霊能力の修行は放課後学校か、俺の家（霊能力修行に関しては両親も承知済みだ）か鵺野先生の家にお邪魔して行われる。両親は今日もそれだと思ったらしく下手に言い訳しなくていいのは助かったが、いざ話すことを考えると玄関から先に進む勇気が出ずに足がすくんだ。

「どうした？　遠慮せずに入れって」

「あ、ありがとうございます」

ほがらかに笑う鵺野先生。……もし俺がこれから話すことを聞いたら、彼はどんな顔をするのだろうか。

汚くはないが乱雑に物が置かれたいかにも一人暮らしの独身男の住み家、という感じの部屋は今日も変わらないようだ。俺が部屋に入る前に慌てて足で布団の下に本を突っ込んだのは見なかったことにしよう。ちょっと肌色が多い表紙のそれに内容を悟った俺だが突っ込むなど無粋なことはしない。うむ、俺も男だ。見ても軽蔑はしないが、子供に見られて気まずい気持ちは分かるぞ。

「さて、俺に話があるんだったな」
　話を切り出した鵺野先生に、俺から話を聞いてほしいと言ったにもかかわらず上手く言葉が出てこなかった。しかし鵺野先生がいぶかしむ前に、タイミングが良いのか悪いのか……「ぐ～」という間抜けな音が響く。最初は俺の腹の虫かと思ったが、正面の鵺野先生が恥ずかしそうに咳払いをしているところを見ると彼の空腹を知らせる音だったらしい。
「すみません、夕食時にお邪魔して」
「な、な～に！　子供が気を使うんじゃないって！　それより樹季こそ腹減って無いか？　よかったら御馳走するぞ。……といってもカップ麺だけどな、ははは」
　最後の方は情けなさそうに笑う鵺野先生だったが、ふと思い立って立ち上がった。
「ん？　どうした、樹季」
「いつもお世話になってるんで、よければ俺が何か作りますよ。……まあ、材料があればですけど」
　申し出たものの、果たしてこの男の冷蔵庫にまともな食材はあるのかと不安に思う。が、ちょいと覗き込めば卵が一個、キャベツと人参のはしっ端、納豆が入っていた。……本当になけなしの食材だな。けど聞けば小麦粉と片栗粉、調味料はあるらしいから何とかなるかと気を取り直して腕まくりをした。……小麦粉とかはもらいものなのか使っ

た形跡がなく賞味期限が怪しかったが、粉だし大丈夫かと目を瞑った。
気合いを入れる俺に、鵺野先生は不安そうに問いかける。
「お、おい。本当に作るのか？　気を使わなくていいんだぞ？　たしかにお前は家庭科の成績は良いが……」
「いいから、すぐ出来るんで先生は座っててください。台所借りますよ」
俺としても緊張をほぐすのに丁度いい。料理は無心になれるから結構好きなんだ。
キャベツと人参を火がすぐ通るように出来るだけ細く千切りにして（少ない材料を無駄にしないようにキャベツの芯も薄く切ってから千切りにした。案外芯も甘くて美味いんだよな）納豆と混ぜた。でもって片栗粉と小麦粉に水、卵、を加えて生地を作ってから具材も加える。本当は下味に顆粒ダシでも入れたいけど、無いから軽く塩を入れた。フライパンを熱してから軽く油を敷いて、生地を薄く流して弱火でじっくり焼く。その間に醤油と砂糖と酢を煮立たせてタレを作っておいた。で、生地が焼けたらひっくり返して反対側も焼く、と。それを切って……出来た！　ちょっとふわふわしてお好み焼きみたいになっちまったが綺麗な焼き色だし上出来だろう。
「ほい、なんちゃって納豆入りチヂミの完成っと。ラー油とかある？　もしあればお好みでタレに入れてどうぞ」
かたんっとチヂミの乗った皿を鵺野先生の前に置くと、彼の口からほうっと感心した

ような声が漏れる。
「て、手際がいいな。しかも美味そうだ」
「どうもっす」
　褒められると嬉しいものだが、つい照れてしまって後ろを向いて調理器具を洗い始めた。
「あれ、お前の分は？」
「あ、俺は家で母さんが夕食作ってくれてるんで大丈夫です。それよりよかったら冷める前に食べちゃってください」
「そ、そうか。じゃあ遠慮なく……いただきます」
「どうぞ～」
　律儀に手のひらを合わせていただきますといった鵺野先生が、はむっとチヂミを口に含む。作ったものの口に合うか心配だったから知らず固唾をのんで見守ってしまったが、ぱっと笑顔になった先生を見てほっとした。
「美味い！　凄いな、樹季！　少ない材料でこんな美味いものが作れるなんて」
「いや、混ぜて焼くだけだから簡単っすよ」
「でも焼き加減が丁度いいぞ。外側はパリッとしてるが中はモチモチだし……具が細く切ってあるからちゃんと火が通ってて野菜が甘い。タレの味も丁度いい塩梅だ」

あんまりにも褒められるもんだから恥ずかしくなるが、普段お世話になってる先生にちょっとでも恩返し出来たみたいで嬉しかった。……だから気分が高揚しているうちに言ってしまおう。そう思い、俺は軽口を叩く要領でこう言った。

「居酒屋でバイトしてる時に習ったんですよ。俺でもこれくらい作れるんだし、鵺野先生もカップ麺や総菜ばっかじゃなくてちゃんと料理しないと駄目ですよ。健康に悪いんですから」

「ははっ、バイトってお前。小学生が居酒屋でバイト出来るわけないだろ」

当然冗談として受け取られたが、俺はゆるく首をふった。

「してたんスよ。俺新卒で入った会社が合わなくて、たった1年で辞めちまってさ……次の職場なんてすぐ見つかると思ったら全然見つからなくて、結局バイト探したんだ。居酒屋は時給いいし、食事補助もあるからありがたかったなぁ」

「……樹季？」

懐かしむような俺の声色にやっと冗談を言っているわけでないと気づいたのか、先生がいぶかし気に俺の名を呼ぶ。俺は覚悟をきめて、ぐっと拳を握ってから言った。

「なあ、先生。俺が本物の、この世界の藤原樹季じゃないって言ったら信じてくれるか

？」

　それから俺はこの世界に来た経緯と、俺が本当は２５歳の大人であること……この世界の「藤原樹季」の魂があの世へ行ってしまったことを告げた。流石に漫画でこの世界を知っていたとは言えなかったけどな。

　詳しい記憶を読まないことを条件に鬼の手で俺の記憶も覗いてもらい、確証を得た先生はしばらく深刻な顔で考え込んでいた。まあそうだよな……さっき広の母さんの記憶を消したばっかなんだ。俺に前世っていうか、他の人間の記憶が入ってるって言ったら困るよなぁ。

　考える先生になんと声をかけていいか分からなかったから、俺は半ば独り言のように語り始めた。

「最初は妖怪や幽霊が怖くて怖くてたまらなくてさ……そればっかりに気を取られてた。でも学校に通い始めて、妖怪絡みの事件は怖いけど先生はいい人だしクラスの奴ら

は面白いし楽しくって、そしたら別の事考える余裕も出てきた。……俺さ、はじめ別の世界に来たんじゃなくてタイムスリップしたみたいだって思ったんだ。だって、この世界の父さんも母さんも前の世界と一緒なんだ。ばーちゃんだってじーちゃんだって、この世界に居る。だけどそれはこっちの俺の家族なんだよなって思ったら、前の世界の俺の家族ってどうしてるのかなって考えちまった。来ちまったからには、こっちの世界の俺と約束したし親孝行してちゃんとこの世界で生きたいとも思ったさ。でも、向こうの……25歳の俺の家族は、俺が突然死んでどう思ったのかな、とか……友達だって居たし、あ、いつら……どう、してるかなって、考えたら……たまらなくって……。で、も、考えたって、どうにも出来ないし、普段は考えないように、してた」

いかん、話してたらだんだん感情が高ぶって涙が出てきた。

俺は鵜野先生が差し出してくれたティッシュを引き出して思いっきり鼻をかむと、ぐすぐす言いながら続きを話す。そんな俺に何も言わず、最後まで話を聞いてくれようとしている鵜野先生の姿勢がありがたかった。

「だけど、今日広の母さん見てたら、また、不安になって……。俺、本当の藤原樹季じゃない。俺も藤原樹季だけど、この世界の父さん母さんの子供じゃないんだ。なあ先生、俺このままでいいのかな？　この世界の俺はもうあの世に行っちゃったけど、記憶は残ってる。だから広の母さんみたいに余計な記憶を消してこの世界の俺に成りすまし

た方が、みんな幸せなのかな？　俺……偽物じゃなくなるかなぁ……」

もう限界だった。

この世界に来て初めて吐露する心境に俺自身の心がついていかなくて、言ってることにもまとまりが無くてしっちゃかめっちゃかだ。前の家族と今の家族への罪悪感、本当の自分でない恐怖、知らない世界で生きるという地に足がつかない不安定な状況……ごちゃごちゃになって、俺は２５歳だったと明かしたにも関わらず子供みたいに大声で泣いた。

いい歳した大の男が情けないと思ったが、不安で不安でたまらなかった。誰にも話せない状況が苦しかった。

……救われなくていい。だけど、誰かに知ってほしかった。「小学生の藤原樹季」じゃない「俺、２５歳の藤原樹季」のことを。

さんざん泣きわめいてから鼻をすすっていると、ぽんぽんっと大きな手で背中を撫でられた。

「す、みまぜん……いい歳して、こんな泣いて……」

「いいさ。……今まで誰にも話せなくて苦しかったろう」

「……先生、俺はやっぱり前世の記憶は消した方がいいのかな？」
「いや、お前の場合は広の母さんとはちょっと違う」
恐る恐る聞いた俺に鵺野先生はきっぱりとそう言った。
「本来なら一つの魂に前の生の記憶が残っているのが前世の記憶ってものだ。けど、お前は別の世界……パラレルワールドから神の力で無理やり持ってこられた魂だから、同一人物と言っても別人、別の魂なんだ。ややこしいがな。お前にはお前本来の前世があって、それはこの世界の樹季の事じゃない。この世界の樹季の記憶があると言ってもそれはただの情報だ。……おそらく、お前の人格を無理に消したら情報を記録しただけの中身のない廃人になってしまうだろう」
「……じゃあ、俺は記憶を消さなくてもいいのか？」
「ああ。なあ、樹季。本来の樹季が……この世界の樹季が死んでしまったのは悲しいが、頼まれたんだろ？　この世界で生きて、あの世で土産話を聞かせてくれって。だったら胸を張って生きろ。お前は偽物なんかじゃないさ！　前の世界の家族は気の毒だが……少なくとも、俺はお前が今ここで生きてるのを嬉しく思う」
「！」
力強い言葉にひっこんでいた涙がぶりかえして、また泣いた。
……鵺野先生ってたしか俺と同じ２５歳だったよな……。同い年の男の前で泣くな

んて本当なら恥かしくってたまらないはずなのに、何故かただただ安心した。
突拍子も無くて普通なら信じてもらえないだろう事情を話せて、そして受け入れてくれた人が居る。それがたまらなく嬉しくて、ようやく俺はこの世界に本当の意味で足をつけられた気がした。
前の世界のことはきっと生きている限り気にし続けるだろうけど……もしかしたら、あの死神は自分の不祥事を知られないために俺の存在そのものを消したのかもしれない。最初から居なかったことになっていれば、悲しむ人間は居ないだろう。そう考えると酷く悲しい気もしたが、同時に少し心が軽くなった。だから答えの無い疑問を抱えながらも、せめて元気にこの世界で生きようと思ったんだ。……怖い事はいっぱいあるけどさ。

で、色々話したらすっきりしたわけだ。いつかは相談しようと思ってたけど、もっと早くに話してもよかったかもな。心のもやもやが無くなったわけじゃないけどかなり楽になった。

……また溜まってきたら色々話を聞いてもらおう。

ちなみに「本当は同い年なんだよな。なら、２人の時ぐらい俺の事は鳴介って呼んでくれ。そっちのが気楽でいいだろ？　あと普段も鵜野先生はかたっ苦しいからみんなみたいにぬ～べ～って呼んでくれると嬉しいな」と先生が言ってくれたので、こうやって２人で居る時は先生の事を鳴介と呼ぶようになった。

憂鬱になる事ばかりなこの世界だけど、この人に出会えてよかった。そう思えた俺の未来は、多分明日からちょっとだけ明るい。

ゆきめたんと俺（＃４９　真夏の雪女より）

今日クール宅配便でゆきめさんがやって来た。

……冗談じゃなく、マジで羊羹が何本か入ってそうな程度の大きさの箱に納まって来たよあの人。……いや、人じゃなくて妖怪だけど。あれ、だったら別におかしくないのか？　最近常識というものがよく分からない。

ゆきめさん。彼女は鳴介に恋する雪女であり、一度愛する彼を氷漬けにして山へ連れ帰ろうとしていた女性だ。ひんやりクールな雪女のイメージと違って恋愛に関して大変情熱的なお方である。今日も残暑見舞いの菓子折りの箱からセクシーな水着姿で登場するなり鳴介にべったりだ。くっそ、うらやまけしからッ……じゃなくて。とにかく、情熱的だがその目的は非常に危険なゆきめさん。が、今回はどうやら鳴介を氷漬けにするつもりはないらしい。

なんでも人間の男を氷漬けにして山に持ち帰らねばならないという雪女の掟に反し、生徒のために絶対自分と山になど来てくれないだろう鳴介のために自分が人間の町で暮らすと言い出したのだ。つくづく愛に生きる女性である。

とりあえず今日は宿直室に泊まるようだ。ちなみに今後のことで相談に乗るという

名目で鳴介も一緒である。

……ま、彼女は正真正銘のヒロイン、鳴介の未来の嫁。鳴介的には妖怪とはいえ１６歳のめちゃんこ可愛い女の子と一緒で理性を保つのが大変だろうが、何があっても特に問題無かろう。

今回はおっそろしい妖怪関係の騒動は無いはずだし、俺としては気楽なもんである。

で、その翌日早速痴話げんか？　して、ゆきめさんが飛び出してしまった。

どうせ真剣な彼女に対して鳴介が無神経な事を言ったんだろう。あいつ凄く格好いいのに、女性の扱いに関しては赤点だからな……。でなけりゃ今頃結婚してたっておかしくない。だって性格良くて優しいだろ？　男前で顔いいだろ？　運動神経抜群だろ？　貯金が無いとはいえ教職っていう安定した職業だろ？　この妖怪だらけの世界でほぼ確実に守ってくれる強さを持ってるだろ？　頼れる優しい逞しい格好いいと……あれ、本当になんで鳴介ってモテないんだろう。心霊オタクと呼ばれ多少女性の扱いが苦手であっても余りあるスペックだぞ。

ま、まあだからこそ鳴介の本当の良さに気づいた女性は、真剣に情熱的に恋出来るのかもしれないな。

その後ゆきめさんが火事の家に飛び込んで女の子を助け、それを更に鳴介が助けるという事件があった。躊躇なく火事の中に飛び込める鳴介はやっぱり格好いいと思う。

だけど火事の炎によって、夏場で弱っていたゆきめさんの体は溶けてしまった。

「俺は……最低の男だ！　君が山に帰ることも出来ず人間として暮らすことも出来ずに悩んでいたのに……。何もしてやれなかった……。それどころか冷たく突き放すようなことまでして……俺は、俺は……！　取り返しのつかないことをしてしまった……。こんなことなら、俺のちっぽけな命などくれてやって氷漬けになって山へ帰ってやればよかった……！　許してくれ……ゆきめくん……！」

心の底からの涙を流し、ゆきめさんが残した着物を握って慟哭する鳴介に俺はなんて声をかけようかと迷った。……彼女、生きてるぞって教えてやるべきだろうか？　と。

でもこの事件は鳴介がゆきめさんの事を真剣に考える一因となるだろうと思った俺は、どうせすぐに会えるしと放置することにした。鳴介には悪いが、これも未来の嫁とのフラグだ。ちょっとくらい泣いて落ち込めばいい。きっと再会した時の喜びは素晴らしいぞ。

そして俺は膝をつく鳴介を横目に「川口冷凍」と書かれたトラックを見送り、こっそりその支社へと足を向けた。案の定待っていればさっきのトラックが帰って来て、覗き見ていれば誰も居なくなったのを見計らってフラフラ状態のゆきめさんがトラックの荷台から姿を現した。その出現は予想通りだけど、予想外に何も身にまとっていないその姿に慌ててしまう。

「あの！　よければ、これ！」

「！　あなたは……」

ラッキースケベとは違くて素直に喜べず、それどころか何だか凄く気まずい。だからとりあえず何か着るものをと思って俺の給食着を差し出した。冬ならもっとちゃんとした上着があったんだろうけど……今夏だしなぁ。子供用だから丈的にものっそいギリギリで見ようによっちゃ余計に煽情的な姿になってしまったが、とりあえず裸はまずいとゆきめさんも思ったのか給食着を着てくれた。多分、今は服を霊力で形成する力も残っていないのだろう。

「えっと……。たしか、樹季くんよね？　何でここに居るのか知らないけど、ありがとう」

「いえ、気にしないでください。……といっても、その格好じゃ色々まずいし俺の家に来ませんか？　クーラーガンガンにきかせますから、よかったら休んでいってください」

「ホント!?　あ、でも……嬉しいけど、なんで私にそこまでしてくれるの？」
　郷子や広など、ぬ～べ～クラスの生徒が以前の事でゆきめさんを警戒していると思い疑問に感じたのだろう。それに対して俺はこう答えた。
「俺、先生にはいつもお世話になってるからさ。ぬ～べ～の未来のお嫁さんを無下には出来ないよ」
「あなたいい子ね！」
　言った途端、パッと笑顔になったゆきめさんはちょっと単純すぎやしないだろうか。いや、他人相手とはいえ初めて自分の気持ちが認められて嬉しかったんだろうけどさ。

　そんなわけで、俺はゆきめさんを家に招待した。もちろん親切心あってのことだが、実は仲良くなっておけばもし妖怪に襲われても助けてくれたりしないかな～という下心もちょっぴりある。だって彼女強いし。
　同じく鳴介サイドの妖怪であるライバルキャラ玉藻先生はちょっと苦手だし、優しい彼女に好印象を与えておいて損は無いだろう。俺はいつだって保身に命がけなのだ。……ま、まあ可愛いから放っておけないってのもちょっとあるけど。いやいや、ゆきめさんは鳴介の嫁、ゆきめさんは鳴介の嫁。
「豆太郎、ただいま！」

「きゅ～！」
「あら、タヌキ？」
　両親は今の時間仕事で留守だから、俺を迎える我が家の住人は化けタヌキの豆太郎一匹だけだ。呼びかければすぐに駆けて来て俺の顔に飛びついてきた。くうっ、可愛い奴め！　いつも留守番で寂しい思いをさせてごめんな！
「こいつ豆太郎っていうんだ。豆太郎、お客さんにご挨拶な」
　豆太郎を紹介すると、ゆきめさんはちょこんっと頭を下げたコイツをすぐに気に入ったようだ。
「うふふっ、可愛いのね！　それに賢いわ。でもちょっと妖気を感じる……この子は妖怪なの？」
「う～ん……妖怪と言っていいのか悪いのか……。たしかにコイツは化ける力を持ってるけど、普段はただの子タヌキだよ。最初は大変だったんですよ。ぬ～べ～の裸に化けたりしてさ！」
「その話ちょっと詳しく」
　笑い話のつもりで豆太郎を飼うことになった事件（我が家にタヌキがやってきた！参照）のことを話したつもりが、思いのほか食いつかれてちょっとビビった。あの、ゆきめさん……そんな目をギラつかせないで。そして鼻血出てます。可愛い顔が台無しで

す。

その後はクーラーをきかせた部屋で談笑したり豆太郎と遊んだりカードゲームをしたりで、思いのほか楽しい時間はあっという間に過ぎてしまった。

そういえば、妖力が弱っているゆきめさんに「しょぼいですけど」と前置きをしてヒーリングをかけてみたら「鵺野先生との出会いを思い出すわ」と言って、鳴介との出会いと自分がいかに彼を愛しているかというのろけ話を満腹になるまで聞かされた。もうおかわりは十分だと、砂糖たっぷりの恋心の集中砲火を止めるころには俺はへろへろになっていた。……当分まともに恋愛が出来ないだろう俺にはこたえるぜ。

でも恋する女の子って可愛いな。惚気話にはまいったが、幸せのおすそ分けをしてもらったと思えば気分もいい。美少女の笑顔を真正面から拝めて実に眼福だった。

これから結ばれるまでに数多くの苦難が待っているが、この子と鳴介には幸せになってほしいものである。

「今日はありがとう！　おかげですっかり元気になったわ」

「いえ、俺も楽しかったんで気にしないでください」

両親が帰ってきてからゆきめさんを友達だと紹介して（友達だと言った時ゆきめさんはちょっと戸惑っていたけど）夕飯も一緒に食べた後、彼女は晴れやかな笑顔でお礼を

言ってくれた。
「もう夜だけど、泊まる場所とか大丈夫ですか？」
「ふふっ、心配してくれるのね。でも、私は雪女だもの。夜は妖怪の時間よ？　問題無いわ」
「そっか。じゃあ、お元気で」
「ええ。ねえ樹季くん……私やっぱりこの町で暮らすと決めたわ。だって、やっぱり諦めきれないもの。私は鵺野先生が好き。彼を愛してる。だからどんなに時間がかかっても、人間の生活に慣れて鵺野先生のおそばに居たいの。それでね？　も、もしよければ……たまに相談に乗ってもらえないかしら」
「え、相談スか？」
「う、うん。その、人間のと、友達って樹季くんだけだし……嫌じゃなければ。あのね！　昨日鵺野先生に手料理をふるまったんだけど、「樹季の方がよっぽど料理上手だぞ！」って言われちゃったの。だから、たとえば人間が喜ぶご飯の作り方とか……教えてほしいなって……」
（そういえばこの人の料理って氷の浮いた冷やしそうめんとかお汁粉という名の小豆バーとか冷凍食品だったな……）
饒舌だったさっきまでと違って口ごもったり尻すぼみになる声に、友達って言うのが

恥ずかしかったりするのかなって思った。控えめに言って可愛い。大仰に言ってウルトラハイパースペシャル可愛い。クッ、やはり鳴介め羨ましい……！　妖怪でもこれだけ可愛けりゃいいじゃないか！　さっさと素直になっちまえよ！

「うん、俺で良ければ教えるよ。豆太郎もゆきめさんの事気に入ったみたいだし、よかったらまた遊びに来てくれよな！」

「！　え、ええ」

ぱっと花が咲いたような笑顔になったゆきめさんは、やっぱり可愛かった。

今日、俺にとても可愛い友達が出来た。

しかしこの時の俺は知らない。

彼女に料理を教えるという事が、氷河期との戦いの幕開けだという事を……。

たまには譲れぬ意地もある（＃５４　人面瘡より）

鳴介が姿を消した。

話を聞いたその日は律子先生が代わりを務めてくれたが、俺は鳴介の失踪に思い当たることがあって一日中青い顔で過ごした。途中克也に「保健室行くか？」と聞かれたくらいだ。

鳴介の失踪……真っ先に思い至るのは〝あれ〟だろう。

……人面瘡だ。

覚えている限り、人面瘡は鳴介が自力で除霊できなかった相手の一つだ。たしか広たちが人面瘡に苦しむ鳴介を発見し、はたもんばの妖刀で彼の霊体から人面瘡を引きはがすという荒業で解決したはず。はたもんばに関しては俺が学校に行き出す前に起きた事件らしいから実際に見たことはないけど、かなり危険な奴だったと思う。そいつを解き放つ危険を秘めているのに使うんだから、相当なものだ。

しかし確証はないため、放課後俺は震える足で校内を歩き回った。童守小の校内はいつどこで霊や妖怪の類に遭遇するか分からないので誰かについてきてほしかったのが

本音だが、普段頼りになる担任の変わり果てた姿を見せてしまう可能性があると考えたらどうしても気が引けた。

　自分でも校内を一人で歩き回るだなんて出来ると思っていなかったけど……もし鳴介が一人で苦しんでるなら、力になりたい。普段世話になっている分、こんな時くらい力になれなきゃいくらなんでも情けないだろ。俺は生徒で鳴介は先生だが、中身だけなら同い年。一方的かもしれないが、けっこう友情じみたものも感じているのだ。俺に出来る事があるならしてやりたい。

　そして途中で「旧校舎で妙な人影を見た」と低学年の子たちが話しているのを聞いて、恐る恐る件の場所へとやってきた。すると何かに苦しむようなうめき声が聞こえ、俺は確信をもって社会科資料室と書かれた部屋のドアをあける。本物の妖怪である可能性もあったが、この時の俺に不安は無かった。……聞き間違えるもんか。これは、鳴介の声だ。

「！　だ、誰だ!?」

「俺だよ。鳴介だろ？」

「樹季……何故、お前がここに……」

「あ～……っと。行方不明って聞いて……」

あ、ヤバい。行方不明だっていうならなんで校内なんて探してるんだって話だよな。まあいいやごまかせ！

「それより、その体どうしたんだよ！　……！　……う、あ、……どうし、たんだよ……」

追及される前にと部屋の電気をつけて勢い任せに言うが、実際に〝それ〟を見て俺は血の気が失せるのを感じた。多分今、俺の顔は真っ青だ。

「見られてしまったか……。ははっ、情けないな」

鳴介の体の左半身はゲッゲと鳴く無数の醜悪な顔に蝕まれており、思った以上に酷い有様に俺はしばらく声を失った。

「除霊に失敗して取り付かれてしまってな……。鬼の手を使わんと切り離せないんだが、この通り左半身を支配されていて使えない。なに、大丈夫だ！　何日かかるかわからんが、自力で除霊してみせるさ」

顔面蒼白な俺に対して鳴介はあくまで明るく振る舞う。苦しいはずなのに、こんな時まで気を使ってくれる鳴介を見て心臓のあたりがぎゅっと締め付けられたような気分になった。

俺はなんとか力が抜けそうになる膝に力を入れて、真剣な表情で鳴介を見つめる。

「……なあ、その除霊……俺にも手伝わせてくれ」

「……気持ちは嬉しいが、危険だ。気持ちだけ受け取っておくよ」
「嫌だ！　なあ、前に俺の力は鳴介の先生だった美奈子先生に似てるって言ってたよな？　で、霊障をヒーリングで癒して除霊したってのも聞いた。だから俺にもそれ出来ないか？」
「しかしな……樹季には才能はあるがまだ未熟だ。逆にお前を危険な目にあわせてしまう」
「わかってるよ。それでも嫌なんだ！　いつも助けてもらってるのに、何も出来ないなんてさ……！　悔しいだろ……」
「樹季……」
「頼む。鳴介だっていつも危険なのに絶対に助けてくれるじゃないか。たまには俺だって恩返ししたい」
　絶対に引かないつもりで、思いっきり頭を下げた。鳴介がいいと言ってくれるまでここを動くつもりは無い。
　しばらく俺たちの間に沈黙が横たわったが、ふっと鳴介が息を吐き出した。
「お前、人一倍怖がりのくせにこういう時は絶対に引かない奴だな。Ａの時も自分より他を助けに行けって言うし……」
「うっ、まあ……時と場合によるけどさ」

俺は妖怪や霊が怖いし、全部が全部人を優先させられるほど人間できちゃいない。それこそ鳴介みたいにはなれないさ。だから鳴介の評価はちょっと買いかぶりだと思う。

でも身近で格好いいヒーローの活躍を見ていたら、俺にだってちょっとした意気地くらい湧いてくる。逃げ出すこともあるかもしれない。でもたまには、怖がる心に鞭打って譲れない意地を通したっていいだろう。

「……それで、手伝わせてくれるか？」

下げていた頭をわずかにあげて窺うように鳴介を見ると、鳴介はなんとも複雑な表情をしていた。困ったような、でも嬉しいような……そんな顔だ。

「……正直言うと、な。今回はもう駄目かもしれないって弱気になってたんだ。経文で除霊しようとすると激痛が走るし、右半身も乗っ取られてきている」

「鳴介……」

「こんなこと言って情けないよな。でも弱音を聞いてもらって少し心が軽くなったよ。ありがとう」

「！　弱音くらいいくらでも聞いてやるよ！　でも俺は直接お前の助けになりたいんだ。なあ、俺はもうお前の事友達だって思ってるんだぜ？　力にならせてくれないか……？」

俺が言うと、鳴介は面食らったような表情をした後照れくさそうに頬をかいた。

「と、友達かぁ……。ははっ、昔の友人とは忙しくて疎遠になってしまっているから、なんだか嬉しいな。お前が中身通り大人だったら一緒に酒でも飲みたい気分だよ」
「ああ、飲もうぜ。俺がこの体で大人になったら絶対」
「じゃあ、こんなところでは死ねんな」
「だろ！」
苦しそうだけどさっきと違って心なしか声色が明るくなってきた鳴介に、俺も出来るだけ明るい声で返す。本当は人面瘡の鳴き声と何故か俺にねっちょり注がれているような視線が怖いけど、今は精一杯の虚勢を張った。こんな寄生お化けに怯えてたまるかってんだ！

そして俺は半ば強引に鳴介の除霊の手伝いをする許しを得たのだが……やっぱり俺はまだまだ雑魚だった。
ヒーリングで鳴介の体力をわずかに回復する程度なら出来たけど、とても除霊の手伝いとまでいかない。鳴介は「霊力で人面瘡を刺激せず、俺だけ回復するだけでも凄い事だ」と褒めてくれたけど、どうしたって歯がゆかった。
しばらくそれを続けたけど、外が薄暗くなってきたので今日はもう帰れと促されてし

まった。せめてこんな場所に居ないで家に来ないか？　と申し出たけど、ご両親を驚かせるし危険だからと遠慮されてしまった。……助けたいのに力になれない自分が本当に情けない。

そういうわけで俺は肩を落としながらも、とりあえず今日は帰ることにした。

（ちっくしょう情けない……！　でも絶対になんとかしてやる！）

そう決意を新たに明日も朝早く来て除霊の手伝いをしようとぐっと拳を握った俺だったのだが、校門を出たところでふいに首に腕をかけられてぐいっとひきよせられる。すわ妖怪か!?　と戦慄したが、俺を引き寄せたのは広で……。見れば郷子、美樹、克也と、いつもの面々がそろって俺を迎えていた。その表情はいつものおちゃらけたものではなく真剣だ。

「お前ら帰ったんじゃ……」

「見てたぜ」

「えっ」

広の言葉にたじろぐ俺に、腰に手を当てた美樹がふふんとばかりに続ける。

「ビビりのあんたが一人で放課後の校内をうろつくなんて変だと思うじゃない？　この美樹様がこっそり後を追ってたってわけよ！」

「俺たちも気になってさ、一緒についてきたんだ。そしたらあんなぬ～べ～見ちゃった

だろ？」

「ビックリしたわよ！　本当はすぐに部屋に入りたかったけどさ、あんたもぬ～べ～も真剣に何かしてるからタイミングなくしちゃって……」

「ねえ樹季、ぬ～べ～どうしちゃったの!?　部屋の外からじゃ会話が全部聞こえなかったけど、あの体を覆ってる顔……あれって、妖怪に取り付かれてるってことよね!?」

「く、苦しそうだったけど……どうにかなるんだよな？　ぬ～べ～だしさ！」

ば、ばれてーら……！　俺の気遣いが初っ端からブレイクしていた件。後つけられてたのか……全然気づかなかったぜ。

俺はなんとか誤魔化そうとしたけど、でも広たちはそれぞれ表情に違いはあれど「誤魔化すなよ」と目で語っていた。その様子からは心底鳴介を心配する感情がうかがえる。

俺は「あ～」だの「う～」だの言葉にならない唸り声をあげていたのだが、でも誤魔化す以前に本心ではこいつらの力を借りないと駄目かもしれないとも思っていた。はたもんばの妖刀……今の鳴介を助けるには、危険だけどこれが必要だろう。でも、俺だけじゃまず間違いなく失敗する。

ヒーリングの効果じゃ大したことが出来ないと分かったばかりってのもあって、無力な自分を痛感して俺の心は揺れていた。

鳴介を助けたい。こいつらを危険にさらしたくない。
けど、俺一人じゃ何もできない。

……俺って中途半端だよな。かっこ悪い……。
力が全てじゃないけど、何かをするためにはどうしたってある程度の力はいるんだよな。鳴介だって俺に霊能力について教えてくれているけど、本人自身も研鑽を未だ続けている。体を鍛えたり、瞑想して霊力を高めたり、文献を読んで妖怪に対処するための知識を蓄えたり……。生徒を守るために日々の努力を怠っていないことは、霊能力の弟子として近くに居るようになってから様々な場面で目の当たりにした。
一般人にとっては妖怪オタクにしか見えない鳴介の部屋に積まれた妖怪関係の資料も、彼の努力の表れなのだ。かなり貴重そうな品もあったし……見えないところで、あいつはどれだけ努力しているんだろう。
俺は最低限自分を守る力が欲しい、霊とは関わらずに生きていけるようになりたい……そう思ってたけど、こんな時はふと考える。誰か大切な相手が妖怪や霊の脅威にさらされた時、助けられなかったらどうするのか？　と。今まさにその状況だけど、自分の無力さに歯ぎしりするばかりだ。

どうしたって妖怪は怖いし霊は恐ろしい。でもこんな気持ちを味わうのなら、俺は鳴介と過ごせるこの1年でもっと霊能力という力に向き合わなければならないかもしれない。

ま、考えてるだけじゃ解決しないんだけどな。今すぐパワーアップできるわけでもなし……。

俺はしばらく考え込んだけど、広に「なあ、俺たちってそんなに頼りないか？」と言われた事で心を決める。……結局俺は、広たちに助けを求めることにした。

本当なら中身だけとはいえ大人の俺は、こいつらを危険にさらすべきじゃないんだろう。広も郷子も美樹も克也も……本来の俺より１０歳以上年下の子供だ。だけどぬ～べ～クラスで、同じ視線で過ごしているとこいつらの頼もしさも分かってくる。

広はリーダシップがあって頼りがいがあるし、郷子はしっかり者で友情に熱い。美樹はお調子者だがその度胸や図太さはある意味稀な才能だ。克也は不良ぶってるけど実は誰よりも真面目なんじゃねーかって思う時がある。そんなこいつらは、多分俺なんかよりもよっぽど強い。

だから俺は鳴介の現状を説明し、克也が打開策としてかつて鳴介の鬼の手をも切り裂いた、はたもんばの妖刀を使おうと提案してきた時もこいつらを信用してその案に乗った。

もし後で鳴介に怒られても、甘んじて受け入れよう。……広たちだって、いつも助けてくれる鳴介を助けたいって気持ちは俺と一緒なんだ。

で、やって来ましたはたもんば跡。何百と罪人の首を切り落とし、妖怪と化した妖刀が眠る場所だ。

初めて目にするはたもんばの首切り刀は、封印されているってのに凄まじい威圧感を放っていた。見ていると引き込まれてしまいそうで、思わず眩暈でよろつく。そんな俺を美樹と克也が「だらしないわね～」「しっかりしろよな！」と言いながらも、左右から支えてくれたのがありがたかった。

そして広が妖刀をつかみ取り、俺たちはすぐに学校へ戻ったのだった。

社会科資料室に入ると、鳴介はすぐに俺たちが持っている物に気づいたようだ。一瞬俺を見てから、焦ったように言う。

「！　お前ら……それははたもんばの首切り刀！　そいつは鞘に護符を張って封印しているが、鞘から抜けば再び凶暴な妖怪と化してお前たちに襲いかかるんだぞ！」

「そんなことは分かってるよぬ～べ～。樹季に事情は聞いた……先生を助けるには、これしかないんだ！」

「そうよ、今までいつも助けてもらってきたんだもん！」

「今度は俺たちが助ける番だぜ！」
「恩を売りっぱなしで死のうったってそうはさせないんだからー！」
　広、郷子、克也、美樹の言葉に鳴介は「お前ら……」と、うっすらと目に涙を浮かべる。
「そういうこった。悪いな、危険だってのは分かってるんだけど……」
「樹季……」
「俺もこいつらも、ぬ～べ～を助けたいんだ。頼む、やらせてくれ。あの妖刀は絶対にすぐ封印するから」
　俺はさっきと同じように頭を下げ、鳴介の様子を窺った。広も郷子も克也も美樹も、絶対に引かない覚悟で鳴介を見る。
　そんな視線に根負けしたのか、鳴介は苦笑した後真剣な表情になって「すまん、だがチャンスは一瞬だぞ。俺が幽体離脱して体を離れた時……封印を解いて一瞬のうちに切れ！　そしてすぐに刀を鞘に納めるんだ」と了承の意を示してくれた。これに俄然やる気になった俺たちは、互いに目配せして頷きあう。……失敗なんてするもんか。
　そして鳴介が経文を唱えながら幽体離脱を始めると、彼の霊体にがっちりと食い込んだ巨大な顔が現れた。……生身の時に鳴介の体を侵食していた無数の顔とは違い、人面瘡は醜悪な顔から複数の触手を伸ばし鳴介の霊体に根を張っているようだ。覚悟はし

ていたが、その様子に思わず吐き気が込み上げる。
けど、今はそんな事思ってる場合じゃない！
「よし、今だ！」
郷子が持つ鞘から広が刀を抜き、そのまま力強く鳴介の霊体から人面瘡を切りはなした！　その太刀筋は見事で、やっぱり広は頼りになる奴だと思う。けど切り離された人面瘡、はたもんばの妖刀の封印がまだ残っている！
はたもんばの方は郷子が持っていた鞘ですばやく刀身を封印しようとするが、徐々にシャリシャリと音をたてて妖怪化が始まっていた妖刀は歪んでおり鞘がうまくかぶさらない。そこで俺がなけなしの霊力をありったけ刀にそそいだ。玉藻を封じるミサンガを作った時の事を思い出しながらやったから上手く封印の効果が出たみたいで、一瞬歪んだ刀身が真っすぐに戻る。そこを今度こそ郷子が上手く鞘をかぶせて封印した。……迷いのない動作で「封印！」と気合が入った一言と共に鞘をかぶせた郷子、格好いいな。
そして鳴介から切り離されて俺たちの背後へ回った人面瘡だが……それに関しては心配いらない。
「はっ！」

気合い一閃。人面瘡から解き放たれた鳴介が、鬼の手で人面瘡を破壊した。

あの後「すまん、今回ばかりは本当に助かったよ。お前らは最高の生徒たちだ」と言った鳴介は俺たちにラーメンをおごってくれた。今回の事件は厄介だったけど、ぬ～べ～と生徒の間に確かに育まれていた絆って奴を見ることが出来た気がする。思わず涙ぐんだ。

いやー、それにしても……。やっぱ俺、もうちょっと霊能力の訓練真面目にしようかな。今も真剣にやってるけど、どうしたって守り特化な感じだし。出来ればこの先霊と関わらずに生きていきたいが……今回みたいなことがあって、何も出来ないってのは嫌だなとも思う。

「よしっ！　今度、霊に対する攻撃法みたいなのも教わってみるか！」

そんな新たな決意を芽生えさせた俺だったのだが、風呂に入ろうと勢いよく服を脱いだところでそんな気持ちは一瞬で瓦解した。

『ゲッゲッ』

言葉を失う俺の腹を、小憎たらしい小さな人面瘡が我が物顔で陣取っていた。

「うびゃあああああああああああああああ!!!!!」

その後俺は泣き叫びながら鳴介に電話して家に来てもらい、人面瘡の残りかすを駆除してもらった。どうやら人面瘡の野郎、鳴介に切り裂かれた後しぶとくも生き残って俺にくっついてきていたらしい。どうりで腹が痛いと思ったよ！　いらんど根性見せやがってからに……！

もうほとんど力は残っていなかったみたいだけど、自分の腹にくっついた顔と目が

合った恐怖といったらなかった。こんなぴょん吉嫌すぎる……！

やっぱり妖怪怖い。

立ち向かう勇気は、どうやらまだ俺には早いみたいだ。

そこはエデンだった（#55　妖怪あかなめより）

今日、俺は銭湯に行く。大事な事だからもう一度言うが、銭湯に行くのだ。今まで様々な恐怖体験をしてきたが、今日ほど妖怪関係で心躍る日はないだろう。

数日前からどういうわけか俺の家や同級生の家、近所の家と……風呂場が10年も掃除をしなかったかのように垢で汚れるという事態が頻発したのだ。俺はこの事件を目の当たりにし、誰にも見えないようにガッツポーズを作った。

来た……来た来た来た！　来たぁぁぁぁぁぁ!!!!

俺は覚えている。覚えているぞ!!　これが妖怪あかなめの回であることを!!　そして、数少ない大人のおねいさんのビッグボインを真正面から見られる機会であることを!!　同級生？　知らん！　いくら大人顔負けのないすばでーだろうが、ガキに用はない！　俺が求めるエデンは16歳以上からだ!!

鼻の穴が大きくなるのを自覚しながらも、俺はスキップで銭湯までの道のりを歩いた。ちなみに時間が早いので、共働きの両親はまだ帰宅しておらず一緒じゃない。だから親父の目を気にすることなく今日のイベントに臨めるのだ。

ビッグボインもいいが、控えめなフェアリーボインだってもちろん素晴らしい。あ

と、あれだ。若い頃はボインこそ至高と思っていたが、最近の俺は実は下半身派なのだ。ぷりんっとした柔らかい尻からなだらかな曲線を描く太もものラインの優美さといったら、まさに芸術。というか、もう女体そのものが芸術!!

そう、だから至高なる芸術品を鑑賞したいというのは男という以前に知能ある人として当然の思考の帰結なのである！　けして俺が特別スケベなわけでは……わけでは……いや、よそう。別の世界に来てまで自分を偽るのは。

スケベで何が悪い！　ああそうだよ俺はスケベだよというか男はみんなスケベなんだよ!!　だから「ちょっと悪いかな」と思いつつもそんな罪悪感に屈する俺ではないッッ!!　今日は見てやる、見てやるぞぉぉぉ！　これは日ごろ妖怪の脅威に怯える俺に神様がプレゼントしてくれた数少ないビッグチャンスなんだ!!

俺は肩で風をきって歩いた。楽園を目指して。

銭湯で最初に会った広には「樹季、なんか今日のお前の顔妙に凛々しいな。てか、なんか顔濃くなってないか？」と言われ、鏡を見たらうっかり劇画タッチになっていた。ははっ、劇画タッチ？　俺は何を言っているんだ。漫画じゃあるまいし。おっと、内心で小粋なジョークを飛ばしている場合じゃないな。紳士たるもの、心を静めて風呂に入

り身を清め、神聖なるイベントに備えなければならぬのだ。
「なあ、今度は妙に悟ったような笑顔になってるぞあいつ」
「ああ。しかもそのまま鼻血を出してる……きっとあいつ、女湯を妄想で我慢しようとしてるんだぜ」
「なんか可哀想だな……」
「ふっ、しかたがねぇ。あいつにも楽園って奴を拝ませてやるか」
「！　くっくっく……克也、やっぱりお前、銭湯に行こうなんて言い出したからにはそれなりの下心あってのことだな？」
「ふっふっふ。もちろん……」
　なにやら広と克也が失礼なことを言ってるが、今の俺は心が広い。許してやるから、せいぜいみみっちい穴からせせこましく覗いているがいい。あ、俺？　結構だ。気持ちは嬉しいが、俺のビッグドリームはそんな穴から覗けるもんじゃあないんだぜ。
　ちなみに今回の垢事件について保健所の職員と一緒に下水の調査をしていた鳴介と先ほど合流したのだが、その鳴介は今覗きを試みた広と克也を押しのけて目玉が飛び出さんばかりの勢いで女湯を覗こうと必死になっている。まあ麗しの律子先生が入っているから気持ちは分かるが、その姿と言ったら情けない事この上ない。
　本当に妖怪から生徒を守る時の格好良さと普段にギャップのある男だのう……。

途中ママと一緒に普通に女湯に入るという偉業をなしていたまことが同級生女子にぶっとばされて壁を越えてきたりしたが、俺の心は乱れない。座して時を待つのみよ。
「なあなあ、樹季は女湯覗きたくねぇの？」
瞑想をする修行僧のごとく静かに湯につかっていた俺に、克也が尋ねる。俺はやれやれと思いつつも、まだケツの青いガキにちょっとしたアドバイスをくれてやることにした。
「克也、たしかに覗きにはロマンがある。バレるかもしれないスリルと僅かな隙間から楽園を垣間見ようとする背徳心がよりいっそう我々を興奮させ心が滾る」
「おい、なんかこいつ語り始めたぞ」
「キャラもなんか変わってるよな」
「ちょっと気味悪いのだ……」
フンッ、チャイルドどもめ。せっかく俺がエロスの先輩としてその心を解いてやろうというんだ。黙って最後まで聞け！
「だが、我々には想像の翼を羽ばたかせ、秘められたる無限の可能性を呼び覚ます材料がすでに与えられているではないか！」
「お、おう。まあ、まず落ち着けよ」
克也がドン引きしながらもどうどうと落ち着けてくるが、俺のパッションは収まらな

い。これでも女湯に聞こえないように声は抑えてるんだぞ！　だから広、桶に水を溜めるな俺にぶっかける準備をするな！　俺は正気だ！

「まず、何も言わず耳を澄ませ。お前にエロスの翼を授けよう」

「耳？」

俺は諭すように言って、女湯に耳を傾けさせる。なにげにクラスの男子に加え、他の男性客まで耳を傾けているところに男としての強い絆を感じた。ああ、そうさ。男はいつだってエロいのさ。俺たちみんな兄弟さ！

『律子先生って肌も綺麗ですよね～。ムチムチプリンなうえにスベスベつるんつるんだなんて素敵……』

『あら、肌の綺麗さなら郷子ちゃんたち若い子には負けるわ。それにさっきも言ったけどあなた達はこれからが成長期じゃない』

『私も胸、大きくなれますか？』

『ええ、もちろんよ！』

『律子せんせ～い、あんまり気休めを言って希望持たせちゃ駄目よー？』

『う、煩いわよ美樹！　ちょ、ちょっと胸が大きいからってねぇ……』

『えー？　ちょっとかしら？　ほれほれ、どうよこの柔らかさ！』

『ちょ、押し付けないでよ！　って、わわわ!?　ご、ごめんなさい律子先生！　私ったら先生の胸に……』

『いいのよ。怪我が無くてよかったわ。それより美樹ちゃん、ふざけるのもほどほどにしないと危ないわよ？　お風呂は滑りやすいし、他にもお客さんがたくさんいるんだから』

『は～い』

「……想像しろ。今の会話は俺たちに十分な材料を与えてくれた。いいか？　桃色に火照った体にまとわりつく湯気の滴、自分が胸と尻の谷間を伝い滴り落ちるその水滴になったと思って想像するんだ」

　ごくりと誰かが唾を飲み込んだ。

「ささやかな胸を気にして恥じらいながら胸を押さえつつ律子先生のおっぱいを羨望のまなざしで見つめる郷子に、小学生としては立派すぎる胸を押し付けて自慢する美樹。そしてその勢いに押されてよろけた郷子を慈母のごとくささえる律子先生の女神と見まがう豊満なおっぱい。ほら、どうだ？　わざわざ覗かなくても瞼の裏にビジョンが浮かんできただろう……？」

　いや、いい。何も言わなくてもいいのだ。お前たちの鼻から流れる赤い血潮が全てを

物語った。……見れたんだな、妄想の翼が羽ばたいた先を。

いずれ来る大ネット社会……それは、簡単に肌色の画像を検索できるばかりに我々からこういった想像力を奪っていくのだ。だからこそ、今のこの良き時代に想像力を培うのだ若者よ。誰かが捨てたエロ本にすがり、涙ぐましくも雨に濡れたページを乾かしてめくる労力も想像力を培う糧となろう……そう、今こそエロという大海原に漕ぎ出す大航海時代。飽和したエロに感覚がマヒする前に、君たちには大いなる想像力の扉が今、開かれたのだ。

とかなんとか馬鹿な事考えてたら女湯から悲鳴が聞こえてきたので、俺は速やかにパニックに駆けつけようとする鳴介の後に続いた。ついてきたのは広と克也だけか……ふっ、馬鹿め。他の男どもよ、悲鳴にびびって来なかったことを後悔するがよい。せいぜい妄想で満足してな！

そして脱衣所で鳴介が番台に座るおばあさんに、女湯の客に慌てず落ち着いて避難す

るように指示していたら……エデンの扉は開かれた。
『きゃぁぁぁあ～～～～～!!』
　番台の横にある女湯とつながる扉から現れる、煌く湯水を散らし、たたわたに揺れるおっぱいおっぱいおっぱい……俺たち４人の鼻からは、赤い液体がロケット噴射された。ご、極楽じゃ～！　ここが極楽浄土だったんじゃぁ～！
　が、至福の光景を心のアルバムにしまっている最中にぽよんとした衝撃に押されてスッ転んだ。何だ!?　俺はまだ大本命の逃げる彼女たちのお尻を堪能してないってのに！　せかっくベストポジションに居るのに!!
「痛た……って、美樹!?」
「きゃあああ!!　ちょ、樹季!?　ヤダちょっとどいてよ！」
　どうやら逃げてる途中の美樹がぶつかったみたいだ。いやどけってお前……お前に押し倒されてる形なんだからお前がどけよ！　って、あああ！　俺のエデンが去っていくーーー!!
「とりあえず、ほれ」
　裸で同級生を押し倒すという事態にパニックになっているようだが、俺はいくら巨乳でも小学生は管轄外だ。でも気まずいのでとりあえず俺のバスタオルを押し付けていろいろ隠させると、そのままぐいぐい背中を押して他の女性たちが逃げてったコインラ

ンドリーに押しやった。

そして脱衣所に残った俺たちは、無言で前かがみになると水風呂に入る。

「おのれ妖怪めーっ!!ぬ～べ～先生を舐めるなよー!」

そして劇画タッチでうおおおお!っと妖怪に対して怒りを滾らせる俺たち。でもきっと内心での本音は「ちょびっとありがとう」かなって……へっ、男って奴ぁ素直じゃなくていけねぇや。

その後、女湯で垢をなめとっていた妖怪あかなめに遭遇。鳴介が調べたところ、その正体がタワシの付喪神であると判明した。彼らは古くなって廃れた銭湯が閉店することを知って、それをなんとか防ごうと町中の風呂を汚して客を集めたらしい。

どちらにしろ銭湯を営むおばあさんは老齢を理由にやめるつもりだったようだが、最後にお客を呼んでくれてありがとうとタワシたちに涙ながらに感謝していた。ええ話や……。

うん、ええ話だからさ……コインランドリーから漏れ出てくる憤怒のオーラ何て知らないよ？

「この～！　やっぱりぬ～べ～の仕業だったのね！」
「律子先生の裸見たくて妖怪出したんでしょ！」
「この変態スケベ教師！」
「最低！」
「誤解だぁ～～～～～！」

とりあえず、誤解とはいえ女性陣の怒りをすべて請け負ってくれた鳴介に合掌。
見守る事しか出来ない無力な俺を許せ……。代わりと言っちゃなんだが後で何か美味いものでも差し入れしてやるからなと、俺は自分の罪悪感に蓋をした。

イタコギャルと俺（＃７４　霊能力美少女イタコギャル・いずな　より）

童守町センター街……この賑やかな繁華街では、童守小の生徒は遊ぶことを禁止されている。しかし俺は親父が忘れて行った会議の資料を届けるという漫画でしか見たことが無いミッションを遂行するため、そのセンター街を通っていた。というか、親父の会社がセンター街を抜けてすぐのところなんだよな。どうしても通らないとかなり遠回りになって不便だし、しかたがないだろう。

無事にお使いを終えた俺は、まあ帰り道だしと言い訳して少しセンター街の賑やかな空気を味わいながら色々見ながら歩いていた。たまには一緒に出掛けようと、肩には豆太郎が乗っている。ぬいぐるみのふりをして目立たないようにしている豆太郎だが、空気にあてられてか若干そわそわしているようだ。まあ、普段散歩するコースだとこんなに人居ないもんな。

そうして歩いていたんだが、途中で怪しい格好をした鳴介を見つけた。一応俺の中身は２５歳だが今は童守小の生徒……見つかったら小言の一つももらいそうだと、初めは声をかけないで通り過ぎようとした。が、クレーンゲームで惜しくもゲットしそこねた

ぬいぐるみを鬼の手を使ってチョイチョイと景品が落ちる穴に引き寄せようとする情けない姿に、見て居られず思わず声をかけた。
「おい鳴介、なにやってんだよ」
「!?　い、樹季!?　いやぁ、これはだな……、って、おいおい。お前は中身はどうあれ童守小の生徒なんだぞ?　こんなところにいちゃぁいかんだろう。俺は最近ここで遊んでいる生徒が居るって聞いて変装して調査に来たんだ。まさかその生徒ってお前か?」
「俺は父さんの会社に忘れ物届けに行ってたんだよ。父さんの会社、この先なんだ」
　俺はそう言って通りの先を親指で示すと、１００円玉をゲームに入れて鳴介がとろうとしていた商品をつかんで景品穴に落とした。
「おおっ!　お前器用だなぁ」
「こういうの得意なんだ。こち亀のクレーンゲーム回を読み込んで超練習したからな!
……ところで、遊んでいる生徒ってもしかしてあいつら?」
　鳴介にゲットした座敷童に似たぬいぐるみを押し付けてから、視界に入った見慣れた姿を目で追いながら言う。鳴介も俺の視線を辿り、その先に広、郷子、美樹、克也のおなじみの４人を見つけてぎょっと目を見開いた。
「まさか俺のクラスの生徒が?　ど、どこに行くんだ……」
　後を追う鳴介に、面白そうだから俺もついていくことにした。なんというか、今回は

危険が無さそうな回の予感がするんだよな！　そういう時は結構楽しいから積極的に関わることにしている。

　そして広たちのあとをついていくと、ちょっと開けた公園のようなスペースにたどり着いた。噴水やベンチもあって、繁華街で疲れた足を癒せる憩いの場所って感じだ。
「いずなのお姉さまー！　約束通り友達連れてきましたー！」
「ああ、また小学生のお客かい。小学生は金にならないからな……あんまり相手にしたくないんだよね」
「あん！　そんなこと言わないでお姉さま～」
　そして美樹が先導して駆け寄った先に居たのは、丈の短いスカートのセーラー服を着こんだ一人の少女。足元は俺が居た２０００年代でも生き残っているルーズソックスに包まれていた。……あれ、案外あったかくておしゃれは我慢！　でミニスカ履きこなす子にはありがたいんだって前従姉妹のねーちゃんが言ってたなぁ……。こっちの世界じゃ全盛期か？　とりあえず、その少女を見て「ああ、いずな回か」と納得した。見るのは初めてだが、ぬ～べ～でギャルといったらあの子だもんな。
　それにしても、予想していたよりずっと可愛い。めっちゃ可愛い。黒髪ロングで肌の

白い秋田美人……か。あれでギャルじゃなければ好みドンピシャなんだけどな……。

「何だあの子は……。中学生のくせに化粧なんてして……。まさか、あれが世にいうコギャルか？」

「いや、中学生だからマゴギャルだな」

「そ、そういうのか？　よく知ってるな樹季」

かつて超ＧＡＬＳ！　寿蘭を視聴していた俺に死角は無かった。少女雑誌の漫画が原作だけど、結構面白かったんだよな。昔ジャンプと交換で漫画の方も女子に見せてもらったけど少女漫画は侮れない。ふわふわな恋愛ものばかりと思いきや、ストーリーがちゃんと練られていて心理描写も濃いから勢い重視な所がある少年漫画とはまたおもむきが違って面白いのだ。あとギャグ物のレベルも高い。赤ずきんチャチャ、めだかの学校、ハイスコア、こどものおもちゃ、魔法騎士レイアース、カードキャプターさくら、神風怪盗ジャンヌ、赤ちゃんと僕、僕の地球を守って……雑誌がごちゃ混ぜだけどこのあたりは面白くて読んでたの覚えてるな。レイアースに関しちゃ、点描とキラキラトーンがふんだんに使われた前の作品からページをまくったら超格好いいロボット出てきてビビったわ。これ少女漫画雑誌だよな⁉　って思わず二度見した思い出。……まあ、それは今どうでもいいか。でも思い出したら読みたくなってきたから、今度女子に何か貸してもらおう。自分で買うには少女漫画コーナーは男子にとっちゃサンクチュアリ

すぎて近づけないぜ。

ぼ～っと過去に想いを馳せつつ様子を窺っていると、彼女は管狐という東北地方のイタコ（霊能力者）が使うという妖獣を使って広たちの質問（有料）に答えるべく彼らを町に放った。そして見事「明日のテストの答案」「喧嘩した相手の今の気持ち」などを答えていく。……管狐はそれぞれ持つ能力が違うというが、心を読めるってのは結構やばい能力な気がする。鳴介が放たれた管狐を一匹つかまえて、そんな妖獣を君みたいな子供に扱いきれるのかと聞いたのも無理はない。見事反発されて、巨大管狐に押しつぶされてしまったが。

「あたしに説教するなんて、１００年早いよ～だ！」

そう言って去って行ってしまったいずな。俺はつぶされた鳴介を憐れみつつも、面白いものが見れたとほくほくだった。

「管狐可愛かったな。な？　豆太ろ……う……」

肩にくっついているはずの豆太郎にそう話しかけたつもりだった。が、俺の視線は空をきって隣に居た美樹にぶつかった。

「え、豆太郎？　豆太郎!?」

「ああ、豆太郎ならいずなお姉さまについていっちゃったわよ」
「ええ!?」
どうりで肩が軽いと思ったよ！
俺は急いでいずなが去った方向に駆けだした。おおかた管狐につられてついて行っちゃったんだろうけど……。お前賢いんだから、頼むからもうちょっと好奇心をおさえてくれ！

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「あら？　あんた、何処から来たの？」
世話になっている親戚の家に帰って来たいずなは、玄関の前で後ろについてきていた小さな動物に気づいた。それはまだ子供のタヌキで、可愛らしく小首をかしげていずなを見上げている。
「きゅう～」

「あははっ、あんた可愛いわね！　このあたりじゃタヌキは珍しいけど……親からはぐれちゃったのかい？」
「きゅっ、きゅきゅ～」
「悪いけどタヌキの言葉はわかんないわねぇ……。でも、これも何かの縁か。可哀そうだしミルクくらいならあげてもいいよ。入んな」
　何かを主張するように声をあげるタヌキが可愛くて、いずなは近所の目が無いのを確認してからそっとタヌキを玄関に招き入れた。そして扉を閉めようとした時だ。
「あ、あの！　そのタヌキ、うちの、子、です！」
　ぜーはーと息切れをおこし、膝に両手をついて汗だくで呼吸を繰り返す小学生がいずなに声をかけてきたのだった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「わっ！　すごい……！　こんなにたくさん……」

「きゅっきゅ～！」
「管狐はイタコの家で繁殖して、７５匹にまで増えるんだよ。まだこの家にはそんないないけどね」
　俺は豆太郎を追いかけて、そのままいずなの家まで来てしまった。事情を話して豆太郎を引き取って帰ろうとしたのだが、思いがけず「あんたさっきも居たけど、管狐が見えてるんだろう？　その子もよく見ると霊力が高くて普通のタヌキじゃないっぽいし……。面白そうだから、ちょっと話聞かせてよ。中入んな」と言われて家の中に招待されてしまったのだ。
　強引さに負けて思わず入ってしまったが、女子中学生の部屋に入るというシチュエーションに妙に背徳感を感じてしまう……。だが部屋に入った途端に俺を歓迎してくれた管狐の群れに圧倒され、そんな余計な気持ちは吹き飛んだ。
「わっとっと!?　ちょ、くすぐった!?」
「あはははは！　あんた凄いね！　初対面でこの子たちがそんなに懐くなんて珍しいよ」
「ちょっと、笑ってないで助け、わぶ!?」
　管狐は俺が珍しいのか周囲でちょろちょろしていたのだが、一匹がすり寄って来たので可愛くて思わず撫でると他の奴らまで殺到してきたのだ。可愛い、可愛いがこの数は

駄目だろ！　つ、潰される……！

いずなは豆太郎を撫でてご満悦で、助けてくれる様子はない。むしろ微笑ましそうな顔で見ているが、俺としちゃ本気で苦しいんだが……！

なんとか抜け出した時には、俺の体力は底をつきかけてきた。

その後、俺は豆太郎と出会った経緯を話しながらいずなの話も聞いた。なんでも東京の高校を受験するからと言って、実家でのイタコ修業をほっぽりだして親戚の家に転がり込んだらしい。だが本当は受験する気はさらさらなく、生まれ持った才能を生かして霊能力者としての名をあげて大金持ちになりたいんだと。

「へぇ……。いずなさんは凄いな」

「ほ～っほっほ！　そうでしょ？　イカしてるでしょ？　あたしはイタコのサラブレットだもの！　いずれは超大金持ちよ！　でも見たとこあんたも結構才能あるっぽいわよ。よかったら、将来助手として使ってあげようか」

「いや、俺はいいよ。俺も霊能力はあるけど、出来ればコントロールを身につけたら霊とは関わらないで生きていきたいから……」

「ええ～！　何でよもったいない！」

「だ、だって怖いし……」

「男のくせに意気地が無いわね―！　どう？　今からお姉さんがちょちょっと鍛えてあ

げようか？」
「い、いいよ！　結構です！　俺、もう霊能力を教えてくれる先生いるんだ！」
「むっ、こ～んな美少女の好意を断るなんて……。っていうか、先生ってもしかしてさっきのゲジゲジ眉毛？」
　不機嫌そうにむくれたいずなが、苦々しく口にするのは多分鳴介のことだな。……ゲジゲジって言ってやるなよ。男らしくて格好いい眉毛じゃないか……。
「う、うん。俺、あの先生にはずいぶん助けてもらったんだ。霊能力者としても超一流の人だよ」
「え～？　ぜんっぜんそんな風に見えないんですけどー」
「でもいざってときは本当に頼りになるし格好いいんだ！　いずなさんも、もし困ったことがあったら鳴介に頼るといいよ。きっと助けてくれる」
「ふんだ！　あたしは一人で平気だね。あんな奴より、あたしの方がよっぽど凄いんだから！」
　清々しいまでの自信だな……。ちょっと羨ましいくらいだけど、きっとまだ決定的な挫折を味わったことが無いんだろう。ちょっとこの若者が心配になった俺である。
「あんたこそ、困ったことがあったらあたしを頼んな！　あんな霊能力者どころか０能力者っぽいおっさんより、この美少女霊能力者いずなちゃんが助けてやるよ。ま、有料

だけどね～」
「あ、それについては是非真剣にお願いします」
「な、なんだよ急に真面目な顔になって」
　だっていざってときに頼れる人間を増やしておけるならそれに越したことは無いじゃないか……。もし鳴介が居ないところで妖怪に襲われたら、俺はお年玉だって投げ出して助けを乞いたい。けど、そのためには頼りになるくらい彼女にも成長してもらわねば。
「いざってときは頼るんで、頼れるくらい強くなってくださいね！　応援してます！」
「なんかひっかかる言い方ね……」
「超絶に美しくて可愛くてイカしてる超（スパー）孫ＧＡＬ美少女霊能力者いずな様、ますますのご活躍を期待しております！」
「！　あ、あら～。そんなあからさまな褒め言葉であたしが調子に乗るとでも？　ま、まあ将来の助手候補ってことで、いざってときは割引価格で助けてやるよ」
「あざーっす!!」
　よし！　思いがけずいざという時の命綱を増やすことが出来たぞ！　いや、本当に頼むよ……。俺、戦う力は無いし本当に怖いんだよ……。女子中学生にすがってでも助けてほしいくらい怖いんだよ……。情けないけど……。

とりあえず、その後は雑談してから家電だけど電話番号を交換して別れた。
しかし俺はその後ことあるごとに助手もどきとして呼び出されることになり、電話番号を教えたことを後悔することになる。おい……お前の助手は美樹だろ……。俺を巻き込むなよ……。父さん母さんも「中学生のお姉さんに勉強教えてもらってるんだって？　このこの！　年上なんてやるじゃない」とか変に勘違いしてるし、いずなが家に来たときなんか勝手に俺の部屋まで通してお菓子とジュース出してるし……。勘弁してくれよ。勝手にパーソナルスペース入ってくるなってば。そのくせお経壁紙を見て「辛気臭い部屋」とか言って文句つけてくるし……！
案外家が近かったのが災いした。こいつ、完全に俺の部屋を別荘か何かと勘違いしている。

そしてある日、学校から帰った俺を俺の部屋で勝手に漫画を読みながらくつろいで待っていたいずな。
「おいいずな、お前また勝手に人の家……。母さんと仲良くなるのやめろよな！」
もうすでにさん付けも敬語も無い。こんな女相手に気を使っていられるか！
「何よ、あんた生意気になったわよね～。あ！　それよりちょっと聞いてよ！」

「……何？」
「ねえねえ！　あたしもさ、あの先生に弟子入りしようと思ってんの！　ってことはあんたの妹弟子って感じじゃん？　よろしくね、オ・ニ・イ・サ・マ！」
「はあ？　あんなに煙たがってたのにどういうことだよ。それに妹弟子ってお前……」
「この間さ、新しい管狐が生まれたんだけどあたしの手におえる子じゃなくて……。でも、それをあの先生が育ててた超強い管狐があっという間にやっつけちゃったんだ！　流石にあたしも自分の未熟さを実感したわけ。で、そんな凄い先生が居るなら弟子入りするっきゃないっしょ！　ってなったの！」
「へえ……」
　興奮しきりに話すいずなの話を半分聞き流しながら、俺はランドセルをおろしてちらっと豆太郎を見る。豆太郎の奴、いずなの膝の上で気持ちよさそうに寝てやがるな……この裏切り者め。ちょっとくらい番犬ならぬ番タヌキとして頑張れよ。あっさり侵入者に陥落させられてるんじゃない！
　まあそんなことを言っていたいずなだが、早々に変わるはずもない。ちょっとすれば、のど元過ぎれば熱さ忘れるを体現するかのようにまた霊能力を使って商売にせいを出しはじめた。鳴介の所で修業？　してないしてない。
　……まったく、これだから近頃の若者は。

「そういえば樹季って、時々すっごいおっさん臭いよな。そんなんじゃ女の子にもてないわよ～」

この女、絶対今後俺の部屋の敷居を跨がせない。

そう誓った、マインドクラッシュを食らった気分のある日の午後。……今度、鳴介と一緒にジュースでいいから愚痴を肴に語り合おう。

貯金と外車（#86　ぬ～べ～、外車を買うより）

「売れ」
「嫌だ」
「売れ！」
「嫌だ！」
「売れッ!!」
「嫌だッ!!」
「売れって！　悪い事言わないから素直に売れよ！」
「悪い事言ってる！　嫌だったら嫌だ！　俺はこの外車で律子先生とドライブに行くんだ！」

俺は今、知り合ってから初めて鳴介と喧嘩のようなものをしている。いや、喧嘩と言っていいのかどうか迷うところだが……。

事の発端は鳴介が「呪いの外車」と噂される5万円の高級外車を買ったこと。丁度みんなとその車について話しながら歩いていたら、まったくハンドルがきいていないよう

なフラフラ運転で鳴介が現れたのだ。件の呪われた外車に乗って。

休み時間に話を聞けば、車にはもうすぐ結婚するはずだったのに事故で亡くなってしまったカップルの片割れである女性の霊が取り付いているらしい。彼女の未練は、事故で亡くなる直前に恋人から貰えるはずだった指輪の行方。運転がドヘタな鳴介は自分が運転できるようになるまで手伝ってくれたら指輪を見つけて成仏させると約束したらしいが……待ってほしい。その車、本当に必要か？

さっき霊を成仏させてから車を高く売って儲けようとしてるんじゃ？　と美樹たちが勘繰っていたが、それの何処が悪いのだろうか。２５歳の、教職という立派な職業についている男が……日々生徒たちを命がけで守り、時に大怪我をし、時に理不尽な弁償をし、これといって贅沢な趣味も無くつつましくも安売りのカップラーメンで生活し学校給食に子供のように無邪気かつ純粋に喜ぶこの男が……多少金を手に入れたからといって、誰が責められよう？　私利私欲？　いいじゃないか、たまには。だって、鳴介マジで金無いんだぞ。貯金の残高で買えたって喜んでたけど、残高５万円？　定期とかは別にして生活費用の口座だよな？　とは怖くて聞けなかった。聞いちゃいけない気がした。

でもこれだけは言える。

鳴介、お前は車を持つべきじゃあない。

「除霊して今すぐ車を売って貯金しろ！」
「嫌だ！　せっかく憧れの車を手に入れたんだ！　お前も男ならわかるだろう？　車は男のロマンなんだよ！」
「とかいって、どうせ車を持ってる男はモテるとか雑誌の特集見たんだろ！」
「ぎ、ぎくっ！　い、いやだな。何を言っているんだ君は」
「隠さなくてもいいよ！　でも車なんかなくたって鳴介は格好いいだろ！　男の俺から見てもすげー男前で格好いい！　保証する!!」
「い、樹季……」
　鳴介がちょっとじ～んとした表情で感動している。よし、今のうちにたたみかけよう。
「だから売れ！　車なんていらない。お前にまず必要なのは現金だ！」
「だ、だから何度も言うが嫌だ！　こんな外車、この機会を逃したら一生買えん！」
「じゃあ聞くが、何故か毎月カツカツのお前に自動車税とか自動車保険代とかアパートでの車の駐車代とか払えるのか!?　車検とかきてみろ、鼻血吹くぞ！　しかも外車だから万が一壊れた時の修理だって特注の部品が必要だったりするかもしれないしメンテナンス代とか絶対高いに決まってる！　タイヤだって擦り切れて来たら買い替えないといけないし、冬にはスタッドレスタイヤが必要だし！　もちろんだけどガソリン代

だって月々かかるし、しかもこれ多分ハイオクだろ？　維持費にいくらかかると思ってるんだ！」

「う、ううううう！　鬼かお前は!?」

「何とでも言え！　俺は現実を突きつけてるだけだ！　なあ、よく考えろよ。鳴介に必要なのは、そんな金喰い虫の高級車か？　別に車を持つなとは言わないけど、まず生活を見直してからの方がいいと思うんだ。２５歳で立派な職業についているのに貯金残高ゼロとかヤバいぞ。食事も安売りのカップ麺ばっかなんて、俺見てらんねぇよ。いくら金では買えない大事なものがあるといったって、世の中金が無いと買えないものもたくさんある。いいか？　俺も前の時はまだまだ若いし余裕と思って考えなかったけど、人生設計は大事だぜ。たとえば結婚でもしてみろ。結婚式は人それぞれとして、新しい生活、保険、出産、子供の養育費、マイホーム……金はどうしたって必要になってくる。だから、な？　お願いだからその車は手放して貯金にまわしてくれよ。俺、鳴介の事が心配なんだ……」

一気にまくしたてたせいで喉が渇いたが、言いたいことはだいたい言えた。真剣な俺の言葉に、やや涙目ながらも鳴介も考え込んでいる。……いや泣くなよ。俺が虐めてるみたいじゃないか。

そう、結婚な。少なくとも1年後にはゆきめさんとゴールインするんだから、貯金が

無い状態ってのは真剣にヤバいと思う。２人は一緒に居られれば幸せなのかもしれないけど、それでもやっぱりお金はある程度必要だよ……。俺、２人には幸せになってほしいし……。

だからとにかく。

「車を売れ！」

一日が終わるころには、俺の車売れコールに鳴介はフラフラになっていた。とりあえず「考えてみる」という言葉を聞けただけ良しとしよう。……帰ったら親父に相談してみるか。たしか知り合いに中古車のバイヤーが居るって言ってたから、鳴介の決心がついたらすぐに買い取ってもらえるよう手筈を整えておこう。高く買ってもらえればいいんだが……。

そうやってうんうん考えながら歩いていた俺だが、ふと車道の方が騒がしくて何気なく目を向けた。そして目の前を駆け抜ける赤い影……一瞬前に見えたその車の全体像

に、言葉を失う。とりあえず目を瞑って目頭を指でもみほぐしてから深く息を吸って鼻からはいた。

あれ、おかしいな……。今、前の俺の時に見た初音○クとか綾波○イとかが描かれた痛車なんて目じゃないほどの凄まじいカーラッピングがされた外車が通ったような……。２Ｄどころか飛び出せワクワク３Ｄ☆なノリでフロントに巨大な女性の顔と無数の腕が生えた斬新過ぎるデザインだったけど、その車に鳴介と広と郷子が乗ってた気がするけど気のせいだよな？　俺言ったもんな。運転が下手なら危険だから、とりあえず今日は学校においてけって。

うん、そうそう。多分気のせい気のせい……。

「なわけあるかぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!　馬鹿！　鳴介の馬鹿！　あれは人を乗せていい運転じゃないって言ったじゃないか!!」

俺は無駄だと分かりつつ、全力で車の後を追った。当然追い付けるわけないが、途中で狭い路地を通って道をショートカットする。うまくいけば、カーブを曲がった車がこの通りに出るはずだ！

そして狙い通り、少し遠くに鳴介たちが乗った車が見えてくる。しかし最悪なことに……たった今、指輪を手に満足そうに成仏していく女性が見えた。何で!?

「待って!?　待ってそこのお嬢さん！」

ビュンっと横を通り過ぎて行った暴走車をとりあえず見送り、あなただけが頼りだと言わんばかりに成仏寸前の霊に呼びかけた。きっと運転している途中で指輪が見つかったんだろうけど、今彼女に離れられたらまず間違いなく事故る。花京院の魂を賭けてもいい。

『？　もしかして、私？』

「そうです、貴女です！　お願いです、成仏するところを大変申し訳ないのですが、あの車を止める手助けをしてくれませんか！　あのままじゃ鳴介たちが死んじゃう!!」

『！　私の指輪を見つけてくれたあの人たちが……？　わかったわ』

幸いなことに女性の霊に言葉が通じ、彼女は今一度車に舞い戻るとふっと車体に溶けるようにして消えた。するとフラフラだった車が多少持ち直し、スピードが落ちる。そこにありったけの大声で呼びかけた。

「鳴介ーーー!!　車寄せてブレーキ踏め！　いいか左だぞ！　左のペダルだ！」

すると声が届いたのか、危ないながらも車はなんとか停止した。さっきから全速力で走って苦しいが、なんとかもう一度体力を振り絞って車に追い付いた。すると、車から先ほどの霊が現れてニッコリ笑いかけてきた。

『ありがとう。危うく、恩人を死なせてしまうところだったわ。これで本当に思い残すことは無い……さようなら』

そう言うと、今度こそ彼女は成仏した。それをほっとした心持で見送っていると、車から「し、死ぬかと思った……」「もう絶対ぬ～べ～の運転する車には乗らない……」と言いながら広と郷子が真っ青な顔で降りてきた。

そして俺は2人に声をかける前に車の運転席に回ると、ハンドルを握ったままブルブル震えている鳴介の肩を叩いた。すると面白いように肩が跳ねて、鳴介が恐る恐るといったふうに俺の方に首を向ける。

俺は出来るだけ優しく微笑むように心がけ、柔らかい口調で話しかけた。

「車、売ろうな?」

「はい……」

この数日後、鳴介にちょっとだけ貯金が出来た。

ちなみに、すぐに使ってしまわないように遠くの銀行の定期預金に入れさせたのは余談である。

毛玉のホワイトクリスマス（#114　幸運のケサランパサランより）

今日はクリスマス。俺達5年3組は、調理実習で作った特大ケーキを中心にクリスマス会をしていた。

この特大ケーキ、何を隠そう俺が構成を考えたのだ！　特大ケーキは本当に大きいのだが、そんな大きなスポンジ型が小学校の調理室にあるわけもないし、第一オーブンに入らない。それに万が一その辺がクリアできたとしても、調理実習の時間内で作るには大きなスポンジなど焼いていては間に合わないのだ。大きすぎて生焼けになってしまう。調理実習の先生も特大ケーキを作りたいと主張する俺たちに「小さいのをたくさん作ったら？」と勧めてきたしな。

でも、せっかくのクリスマスパーティーだ。今の俺は大人じゃないけど、サンタ代わりに同級生たちの希望を叶えてやってもいいんじゃないかと思ったわけで。だから必死に考えたのだ。

で、俺はそれぞれの班に指示を出した。まずケーキ型ではなく鉄板にクッキングシートを敷き生地を流し込んで、平たくて大きなスポンジをたくさん作る！　そして長方形

のそれを組み合わせ、模造紙に大円を描いて切った型紙にあわせて切る。作ってから移すのでは崩れるから、それは直接ケーキを載せる台（これは給食の調理室から借りた）に置く。そしてスポンジにシロップを打ってからクリームやフルーツを敷き詰めて、同じようにして丸くしたスポンジ生地を上に乗せる！　一繋ぎの生地じゃないからバランス悪いんじゃないかと懸念されたけど、クリームが接着剤の役割をしてくれるからな。生地を乗せてからちょっと押さえれば問題無い。で、それを何度か繰り返す。これで土台は完成だ。

　不格好な側面はクリームを塗って隠しちまえばいいし、何よりその辺の仕上げは女子が頑張ってくれた。お店で売ってるみたいなクリームの絞り方とか、上の飾りのクッキーで作ったヘクセンハウスとか。かなり高クオリティに仕上がったと思う。

　うむ、俺も頑張った甲斐があったというものだ！

「メリークリスマス！」

「ひょえー！　でっけぇケーキ！　美味そ～！」

「ホントよね！　樹季には感謝だわ」

「いや、みんな頑張ったよ。俺だけの成果じゃないって」

　歓声を上げる広に、ぽんっと俺の肩を叩いて褒めてくれる郷子。照れくさくなった俺はぽりぽりと顔をかくと、早く始めようと仕切り屋の美樹を促した。

「さ、始めようぜ！」
「ええ！　ふんふん。ロウソクもばっちりね！　じゃあみんな、一斉にロウソクを吹き消すのよ！　わかった？　いっせいよ、いっせい！　一秒でも先に吹いた奴は廊下で鼻の下に割りばしさして、ツリーの飾り付けてヤカンもって阿波踊りだかんね」
なんかすげぇこと言い出したな!!
おい待て、それフラグじゃないか？
しかし俺の心配をよそに、美樹のカウントダウンが始まる。
「5、4、3、2、い……」
「あ」
ふいに最後の数字を言おうとした美樹の鼻あたりに、ふわりと白い毛玉が外から舞い込む。あ、そういやストーブの換気のために窓開けてたんだったっけ。

そして、案の定。

「ブワックショドワックショハックショーン!!!!」

色々盛り増しにダイナマイトな美樹のくしゃみが、ロウソクどころかケーキの飾りも

ろとも吹き飛ばしたのだった。
さよなら俺たちの調理時間!!

※　ケーキはあとで美味しくいただきました。

どうやら美樹のくしゃみを誘発したのは、ケサランパサランという小妖怪だったらしい。自分の言った通り廊下で鼻の下に割りばしさして、ツリーの飾り付けてヤカンもって阿波踊りさせられた美樹がやけに喜び勇んで帰ったと思ったら、それが原因か。
そ、それにしてもケサランパサランか……！　羨ましい。
ケサランパサランとは、要するに幸運をもたらしてくれる幸せの毛玉だ。見た目は白くふわふわしたピンポン玉大の毛玉で、ふわふわと勝手に動くのが特徴である。ちなみにおしろいと一緒に入れておくと増える。
なぜ妙に詳しく覚えているかというと、ぬ～べ～のこの回を読んだ当時友達と一緒になってケサランパサランを探しまくったからだ。当時はかなり真剣に探したもんだ。

そして道端にたまたま自生していた綿花を見つけ、ケサランパサランだと思い込んで瓶におしろいといっしょに入れていた。いつの間にかどこかに行っちゃったけど、懐かしいなぁ……。

でも、この世界のケサランパサランは正真正銘本物だ。本音を言えば、かなり真剣に分けてほしい。

だって大事に育てて常に持ち歩いていれば、妖怪と遭遇しても逃げ切れるじゃないか。もちろん普通に幸運も欲しいけど、俺としてはケサランパサランには昔話の三枚のお札的な役割を期待したい。

だけど翌日。登校するなりぬ～べ～にケサランパサランの事を聞いた広たちが美樹に分けてくれと頼んでも、「増えなかった」と誤魔化したあたりあいつケサランパサランを独り占めする気だな。にやけた顔を見るに、すでに相当な幸運にあやかったに違いない。

でもたしかこの回って、何か大きな事故があって、それでみんなを助けるために美樹はケサランパサランを全部使っちゃうんだよな。欲に忠実ではあるが、実はかなりいいやつってのは、俺含めてクラスのみんなが承知済みだ。それと同時にトラブルメーカーで色んな厄介事も引っ張ってくるし、調子に乗りやすくて騒がしいけど。

でも美樹は、いい奴だ。

「……」

何処で事故が起こるかまでは、覚えてない。

「……。はあ。しょうがねぇか……」

ケサランパサランは欲しいけど、その前にまず事故だ。確か妖怪は関わっていないはずだけど、事故が起こると分かっている現場にただ美樹を行かせるのもな。ケサランパサランが居るとはいえ、怪我するかもしれないし。

そう思った俺は、放課後童守３０ビルに林家ペーとパー子のクリスマスショーを見に行くという美樹たちについて行く事を決めた。美樹はどうやらおしろいを買い込むために行くらしいけどな。

そして、童守３０ビル。

俺はトイレに行くと言ってみんなから離れると、ビルの案内図に目を向けた。多分タイミング的に、事故が起こるとしたらこの場所だろうし。

あらかじめ鳴介には、俺の勘を理由にして「何か良くないことが起こりそうだから注意してくれ」とは言ってある。そんな俺が一人離れたことに鳴介が心配そうな表情を向けてきたが、本当にトイレだからと言い張った。まあ嘘なんだけど。

俺は壁に貼ってあったビルの案内図のポスターを「ごめんなさい！」と言いながら剥がし、人目に付く前にあわててトイレに駆け込んだ。そして取り出した糸をくくり付け

た五円玉……フーチを使って、ビルの中をくまなく探る。これは以前美樹がクラスで流行らせた占いだが、俺や鳴介みたいに霊力が強いものが使うとかなりの精度を誇るのだ。

そしてある個所でフーチが左回転……悪い時を示す方向へ回ると、俺は一目散にそこへ向かって走り出した。

だけど、俺は甘かったらしい。

「!?」

ドンっという鈍い音が響き、窓の外を見れば壊れた展望エレベーターからさっき別れたばかりの鳴介、広、郷子、まことが鳴介の手だけを頼りにぶら下がっていた。周囲からは黒い煙があがっていて、爆発が起きてそうなったのだと知れる。さっき俺が見つけた場所……中華料理屋が事故の原因なら、多分ガス爆発か何かだろう。

何で俺は場所が分かっただけで一人でなんとかできると思ったんだとか、こんなにすぐに事故が起きるだなんて思ってなかったとか、いろいろな考えで頭が埋まった。けどすくむ足をなんとか動かして、階段を駆け上がる。そしてその途中で、美樹を見つけた。

「美樹！」

「樹季！　あんた無事だったの!?」

「ああ。お前も無事だったみたいだな。……なあお前、ケサランパサランでどうにかみ

んなを助けられないかって思ってんだろ？」
「え、何でそれ……」
「お前がケサランパサラン隠してることぐらい分かるっての！　でも、まだビル内は危険だ。二次災害があるかもしれない。だから俺にケサランパサラン渡して、お前は逃げろ！　みんなは俺が何とかするから！　屋上なんて行ってみろ！　いざって時に逃げ場なんかねぇぞ！」
「！　それはあんたもいっしょでしょ!?　樹季こそ、さっさと逃げたらどうなのよ！　嫌よ。ケサランパサランは私のなの！　だから私が使ってみんなを助けるわ！　そのためには、願いを叶えるためには、ちゃんと皆が見える場所に行って願わないと……！」
「ばっか！　いっつも図々しいくせに、こういう時だけ根性見せやがって！」
「馬鹿とはなによ！」
「いいから、俺に任せろ！」
「嫌！　私が行く！」
「渡せ！」
「嫌！」
　このままではらちが明かない。そう思って、最終手段として無理やり美樹からケサランパサランが入った瓶を取ろうと思った時だ。

「ええい、しゃらくさい！　だったら一緒に行くわよ！」
「え、ちょ、おい！」
俺が行動するより早く、美樹が俺の腕を引っ張って階段を駆け上がり始めた。
……俺、かっこ悪いなぁ……。事故も防げなければ、同級生の女の子一人安全なところに逃げさせてやれないなんて。
でもこうなったらつきあうさ！　最後までな！

で。その後どうなったかと言えば、最初はデカすぎる願いに美樹が持っていたケサランパサランは全て消えてしまった。だけど美樹が「こんなものあっても役に立たない！」と、買ったばかりのおしろいをぶちまけたことで奇跡がおきたんだ。なんと屋上から風に舞って空へと昇ったおしろいのおかげなのか……空からまるで雪のように、大量のケサランパサランが舞い降りてきたのだ!!
ケサランパサランたちは鳴介たちを助けるばかりでなく、あれだけの大事故の中心であった中華料理屋から一人も死人を出さなかった。きっと自分達では意志を持たないケサランパサラン達に、美樹の「みんなを助けて」という願いが指向性となって働いた

んだ。だから”みんな”助かった。
俺はと言えばそんな奇跡を目の当たりにして、感動と共になおさら自分の無力さを痛感したわけだが……。
「えっと、樹季……さ。あんた別に役に立たなかったけど、その……。階段を上がる時、本当は凄く怖かったから……そばに居てくれて、ちょっと心強かったわ。ちょっとよ？　ちょっと！　勘違いしないでよね！」
そんな風に美樹に言われたから、ちょっとだけ救われた。

ちなみに美樹の言葉に感謝した後、こっそりケサランパサランを捕まえようとしたら「ちょっと！　せっかく私がみんなへのクリスマスプレゼントとしてケサランパサラン大盤振る舞いして諦めたってのに、抜け駆けはさせないわよ!!」と、美樹に羽交い絞めにして阻止された。ほんのちょっとの感謝が消え失せた瞬間である。ああ！　俺の護身アイテムがぁぁぁぁ!!

ああもう！

「メリークリスマスだちくしょーーーーーーう！　みんな幸せになりやがれーーーー

!!」

俺のやけくその叫びが、ケサランパサランが降りしきるホワイトクリスマスの空に響き渡った。

聞いたら来る系はヤメロ（＃１２９　ブキミちゃんより）

「ブキミちゃんはとっても意地の悪い子でした……」

５年３組のムードメーカーでありトラブルメーカーな巨乳小学生……もしくは人間スピーカーとも称される細川美樹は、今日も今日とて仕入れたばかりの話をクラスの中心で語っていた。振るわれる弁舌は聞く人間を引き込み、その高く通る声は否が応にも人の耳に入る。それは「今日はいい天気だなー」と気持ちよさそうに登校してきた藤原樹季も例外ではなく、彼の耳にもするりと美樹の声は飛び込んできた。そしてぎくりと体を強張らせた彼をよそに、美樹の話は進む。

要約すれば過去に交通事故で死んだ「ブキミちゃん」と呼ばれていた少女の霊が話を聞いた人間の夢に出てきて、死んだときに無くしたハーモニカを探し出せと要求してくる。そして彼女が示す正しい道を覚えて夢の中の迷路を進み、ハーモニカを発見できなければ夢から出てこれなくなり死んでしまう……という話だ。

ふと、その話を聞いていた克也が樹季に気づき「おはよう」と声をかけようとした。が、樹季はびくりとも動かない。

「お～い、樹季の奴立ったまま気絶してるぞー」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

み、美樹の奴……！　せっかく天気の良さに気分よく登校してきたってのに、朝っぱらから不登校に戻りたくなる話聞かせやがって……！　思わず現実逃避するあまり気絶しちまったぜ。

しかし悲しきかな。今回は学校に来ても来なくても寝たらやってくるというハードな相手である。逃げ場はない。

あの後歴史のテストもまったく身が入らなくて、初めて0点というレア得点を叩き出し鳴介に憐れみの目で見られちまったし最悪だ。鳴介には俺の実年齢が割れているだけに余計に辛い……。「まあ、こんなこともあるさ！」と慰められていたたまれないった

ら……！

ま、まあ美樹のせいで今回のテストは全員どっこいどっこいみたいだったけどな。みんな夢から抜け出すための道順を覚えるためテスト用紙にまで書き出したらしい。

ブキミちゃんか……。この「話を聞くとやってくる」系はぬ～べ～を初めて読んだ当時、全国紙でやめろよ！　と涙ながらに幼い俺は叫んださ。いや、俺が読んだのは単行本だったけど……きっとぬ～べ～連載当時の全国のジャンプ読者は同じように叫んだに違いない。

いや、分かってるよ？　ガチで来たら困るし、作者たちがちゃんとそういうマジもん系は元ネタと設定とか変えて描いてるだろうってのは分かってるよ？　でも怖いだろう。だって寝たら来るんだぞ！　逃げ場無えじゃねーか！

しかも今の俺にとってこの話は作り物でなく現実である。そら気絶もしたくなるわ。やべぇちょっと泣きたい……。

でもって、話を聞いた日の夜。俺は夢の中で９０度の角度で腰を折り、深々と頭を下げていた。

「不肖藤原樹季、貴方様の無くされたハーモニカを慎んで探させていただきます!!」
『ちょっと、あたしはまだ何も言ってないよ』
「お、おおおおおお言葉を遮ってしまいまことに申し訳ありません!!」
早速俺の夢に現れるとかドウイウコトなの……！　美樹の話を聞いた日の夜に出て来てくれやがったよブキミちゃん。いや、ブキミ様と呼ぼう。ぬ～べ～抜きでサシで霊と接するとかおっそろしいわ！　と、とりあえず今出来る最高の礼を尽くすんだ……！
もし万が一怒らせたら迷路を抜ける前に殺されかねん。慎重に、慎重に接するんだ……！
『話はわかってるみたいだね。さっさとハーモニカとってきな！』
「は、はい！　あ、あの～、でもその前に一応道順をお聞きしても……？」
『はあ？　あたしの噂を聞いたんだろ。一緒に道順も広がってるはずだけどね。フンッ、あ～やだやだ。そのせいで間違える奴が少ないったら！　こちとら話を聞いた奴ら全部んとこに行くのが忙しいってのに』
「で、でしたらもうこんなことおやめになってはどうかな～って……」
『あんた馬鹿ぁ!?　んなことするわけないだろ！』

「ヒィィ!!　ごめんなさいごめんなさい！　差し出がましい事を言いました！　大変申し訳ありませんでしたブキミ様!!」

『ぶ、ブキミ様？　はじめてそんな風に呼ばれたよ……変な奴だね』

某新世紀のヒロインが言えば萌えるセリフも、ブキミ様が口にされたら恐怖でしかない。なんで余計な事言ったんだ俺……！

しかし俺の失態が呼び寄せたのはブキミ様の叱責だけではなかった。へへっ、……なんとその後ハーモニカを探しに行く前にブキミ様の愚痴に体感時間で1時間ほど付き合わされる破目になったんだぜ……？

以前親に恥を忍んでオムツの購入を打診しておいてよかった。無事に愚痴から解放され、ハーモニカを道順を間違えることなく探し出す事には成功したんだ。が、翌日オムツの存在が無ければ俺の敷布団には立派な何処とも知れない国の地図が出現していたことだろう。

ああ、そうとも！　打診の結果オムツ購入を受け入れてもらい、オムツを手に入れていた俺は「使うなら今だろ」と恥を捨てて着用して寝たさ!!　助かったことは素直に嬉しいが、同時に何か大切なものを失った気もする。……この秘密は墓までもっていこう。

そして俺が２５歳の尊厳とサヨナラした翌日、クラスはブキミ様の話題で持ちきりだった。

「出たのよ夕べ、本当に！」

「俺のところにも出たぜ！」

「僕も。でも道順を覚えてて助かったよ」

こう証言したのはのろちゃん、金田、昌だ。他にも何人か「ブキミちゃんが出た！」と証言する奴らが居た。どうやら彼女の言葉通り、複数の場所に同時に現れていたらしい。なんてフットワークの軽い霊なんだ……！　そんなアクティブさいらない。

「ま、みんな生きて帰れたのは私のおかげね！　感謝なさい」

そんな風に鼻高々に言ってのける美樹には当然クラス中からブーイングが殺到した。そりゃこいつが話さなければ俺たちの夢にブキミ様が出てくることは無かったんだからな！

が、そこでめげないのが美樹である。その図太さはある意味尊敬するが、たまにはちゃんと反省してほしい。

「あ、樹季のところには出た？　あんたもしかしてチビってないでしょうね～」

「は、はあ!?　チビってねぇし！　なに馬鹿な事言ってんだよ！　もう小５だぜ？　俺のとこにも出たけど俺は１ミリリットルもチビってないね！」

「ホントに～？」
「う、うううううう嘘ちゃうわ！」
「怪し～。あ、そうだ！　チビってなくても、実は怖くて眠れなかったとか！　ほほほっ、よければ美樹ちゃんが添い寝してあげましょっか？　安くないけど！」
「いらねぇから！」
こ、この女……！　俺がビビりと知ってからというもの、時々こうしてしつこいぐらいに絡んでくる。やめろ、追及するのはヤメロ。俺はションべん小僧のあだ名なんか欲しくない。
しかし道順を覚えていれば助かるとはいえ、それが出来ない者にとっては死活問題だ。出来ない者が誰かといえば、「寝なければブキミちゃんも来られない」という有効だけど無茶な理論で目を充血させて濃い隈をこさえた広である。
みんなで鳴介に相談したところ、彼がブキミちゃんが事故にあった町に調査しに行ってくれることになった。しかし一晩寝ていない広は今にも眠りそうで、郷子がことさら心配している。でもグーパンはやめてやれ？　せめて張り手にしてやってくれないか……。郷子の殴打の威力ってシャレにならないから、それが原因で逆に昏倒しやしないかと気が気じゃない。
ともかく、俺も心配なので鳴介が解決するまで郷子と一緒に広が眠らないように見張

ることにした。

けど俺は何でもう一回ブキミ様と対面してるんですかね。

『なんだ、またあんた？』
「ど、どうも……」
「う、うわああ！　ぶ、ブキミちゃん!?」
後で郷子に聞いたところ、俺は上から落ちてきた看板に広と共にぶつかり気を失ったらしい。どんな確率だよそれ!?　しかも一緒に気絶したからって何も夢まで共有しなくても……！　俺、一回クリアしたじゃん！
いや、でもこれは逆にラッキーなんじゃないか？　とも考えた。だって広が道を覚えてなくても、俺は覚えている。だったら俺が出口まで広をナビゲートしてやればいいじゃないか！
でもそんな俺の浅はかな考えは見透かされていたようで。
『あんたは道覚えてるだろ？　見逃してやるからここで待ってな！　ケケケッ、そっち

の奴は頭悪そうだからきっと帰れないよ』
「え!?　いや、でも……！」
「へへっ、大丈夫さ樹季！　ブキミちゃんめ、立野広様をバカにするなってんだ！」
広はそう啖呵をきったが、笑っているけどその顔色は悪い。だ、大丈夫だろうな……!?
けど夢の中がブキミ様のテリトリーだからか、動きたくても俺の足は地面に張り付いたようにくっついてびくともしない。どうやら後を追うことは出来ないようだ。
「ひ、広！　絶対に間違えるなよ!?」
「おう、まかせとけ！」
やっべ、言っておいてなんだけど自分の台詞がフリというかフラグに聞こえる。あ、駄目だこれアカンやつや……！
「と、ところでブキミ様？　もしよろしければ、僕とお話しません……？」
『うるさい奴だね！　今あいつを見るのにいそがしいんだ！　話しかけるんじゃないよ！』
「すみませんでした！」
せめて話をして広から意識をそらせないかと思ったけど、俺には無理だったよゴメン広……！

自分の無力さを痛感しつつ、俺は広が道を間違えないようにとひたすら祈った。が、無情にも隣に居たブキミ様から「あいつ間違えたよ、間違えた！　ケケケケケケ！」というセリフがもたらされた。しかも「あんたも一蓮托生だよ！」とご無体なお言葉までセットだった。わ、わあブキミ様凄いや！　一蓮托生なんて言葉知ってるんだね！　でもやめてぇぇぇ！　俺の頭ぐにゃんて伸ばすのやめてぇぇぇぇ!!

「やめてぇぇぇぇ!!」

が、どうやら俺と広は魂をどうにかされるまえに助かったらしい。叫びながら目を覚ました俺は、鳴介がブキミ様をどうにかしてくれたのだと悟った。目を覚ます前ブキミ様が悲鳴を上げて消えていったのを見たからな。

でも助かったにも関わらず、俺の目からは一筋の水滴が零れ落ちた。それは生還できたことに対する喜びの涙ではない。広が起きた事で泣きながら喜んでいた郷子とは違うのだ。

そんな俺の様子に気づいたのか、広と郷子は俺を見てしばらく言葉を失った後ぽんっと肩を叩いてくれた。

「ま、まあ樹季……そう落ち込むなよ」

「そ、そうよ……。しかたがないって……」
「……秘密に、してくれるか……」
「う、うん」
「し、心配すんなよ。絶対に言わないから」

暖かく湿るズボンに涙しつつ、俺はここに居たのが広と郷子で本当によかったと感謝した。看板にぶつかったことで周囲の注目を集める中、下半身を隠すのに上着を貸してくれた広には感謝してもしきれない。これが美樹だった日にゃ、明日には俺のあだ名はせっかく回避したはずのしょんべん小僧に確定していただろう。
でも俺が墓までもっていこうとした秘密は、それ以上の恥をもって上書きされてしまった。正しく一生の恥である。
う、うわあああああああ！　あんまりだ、あんまりだあああああ!!　み、美樹の馬鹿ぁぁぁぁぁ!!

俺はその日の夜からしばらく、寝る前に枕を涙で濡らす事となった。

見えない方が幸せだよと叫びたい（#177　霊能力者の作り方より）

童守小学校六年二組には、最近クラスで評判の霊能力少女がいる。

ヒョウ柄のヘアバンドと、くっきりした自信ありげな目元が特徴的な少女の名前は鮎原みどり。今日も今日とてクラスメイトの背後に潜む霊の正体を暴いたりしてみていたが……。

「何よ、あの0能力教師！　馬鹿にして、もう！」

実のところみどりに霊など見えてはいない。クラスで注目を集めたくて、ついつい嘘をついていたにすぎないのだ。

ところが今日はクラスどころか学校中で評判の霊能力教師、鵺野鳴介が担任の代わりに授業をするため六年二組にやってきた。そこであっさり真実は看破され、それをばらされはしなかったものの「嘘の霊能力で友達の気を引くのも、ほどほどにな」とこっそり釘をさされてしまったのだ。しょうがない子だな、とでも言うように笑いながらの忠告であったが、みどりにしてみれば屈辱でしかない。そこで勢い余って霊能力入門などという本を読んで、本物の霊能力者になろうと試みたのだが……。

「先輩。それさ……やめておいた方がいいよ」
「んな?!」
訓練を初めてからしばらく。今度はまさかの後輩に注意をされる羽目となった。
声をかけてきたのは、少々癖のある茶色がかった髪色が特徴と言えば特徴の少年。聞けば彼は噂の五年三組……地獄先生ぬ～べ～のクラスだという。名前は藤原樹季。
突然声をかけてきた彼に、みどりはむっとしつつ言葉を返す。
「どうして初対面のあなたに、そんなこと言われなきゃならないわけ？　何、鵺野先生に何か言われたの？　大きなお世話よ！　先生が嘘はいけないって言うから、本物の霊能力者になろうとしてるんじゃない！」
みどりは霊能力者入門に書かれていた訓練を家でも学校でも、時間があればのめり込むように続けていた。樹季に声をかけられたのは学校の薄暗い物置で訓練している時であり、実はいきなり声をかけられて死ぬほど驚いた。そのうえ訓練を邪魔するようなことまで言ってきたものだから、みどりの声は自然と険のあるものとなる。
目力の強いみどりに睨まれた樹季は一瞬びくっと肩をはねさせたが、それでも目だけはそらさず真剣な顔でみどりに説得をもちかけてきた。
「いや、マジでやめておいた方がいいって！　ただでさえこの学校、霊が見えなくても心

霊体験しちゃうような場所だぜ!?　そんな中で見えるようになったら、もう給食も食べられなくなるぞ！　具体的に言うとウインナーとか！」
「はあ？　何よ、ぬ～べ～クラスだからって知ったようなこと言って！」
「実際知ってるからな！　色々と！　嬉しくないけど!!」
今度はみどりが樹季の鬼気迫るような迫力に押される番だったが、もともと気が強いのもあってかすぐに「何故後輩にこんな偉そうに言われねばならないのか」という気持ちが強くなる。よってみどりに、この少年の説得を聞く耳などない。
「とにかく、大きなお世話だわ！　あとちょっとで霊が見えそうなんだから、放っておいてちょうだい」
フンっと鼻息荒くそっぽを向けば、樹季は「あ～、もう！」と言ってがしがしと頭をかく。
これだけきつい言い方をすれば、付き合ってられないと何処かへ行くだろう。みどりはようやく厄介払いが出来ると清々した気持ちで再び訓練に戻ろうとするが……。
「本当に、やめとけって」
「～～～～！　いい加減しつこいわよ！　それに先輩って言うくらいなら敬語を使いなさいよ、敬語を」
なおも立ち去らない樹季にうんざりするが、少年は怒った様子もなく……どこかばつ

が悪そうな顔でそこに残っていた。
「……俺さ、別にぬ～べ～に言われたから先輩に声かけたわけじゃないよ。いや、ないです。ただ先輩の話を聞いて、気になったもんだから見に来た……んです」
「ふ～ん、話は聞いたんだ。何？　嘘で人の気を引こうとしてるかわいそうな子がいるって？」
「ぬ～べ～はそんな風に言わないって！　そうじゃなくて、まあ……ちょっとした話の流れで聞いてさ。あ～……うん。あんまり人に言えることじゃないけど、俺は霊が見えたことで……その、鵺野先生に出会うまで、不登校だったので」
「え……」
「とにかく見るものすべて怖くて怖くて、何処を歩くのも怖いんだ。ずっと目をつむって身を縮こませていたくなる。……五年三組の奴らはすげー肝が据わってるけど、普通は一度でもあんな、霊の世界を見たらトラウマもんなんですよ。だから霊が見たいって気持ちが強すぎて、本当に見えるようになっちまったらヤバイと思って忠告しに来たんです」
　樹季はそこでいったん言葉を区切ると、ひときわ大きい声で言う。
「経験者からの！　忠告です」
　経験者、というあたりをやたらと強調した樹季に、今度はみどりがたじろいだ。しか

し、だからはいそうですかと受け入れられるほどみどりも素直ではない。
「あ、あんたの事なんて知らないわよ。とにかく、ほっておいて！」
情けないがこれ以上話していると、言い負かされそうな雰囲気を察してみどりは吊るしてあった磁石をひったくるように掴むとずかずかと物置を出て行った。
残された樹季は呆然とそれを見送り、ぽつりとつぶやく。
「おいおいおい、これ絶対見えちゃうやつじゃん……」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

鳴介の家に霊能力の扱いについて教えを請いに赴くのが俺の日課だが、その時の世間話の一つとして六年生の女の子の話を聞いた。まあよくある話と言えばよくある話で、その子は特別な力を持ってると言って人の気を引こうとしたらしい。
聞いたときは「後で嘘つき呼ばわりされたりしないといいけど」程度の感想だったが、後日実際にその子を見てちょっと考えが変わった。

その女の子、鮎川さんは薄暗い物置で紐で宙にぶら下げたU字磁石をじいっと凝視していた。うん、話を聞いていなかったら普通にやべー子だと思ってスルーしてたわ。話を知っててもスルーしたいわ。

周囲に「なにあれ～。きもちわる～い」と言われてもやり続ける胆力は見上げたもんだが、それ以前に童守小の薄暗い物置で一人になるとか正気か？　推理物で「こんな所にいられるか！　俺は部屋に戻らせてもらう！」って言うくらいのフラグ力だぞ!?　扉は開けてやってたみたいだが（だから俺や他の生徒からも丸見えだった）それでも俺だったらあんな場所嫌だね。絶対に鳴介か広か克也あたりが一緒じゃないと嫌だね。

まあそんなわけで、どうやら独学で霊視の訓練をしているらしい鮎川さんに遭遇したわけだが……。それを見た俺はピンと来たわけだよ。「あ、これワンエピソード出来ますね。見えない子が見えるようになっちゃって霊にちょっかい出されて大変なことになっちゃうパターンですね」、と。

地獄先生ぬ～べ～全話を事細かに覚えているわけでない俺でも、物語のパターンとして推察することくらい出来る。今回の場合、モロそれだろって気がしてる。だから事が起こる前に実体験を交えて説得して、鮎川さんがトラウマ持ちにならないようにって……そう思ったんだけどな。

昨日、もっとがっつりしっかり説得しておくんだった!!

「やっぱり巻き込まれてんじゃねーか！　ほら！　ほらぁぁぁ！　俺の言うこと聞かないからー！」

「ご、ごめんなさ～い!!　キャアアアア!?　もういや～！」

数時間前、鳴介に息巻いて「霊能力に目覚めた！」と報告しに来た鮎川さん。放課後、気になって校門から出ていく彼女に声をかけようとしたんだが……。声をかけた途端、青ざめた鮎川さんに泣きつかれた。しかも何故かその直後に「待ってました！」とばかりに周りの浮遊霊が押し寄せてきやがった。勘弁しろよ!!

普段見ないふりしてスルーすんのには慣れたけど、こんな一挙に押し寄せられたらたまらんわアホか！　リアルゾンビゲームとかいらねーよ！　この世界まだバーチャルリアリティ的なものはもっと先だろ!?　こんな先取りはいらねぇ!!

しかも鳴介に助けを求める前に、錯乱した鮎川さんが霊から逃げようと走り出し、腕を引かれて俺も一緒にダッシュするはめになった。この子意外と力強いな!?　というか、待て待て鮎川さん！　みすみす鳴介の近くという安全圏から遠ざかってどうする！（つーか、なんでこんなにたくさん!?　いくらなんでも多すぎる！）

そこでふと、思い当たる可能性。

多分だけど、霊能力に目覚めたばかりの鮎川さんに俺の力が引っ張られたんじゃ……？　でもって、それにここいらの浮遊霊がみ～んな引っ張られてしまったとか……。

「ガッデム!!」
俺はむせび泣きながらも、とにかく走った。

そしてしばらく逃げ回っていたが、このままではらちが明かない。俺はべそをかく（おれもかいてる）鮎川さんの腕を今度は逆にぐいっとひっぱり、逃げる方向を示す。
「とにかく、ここまで来たらもう学校に戻るより俺の家に来た方が早い！　あとちょっと、がんばれ先輩！」
「う、うん……」
強気な態度はどこへやら。しおらしく縋るような目で見てきた少女に、これは守らねばという男として、大人としての矜持が刺激される。
幸い今回の相手は力の弱い浮遊霊がほとんどだ。俺自前のお経部屋に逃げ込めば、多分どうにかなる。今も俺お手製のなんちゃってお札でちょいちょい回避できているし。
……本当はあんまり数無いから使いたくないんだけどな。そうも言ってられんが。
「きゃああ!?」
「!?　くそッ」
しかし周囲の霊が苛立ち始めたのか、数以上にこちらへ干渉しようという意思が強くなった。「何故助けてくれないの」「苦しい」「見えてるくせに」という意思の洪水がいく

つもいくつも波のように押し寄せてきて、慣れているはずの俺でもちょっときつい。しかもこいつら、ついには物理的に来やがった!!

「危ねぇ!!」

霊に掴まれて歩道橋から車の通りが激しい道路に引きずり落とされそうな鮎川さんを、なんとか引き戻す。だけど勢いよく引っ張ったからかその反動で、一学年上だからか俺より大きい鮎川さんの体に押しつぶされて、とっさに動けなくなってしまった。小学生の頃って、基本的に女の子の方が大きかったりするよな……とか考えてる場合じゃない。

しまった!!

『薄情者〜』

『死ね、死ねぇぇぇぇ!!』

『なんで助けてくれないの』

『見えてるくせに無視しないで』

『お前らも一緒に来いいいいい〜』

「あ、ぐ……ッ」

両手両足掴まれて、身動きがとれない。骨が見えたり爛れている腕に掴まれて、ずるずる向かう先は先ほどの鮎川さんと同じく歩道橋の縁。落とされれば行きかう車にゴ

ム毬のように跳ね飛ばされるか、最悪ミンチだ。
　幸いなことに今度は霊力が強い俺の方にだけ意識が向いたのか、鮎川さんは近くにいたにも関わらず霊たちに無視されている。それだけが救いっちゃ救いだが、このままだと俺が死ぬ！　ど、どうしよう!?
「あ、あ……！　誰か、誰かーーーー！　あの子を助けて、お願いよ!!」
　鮎川さんの声に道を歩いていた大人たちが気付いてくれたが、彼らには霊が見えない。そうなると小学生が歩道橋から落ちかけているという事より、小学生が浮遊しているという珍事に目が行ってしまい、脳が混乱しているのか動けずにいるようだ。おおおい頼むよ!!　せめて何らかのアクションをくれ!!
　しかしそうこうしている間に俺の体はいよいよ歩道橋の柵を超えそうで。鮎川さんがなんとか俺の体を掴もうとしてくれているが、霊が多すぎてそれも出来ないようで……あれ、俺詰んだ……？
　ここ最近強い妖怪ばかり目の当たりにしていたからか、俺は怖がるくせに浮遊霊を心のどこかで舐めていたのかもしれない。これじゃあいつかの広たちを笑えねぇな……ああくそ。これで終わりなのか？　こんなんじゃ、先にあの世に行ったこの世界の俺に顔向けできねぇよ……！
「！」

もし落ちても、奇跡的に布団を積んだ軽トラの背中に落ちて助かるかも。そんな希望的観測だけを頼りに、俺は来るべき衝撃に備えて目を瞑った。

が。

「お前ら、そいつから離れな！」

聞き覚えのある声と共に一瞬で霊の気配が散り、引きずり落そうとしていた恨みがましい手が消える。そして今度は複数の小さな力が俺をひっぱり、安全な場所まで引き戻してくれた。

がくっと歩道橋に膝をついた俺は未だ治まらずバクバクとうるさい胸の鼓動を抱えて、震える体をぎゅっと抱きしめた。だらだらと冷や汗は凄いし多分顔は真っ青で、少しの間……俺は助けてくれた相手が誰なのか、確認することも出来なかった。

「樹季、大丈夫か!?」

「！」

助けてくれた相手とは別の聞きなれた、そして頼もしい声。それを聞いた途端安心感が押し寄せてきて、ぱっと顔を上げた俺はようやく周囲の存在に気付く。俺を囲んで心配そうに見てくるのはたくさんの管狐。俺を引っ張ってくれたのはこいつらか。ってことは。

「遅いよ、セ～ンセ！　樹季はあたしがきちっと助けたところ！」

ぐいっと俺をひっぱって立たせ肩を組んできたのは、イタコギャルのいずな。どうやら俺は今回、こいつに助けられたらしい。

いずなは得意げに胸をそらすと、ぽんぽんっと俺の頭を叩く。

「いや～、びっくりしたわ。豆太郎と遊びにこいつの家に行こうと思ったら、とり殺されそうになってるんだもん。まあこの天才美少女霊能力者いずな様が華麗に助けたわけだけど」

「お前また勝手に俺の部屋入る気で……いや、いいや。助かったよ」

「ははっ、まあ今回は正真正銘のお手柄だったしな。偉いぞ、いずな」

タッチの差で駆けつけてくれた鳴介も、苦笑しながらいずなを褒める。しかし〝天才美少女霊能力者〟などとのたまういずなを見て、俺と鳴介ははっとなって鮎川さんを見た。や、やばい。これだと懲りるどころか霊能力への憧れが強くなってしまうんじゃ……!?

しかし俺と鳴介の懸念とは裏腹に、べそをかいたままだった鮎川さんはそのまま鳴介に駆け寄ってきた。

「せ、先生。ごめん、ごめんなさい。もう、こんな力いらない。こわ、かったし、それに、わたしのせいでその子が、藤原くんが、死んじゃうところだ、った……！　うう、ひぐっ」

「あ、ああ。分かった、安心しなさい。今から鬼の手で霊視の能力を封じるから」

どうやら霊以上に、自分のせいで俺が死んでしまいそうだったのがよっぽど怖かったらしい。気は強いけど、根は優しい良い子のようだ。そして普通だ。……これが美樹あたりなら反省した後に「さっすがイズナお姉さま！　素敵～！」とか言い出すんだろうな……。そして新しいトラブルの芽を生やす。やっぱりぬ～べ～クラスの肝の太さ尋常じゃねぇ……。

まあ、とりあえず一件落着ってやつかな！　それにしても鮎川さん羨ましい。霊視に目覚めても封じられる程度の力だもんな……。俺もそれで済んでたら、どれだけ平穏に暮らせたことか。

「それにしても、今回はマジ助かった。サンキューな、いずな」

「感謝をするならもっとあたしを敬いなさいよ。ありがとうございましたいずなお姉さま、でしょ？」

「お前が俺の部屋で寝転がって菓子食べてマンガ読んでいくような奴じゃなければもっと敬えてた」

「あん？　……次は助けないわよ？」

「この度は矮小なわたくしめを助けていただき誠にありがとうございました超美少女天才霊能力者最強無敵ないずなお姉さま!!　この藤原樹季、御恩は一生忘れません!!」

「ふふん、なんだちゃんと言えるじゃない。よろしい！　よきにはからえ！」

「ははーっ！」
「お前らの力関係、どうなってるんだ？」
……とまあ、そんなやり取りがありつつもこの件は終わったわけだ。

そして数日後。

「おーい、樹季！　この先輩がお前に用だってさ！」
「んー？」
教室でだらけていると、教室の入り口の方から克也に呼ばれる。何事かと見れば、そこにいたのは鮎川さんだった。
俺はクラスメイトの好奇の視線に晒されながら、なんだろうと思いながらそちらに向かう。そして鮎川さんに向かって軽く会釈をすると、少し照れたような顔で鮎川さんは可愛らしくラッピングされた紙袋を差し出してきた。
「その、この間のお礼よ。よかったら食べて」
「……。え!?　い、いいんスか？」
「もちろん、この間のお姉さんにも渡してよね！　中にふたつ入ってるから。それと先生にはもう渡したから。じゃ！　またね！」

そう早口でまくしたてるように言うと、鮎川さんは素早く教室を出て行ってしまった。俺はぽかんとしながら手元に残された紙袋を見る。開けてみると、中身はケーキだった。……多分、手作り。

「おやおやおや～？　樹季氏も隅に置けませんな～」

「さ～て、詳しく話しもらおうか？」

「う、うっせ！」

にょきにょきっと両肩のあたりから顔を出した広と克也に、俺は慌ててそんなんじゃないと首を振りつつケーキを後ろに隠した。せっかくのお礼だし、食べられたらかなわねぇからな。

にしても、あれだな。年齢的に恋愛対象ではないけど、こうして学校で女子から手作りお菓子をもらえるシチュエーションは素晴らしい。怖い思いはしたが、たまにはおせっかいもしてみるもんだ。

ま、霊なんて結局は見えない方が幸せなんだけどな!!

ドキドキ☆一週間同居生活！（＃２３６　メリーさんの巻）

「なあなあ樹季！　ナスビにソースと醤油とマヨネーズと味噌をつけるとステーキの味がするんだぞ！　いつも飯の事では世話になってるからな。今日は俺がナスビステーキをご馳走してやるよ！」

そんな風に嬉しそうに茄子片手に言ってきた鳴介に、俺は何とも言えない顔になった。いや、それは普通にソースと醤油とマヨネーズと味噌の味だろ……。茄子の食感じゃステーキってのも無理あるって。

どうやら今、学校で作っている家庭菜園の野菜が豊富に実っているらしい。希望者は持って帰っていいらしく、鳴介のナスビの入手場所もそこだ。採れたてだし、きっとおいしいだろう。……でもステーキはやっぱり無理あるって。

だけど俺はニコニコ笑顔の善意１００％で心底「ナスビにソースと醤油とマヨネーズと味噌をつけるとステーキの味」だと信じ切っている鳴介にそれを言うのは酷だと思い、「あ、ああ。楽しみしてるよ」と答えておいた。

……世話になってるのは俺の方だし、今度俺の小遣いでも買える輸入品の牛肉で

も買ってってやるか。

たしか蜂蜜やすり下ろした玉ねぎ、ビールとかに漬けておくと硬い肉でも柔らかくなるんだよな。あとマイタケでもいいんだっけ？　本当は良い肉食わせてやりたいけど、今の俺は小学生。親に食わせてもらっているうちは、ちょっと無理だからな。そこは工夫で補おう。俺もどうにか安上がりで美味い肉が食いたくてよくやってたし。

う～ん、この時代にはまだインターネットがあまり普及していないのが悔やまれるな……。せめてクックパッドでもあれば鳴介の食生活をもうちょっとお手軽に改善できたかもしれないのに。

そんな風に俺が節約を考える主婦のようなことを考えていた、暑い暑い真夏日だった。

……俺はこの日、真夏の暑さなど吹き飛ぶような、あの恐ろしくも悲しい霊と出会ったんだ。

いつも通り授業を終えた放課後、俺達は鳴介に「学校の家庭菜園から欲しい人は野菜を採っていってもいいぞ」と言われて放課後菜園に来ていた。

ちなみに昨日は俺のテクがうなった安肉ステーキと茄子の生姜醤油炒めをご馳走して鳴介に絶賛されたばかりである。……う～ん、ゆきめさんに料理を教えた経験もあるし、こうして鳴介にちょいちょい料理を作ってるから、最近俺の料理の腕が上がっている気がするな。もっとうちでも作ってみるか。母さんも父さんも喜ぶし。こうして考えると料理できるってのもいいもんだ。むこうに置いてきちまった父さん母さんの分もきっちり親孝行だぜ。

そして俺や広たちがわきあいあいと収穫したり野菜を試食していたのだが、そんな中、中島法子……のろちゃんがピアノのレッスンがあるからと先に一人帰ることになった。それを見て俺もそういえば用事があったことを思い出し、先に帰ることをクラスメイト達に告げる。

そういえば今日は母さんに醤油と豆腐買って来てくれって頼まれてたんだよなー。危ない危ない。今日の特売のスーパーはちょっと遠いから、もうちょっと学校に長居し

てたら夕暮れの時刻に家に帰る所だった。
この童守町で黄昏時で一人とかフラグ過ぎて無理だっつーの！　怖いわ！　思い出してよかった……。
俺は菜園わきに置いてあったランドセルを背負うと、そのまま校庭から出ていこうとする。が、ふと背筋が粟立って背後を振り返る。そこには荷物でも取りに行くのか、学校の玄関に消えていくのろちゃんの姿。
何だろう、妙に胸騒ぎがする。
俺は心にもやもやしたものが立ち込めるのを感じると、その足は自然と玄関へと向かっていた。脇から「なんだ樹季、忘れ物か？」と克也に問いかけられるが、足は止まらない。何かに引き寄せられるようにして、俺はのろちゃんの背中を追って歩いた。
明るい外から校内へ入ると、夏のせいか普段よりよりくっきりと陰影がわかれる外と中の影響か一瞬視界が曖昧になる。
そして……俺に気づいて振り返るのろちゃんの更に向こうに、”彼女”を見つけた。
校舎の影の中、ひときわ目立つように白く浮かび上がる彼女の姿を。
「あれ、樹季くんも帰るの？　だったらよければ途中まで一緒に……」
「のろちゃん、来い！」

「え？」
俺は反射的にのろちゃんの腕を引き寄せ、後ろに下がらせた。そうすると俺は〝彼女〟……全身真っ白な姿の、手足の無い人形を持った女の子と対峙することになる。
………………おう。
全身真っ白で、手足の無い人形を持った、女の子、な…………。
…………………。

（メリーさん回来ちゃったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!）

しかも電話の方じゃないお方だよ!!　殺傷能力的には多分どっこいだけど凄惨さでいえば上の方のお方が来ちゃったよ!?　やめて俺的地獄先生ぬ～べ～トラウマランキング第二位!!

今俺かっこつけました！　いや女の子守るのは男として当然なんだけど！　でもかっこつけました！　背後に庇うとかやっちゃいました!!　つまり俺メリー様とガチ対面！　きゃあああああ！　なんかサイコパワー的なものでげた箱揺らして上履き落としてきたぁぁぁぁ!!!　そして俺の眼前まで迫ってきたぁぁぁぁぁ!!

『私のお人形……、手足が……、ないの……』

「あ、はい」

俺気絶一歩手前。けど背後に悲鳴あげてるのろちゃんがいるから気絶も出来ない件。結果手ずからメリー様に差し出されたホラー人形受け取っちゃった件。

そしてメリー様は……えっと、控えめな表現で表すと肌荒れが凄い感じのお顔でくわっと目を光らせてこう言った。

『手足を返して!!』

「不肖藤原樹季、全力で探させていただきます!!!!」

顔面涙と鼻水の洪水の中、俺は敬礼でもって了解した。そしてこれは秘密だが、ちょびっとちびった。……本当にちょびっとだけだ……。さっきトイレで大も小も済ませておいてよかった。でなければ俺は脱糞していた自信がある。

学校のトイレでウンコできるとかすげーと時々言われるが、こう言う事があるから帰宅前のトイレタイムは重要なんだよ！

そういやメリー様渾身の台詞の時腕と足の付け根がぴりっとしたけど、これは「見つけられなかった時はここをちぎっちゃうぜ☆」っていうマーキング的な？　は、はは、ははははは……。

メリー様が居なくなった後、俺の視界はぐるんとまわって真っ白になった。

＋＋＋＋＋＋

「どうした法子(のりこ)!?」

法子の悲鳴を聞きつけて、担任の鵺野鳴介、クラスメイトの広、郷子、美樹が真っ先に駆けつける。そして頼れる相手が来たことを悟ると、法子は鵺野に抱き着いた。

「先生！　妖怪が、妖怪が……！　樹季くんが、わたしをかばってくれて……！」

「！　なるほど」

鵺野はそこに居たもう一人の生徒……藤原樹季の様子を見て納得したように頷いた。

「あー……。駄目だこりゃ。立ったまま気絶してるぜ」

「のろちゃんをかばったところまではかっこいいのにねぇ……」

「無理してかっこつけようとするからよ」

霊能力少年藤原樹季。

彼は、立ったまま白目をむいて気絶していた。その手には手足の無い人形が握られていたが、メリーさんが一時的に去るまで意識を保っていただけ彼としては頑張った方である。

「とりあえず、樹季を保健室に運んでから話を聞こう。……法子。どんな妖怪が現れた

か、教えてくれるな？」

＋＋＋＋＋＋＋

メリーさん。それはぬ～べ～の物語の中でも特殊な霊で、サイコゴーストと呼ばれるものだ。生前霊能力者だった人間が霊になる事でよりやっかいになった存在である。

一般的に広がっている話では、並外れたサイコパワーを持ったメリーさんは生前それが原因で周りから化け物扱いされていたらしい。そしてある日……大切な人形をバラバラにされた日から三日後。彼女は自殺した。それ以来毎年、自殺した七月にいろんな学校に出没して無差別に生徒を殺す……というのがメリーさんの怪談だ。

そしてこの世界ではそれは噂話ではなく現実で、よりにもよって俺自身がメリーさ……様に人形を渡される羽目になってしまった。俺はこれから一週間以内に学校に隠された人形の手足を探し出さなければ、探せなかった分の手足のパーツを引きちぎられ

て死ぬ羽目になる。そんなの嫌に決まってるだろ!!

……冷静に考えれば彼女の境遇は過去の鳴介に似通っており、俺自身もぬ～べ～クラスでは無い場所で、更に鳴介が居なかったらメリー様と同じ道を辿っていた可能性もあるものだ。だから無暗に怖がるのも、どうかとは、思うんだが……。

無理無理無理。超無理。

殺害方法が残酷過ぎる上に実際対面してみて超怖かったから怖がるなってのは無理です。だってトータルあの子何人殺してると思ってんだ。あと残された人形超怖い。めっちゃ強い眼力で睨んでくる。え、なに君付喪神的な何か？　メリー様の相棒？　それともメリー様の末端？　この視線の先にはメリー様が居るの？　すみません勘弁してください。丁重に扱うんで勘弁してください。

でもいくら怖くても出来れば穏やかに成仏して欲しいのはたしか。殺されてしまった今までの子供に関しては、あの世に行けばあの世が裁定を下してくれる……はず。

だから俺がすべきことは……。

「とりあえず人形の手足を集め終えた後、一瞬でも隙が出来たところを狙って鬼の手を使って俺とメリー様をつないで、俺とぬ～べ～の二人がかりで直接成仏について交渉するのがいいと思うんだ」

「（メリー様？）樹季がそれでいいなら、俺は協力するが……」

保健室で目を覚ました俺は、しばし気持ちを落ち着かせるために時間を置いた後鳴介に提案した。それに対して鳴介は了承はしてくれたものの、こちらを見る目は心配そうだ。

……ま、まあ気絶した後でこんな前向きな提案逆に大丈夫かって思うかもしれないけどさ。でもまさか「お前の昔の体験をメリーさんに見せて共感を得て心を開いてもらった上で成仏させよう」なんて鳴介の古傷に塩すりこむようなこと言えんし……。

多分結果的には漫画と同じように鬼の手を使った時点でメリー様に鳴介の記憶も流れ込むんだろうけど、それまでの過程で古傷掘り起こしてわざわざ鳴介を傷つける必要もないだろう。

結局のところ鳴介のつらい記憶を利用するみたいで申し訳ないが、俺も命がかかっているのでそこはちょっと許してほしい。……すまん鳴介。

「俺たちも人形の手足探すの手伝うぜ！」

「そうよ！　ぬ～べ～クラスの結束力を見せてやるんだから！」

「そうなのだ！　樹季くんを死なせたりしないのだ！」

「しょうがないわね～。美樹ちゃんも協力してあげるわ。まかせなさい！　こういうの

得意よ！」
「俺も探すから、あんまり悲観すんなよ」
「た、助けてもらったんだもの！　わたしも協力するわ！」
保健室に来てくれていた広、郷子、まこと、美樹、克也、のろちゃんが口々に言ってくれる。
おお、頼もしい……！　それは本当に助かる。まず手足を見つけないと、多分めっちゃ攻撃してきて近づくことも不可能だからなメリー様。まずは交渉のカードを手にいれなければ。

そして翌日から、メリー様の人形の手足の探索が始まった。

が、朝教室に入った途端何故か俺はクラスメイトに奇妙なものを見るような目で見られた。俺の事情は広たちが説明してくれてるからみんな手足探しを手伝ってくれるはずなのだが、どうにもこれは同情とか哀れみの目線ではない。
「ど、どうかしたのかみんな？」

「いや、どうかしたのはあんたよ。なにそれ」
「これか？　いや、カバンに詰め込むのもかわいそうだし、手でもって歩くのもちょっとアレだからさ……」
　美樹が指さすのは、昨日メリー様から押し付け……託された人形様だ。
　多分ちょっとでも手放した時点でメリー様の逆鱗に触れるので、家に帰ってから持ち運び専用に家庭科の授業で余った布で簡単な袋を作ったのだ。適当に扱って怒りに触れるのも嫌なので、ちゃんと息苦しくないように上半身は出るようにしてある。
　そう、この人形は赤子のように繊細に丁寧に、大事に扱わねばならんのだ……！　なんたってメリー様が怖いからな！
「そうじゃなくて、その服とカツラよ！　あと顔もなんか変わってない!?」
「ああ」
　どうやら美樹をはじめとしたクラスメイト諸君は、人形様に着させた洋服と金髪のウィッグが気になっていたらしい。いや俺も気づけよ。それっっこまれるわ。
「だって裸のまま家に持って帰ったり持ち歩くの怖……じゃなくて、お預かりしている人形だし、たいせつに扱わないとってさ」
　言外に「お前ら俺はあれを持ち帰って、かつ持ったまま寝なきゃならねーんだぞ。しかも一週間。ちょっとくらい見た目を怖く無くさせてもいいだろ！」という主張を込め

て言えば、何人か分かってくれたのか哀れみの表情で頷いてくれた。そうか、分かってくれたか。

俺は昨日の夜家に持ち帰った人形様をどうしたものかと考えた。だって素のままの見た目で一緒に寝るとかハードル高ぇっつーの。一週間毎朝布団に黄色い世界地図作る自信あるわ。豆太郎も流石におびえちゃって、添い寝してくれそうになかったし……。

だから最上級の敬いを込めて土下座した後「ちょ～っとお洋服着せさせて頂きますね～。お寒いでしょう？」とか「いやぁ、パンクな髪型も素敵ですけどこの金髪ロングとか似合いそうだな～！　白い肌とくっきりした目鼻立ちにはさぞお似合いかと！」とか「お肌が荒れ気味のようですから、ちょっと整えますね～。うわぁもとが美人だから化粧も映えるな～！　チークの色も良くお似合いですね！　紅顔の美少女ってやつですか？　いや～美しい上にお可愛らしい！　あ、口紅もちょっと塗りますね～」とか……およそ昔別れた彼女にすら言えた事のない褒め言葉を猫なで声で並び立てながら、人形の見た目を整えたのだ。

フッ……学校帰りに恥を忍んで人形用の装飾品を買ったかいがあったぜ。その代りただでさえ金欠の鳴介に出費させてしまったが。……あとでちゃんと返そう。

俺のお経部屋に入る時すさまじい形相で嫌がっていた人形だが、俺が精一杯ＶＩＰ扱いするとだんだんまんざらでもなさそうな感じになってきたので、見た目の改造はうまくいった。手足が無いのもひらひらのロリータ服（超高かった）で隠れているし、眼球の無い片目もファンシー柄の眼帯を作って隠した。母さんの化粧品をこっそり借りてメイクもしたから見た目だけならもう怖くない！　俺は頑張った！

「それにしても、お前やっぱり凄いな……。霊的な物質に服着せて化粧させたのか……」

「え？」

俺の昨晩の奮闘を胸をはって伝えると、ちょうど教室に入ってきた鳴介がなんとも言えない顔でそう言った。……ふと、何故か鳴介がナスビステーキを提案してきた時の俺の顔もこんなんだったのだろうかと考えた。何とも言えない時の顔ってこんなか……。

「いや、その人形は物質化しているがおそらくもとはメリーさんの霊力の塊だ。普通ならそう簡単に干渉できるもんじゃないぞ。……昨日うちに泊まらなくて大丈夫だったかと心配してたんだが、無用だったみたいだな。いやー、お前もたくましくなったもんだ」

「え、たくましくはなくない？　だって気絶してたし」

「ああ。でも……なんか凄いな」

「樹季お前、また器用貧乏な事を……」

「ほ、ほっとけ！」

　な、なんだこの空気は！　俺はどうにか恐怖を緩和しようと頑張ったってのに！　うう……だってそうでもしないと俺寝られねーし……！　この人形様、途中で「私の手足かえして……！」って泣き始めるというホラー演出までしてくんだぞ！　こうでもしないと殺される前に俺のライフはゼロだよ！　衰弱死一直線だよ!!

　ま、まあいい。とにかく俺の命運は、クラスメイトと鳴介にかかっているのだ！

「とにかく、今日から探索開始だ。みんな頼むぞ！」

「おう、まかしとけ！」

「頑張るのだ！」

「チッ、しかたがねーなぁ」

「元気出して、樹季くん。みんなで探せばすぐに見つかるさ！」

「ふう、やれやれ。しかたがないから、僕も手伝ってあげるよ。樹季くんを死なせたくないしね」

　真っ先に男子連中が答えてくれて、続いて他の皆も元気に返事をしてくれた。俺はいい級友を持った……！　こいつらホントにいい奴らだよ。

「よし！　樹季のためにメリーさんの人形の手足探し、始めるぜ！」

その後、クラスメイトだけでなく鳴介の呼びかけで「全校大掃除」という形で学校中に協力してもらいながら、人形の手足探しは続いた。しかし両腕と右足は見つかったものの、左足だけが未だ見つからず時間だけが過ぎた。どうやらメリー様は妨害霊波なるものを出しているらしく、俺と鳴介の霊感やフーチの類もまったく意味をなさないのだ。

そして気づけば一週間……ぶっちゃけ詰んでいる。

「メリー様、俺の脚じゃなくて豚足とかじゃ許してくれないかな……。そっちの方が旨いし……」

「いや、豚足は結構人を選ぶ……じゃなくて、そんなことしたら普通に怒ると思うぞ。というか人形が頷いてるんだが……」

「お前……」

俺の馬鹿な提案を鳴介と人形様の両方に否定された。つーか人形様、お前絶対意志あるだろ。合いの手が上手いのが妙に腹立つ。

「とにかく、今日は俺が一日中お前についててやる。最悪左足が見つからなくても、俺に

まかせろ！　絶対守ってやるからな」
「ああ、サンキュー。心強いぜ」
　頼もしい鳴介のセリフだが、それをありがたく思えど安心はできない。メリーさんは、除霊不可能な霊なのだ。経文や霊力の類は跳ね返される。
　これはもう、どうにか漫画通りの流れを作って解決するしか……！　いやでも、そうなると鳴介すっげー攻撃されるんだよな。毎度の事と言えど、ダチが傷つくとこなんて好んで見たくない。はて、どうしたものか……。
　とか考えてたら。
「ぐあ⁈」
「鳴介⁈」
　メリー様の攻撃が始まった！　あ、あいつ邪魔者を先に排除するつもりなのか、鳴介の頭に壺ぶつけやがった！　しかも推理漫画なら加害者の凶器に使われるレベルのデカい奴！
「鳴介、鳴介！　大丈夫か⁈」
　鳴介の頭からは血が流れだしており、まずどう見ても大丈夫そうじゃない。
　今の俺の体格じゃ簡単に鳴介を運ぶことは出来ないし、とりあえず応急処置だ。ヒーリングでなんとか出血だけでもおさえて……。

そうして、俺が鳴介にヒーリングを施している時だった。ひたりと左足に何かが触れる。そして触れられた個所から、どうしようもなく「死」を連想させる寒気が俺の体を這い上がった。

恐る恐る、視線をそちらにむける。

『左足、さがせなかったの……』

メリーさんが、そこにいた。

が、この時俺の恐怖を上回った感情があった。

「テメェ!!」

ずるりっと廊下を這うようにして現れたメリー様……いや、メリーに俺は気休め代わりに持っていた自作の札（鳴介に作り方を教えてもらった）を巻いた鉛筆を投げつけた。案の定すぐに弾かれたが、とりあえず左足からメリーの腕を放すことに成功する。

「お、おまえなぁ！　周りまきこむのはやめろよ！　鳴介死んじゃうだろ!?」

無駄と分かっていても、言わずにはいられなかった。だって、すごい血だぞ！　いつ

も鳴介は傷だらけだけど、これその中でも絶対ヤバいやつ！　怖いけど文句の一つも言いたくなるっつーんだよ！

『ひだり、あし……よこせぇぇぇ!!』

「やだよ！　ほら、お前の人形きれいにしといてやったぞ！　これで満足しろよ！」

『わたしのひだりあし、かえしてぇぇ』

「テメェ人形この野郎お前まんざらでもなさそうだったじゃん!?　頑張ってもてなしただろ俺！」

いつになくはっきり霊どもに言い返す俺だが、ビビっていないわけじゃない。今はちょっとアドレナリン出過ぎてて麻痺してるけどやっぱ怖ぇ……！　人形のここ最近の上機嫌っぷりを返上するような唐突な手のひら返しにも腹立つけどその前に怖ぇ……！

鳴介が気絶している今、鬼の手は使えない。手袋を単純に外すだけでは鬼の手の力は発揮できない！

どうする、俺。どうする!?

「ええい、ままよ!!」

『!?』

漫画でしか聞いたことないセリフを叫びながら、俺がとった行動とは……メリーさん

に特攻し、脚を掴まれる前に抱き着くことだった。
ちなみに人形も持ったままだったから、そのまま抱きすくめる。
「ぐあああああ!?」
が、直後に凄まじい拒絶反応。……メリーの念力だ。念力で俺を引き離し、脚をちぎって殺す気だ！
けどさせてたまるか！　まだ鳴介の応急処置もすんでないってのに！
ふと、その時だ。一瞬だがメリーさんの気がそれる。……誰かがメリーさんに向かって消火器をふきかけてくれたのだ。
「い、いつきくん！」
「のろちゃん!?」
そこに居たのはのろちゃんで、足をがくがく震えさせながらも消火器の吹き出し口をこちらに向けている。そして一瞬俺に向けていた念力をといたメリーの視線が、次なる邪魔者を捉える。
ヤベェ！　このままだと今度はのろちゃんがやられる！
「もう一度だ！」
俺はすくんだ足を再び動かして、無理やり前へ進む。そして再度、メリーに抱き着いた。

けど今度は抱き着くだけじゃない。こうなったら、俺が鬼の手の代わりをやってやる!!

（伝われ、伝われ……！）

無茶だとしても、俺に霊能力があるってんならテレパシーくらい発動しろ！　そして俺の思考と鳴介の記憶をメリーに届けてくれ!!

再度、背骨や肋骨がメリーの念力で軋む。だけど放さない、放せない。俺の巻き添えで鳴介とのろちゃんが死ぬなんてごめんだ！　それに俺だって死にたくない！　こっちの世界で死んだ、この世界の俺のためにもジジィになるまで生きるんだ!!

『!?』

「あ」

直後、俺の額を貫通してメリーの額に見慣れた人外の指が沈んだ。

「鳴介!?」

振り返ると、血だらけの頭をなんとか起こして鬼の手の指だけをこちらに伸ばしている鳴介。そして霊体のそれは俺の額を通過し、さっきまでの俺の願いを叶えてくれる。

流れ込む、記憶の濁流。幼い鳴介。いじめられた思い出。助けてくれた先生。

次はメリーの記憶。自慢だった超能力を、誰にも認めてもらえず恐れられ、苦しくて

苦しくて悲しくて孤独だった日々。そのまま終わらせてしまった短い命。
そして俺の記憶。こちらの世界に来てからどんなに恐ろしかったか。怖くてたまらなかったか。けど同時に、どれだけ救ってもらったか。

記憶は全て混濁し、俺は成仏のため説得する言葉を思い浮かべる事も出来なかった。しかしそんな俺を、俺が抱きしめるメリーごと抱きしめた大人の腕。鳴介だ。
俺はそれに勇気づけられると、再びメリーを強く抱きしめた。
言葉はなく、ただただ俺も鳴介も流れ込んできたメリーの記憶の感情に寄り添う。それはメリーの方も同じらしく、俺達の記憶を見ているのか動く気配がない。
やがて、メリーの頬を一筋の涙がつたう。
「……ッ！　神よ！　どうかこの子を成仏させてくれ！」
鳴介が経と共に発した言葉と同時に、メリーの体が光る。そして光と共に消えゆくメリーに、俺も何か一言言いたくて口を開く。けど出てきたのは喘ぐような頼りない、言葉にもならない声。
だからおれはメリーが消える寸前までずっと抱きしめていた。……この子が、来世では幸せになれるようにと祈りながら。

「先生……あの子は成仏したの？」
「……わからない。あの子は俺自身だ。もしも子供の頃美奈子先生という理解者にめぐりあえなかったら……俺もあの子のようになっていたかもしれない」
のろちゃんの問いに答えた鳴介は、後半を半ば独白のように語る。
俺は鳴介の頭に応急処置のヒーリングをほどこしながら、ぽつりとつぶやいた。
「それは俺も同じかもな。めいす……ぬ～べ～に出会えなかったらどうなってたかわからない。でもさ、信じてやろうぜ。罪を償ってあの子の魂が来世にいったら、今度こそ楽しく生きれるようにさ」
「樹季……。ああ！　そうだな」
鳴介は少し元気が出たようで、俺の意見に同意してくれた。のろちゃんも頷いてくれて、場にちょっとしんみりとした空気が流れる。

しかし、俺はこれだけは言いたい。

「でもなんであいつ人形だけ残していったんだよ!!」
「ははっ、どうやらそれは霊物質じゃなくてあの子の遺品だったらしいな。もう霊気も感じないし、大事にしてやれよ」
「え、これ俺が引き取る流れ!?」
　手足のパーツが残った人形だけは、あとかたもなく姿を消したメリーの代わりに俺の手元に残っていた。

　その日から、俺の部屋にひとついわくつきのインテリアが増えた。
　時々視線を感じるのは嘘だと思いたい。

＋＋＋＋＋＋＋

とある彼岸にて。

「……」
「あ、新顔だ」
「!?」
「あれ、俺の顔になんかついてる？」
「……」
「あ、もしかして俺と同じ顔したやつに会った？」
「……」
「そっか。あいつ元気だった？」
「……」
「よかったー！　俺の分も元気に生きてもらわなきゃ！　あとでたっぷり冥土の土産話

がききたいし！」
「……」
「あれ、行かないの？　この先があの世の入口だよ。俺は無理してとどまってるけど」
「……」
「わかった、いいぜ。俺も丁度たいくつしてたから、話し相手になってくれよ」
「……」
「え、俺の名前？」

「俺の名前は、藤原樹季。これから八十年くらいよろしくな！」

ジャンプのモラルは海賊マーク（#２４１　鬼娘・眠鬼現る！より）

俺の名前は藤原樹季！　頭脳は大人、体は子供などこぞの名探偵と同じ状態を素で行く霊感少年さ！　といっても俺の大人な頭脳は某高校生ほど回転良くないけどな！　二十五歳だった俺からすれば高校生もまだまだ子供の部類なんだが、ここ最近元の年齢、体の年齢で同い年なのに立派な連中をたくさん見てるから、年食っただけじゃ大人って言えないんだなって思う事しばしばなんだ！　うん、高校生探偵！　推理力とか洞察力とか知識量に加えてワイハーでヘリコプターの操縦とか覚えちゃったり英語ペラペラなお前はもう大人でいいよ！　自分が高校生だった時と比べると色々しょっぱい気持ちになるから立派なお前は大人でいいよ！

……俺は何を一人脳内で愉快に喋っているんだ。

俺は急に我に返って自分にツッコミを入れたが、目の前の光景に再び現実逃避の大海原に漕ぎ出そうとした。しかしそれは許されない。何故なら俺の手には一枚のパンツが握られており、そしてそのパンツの持ち主が猛然と俺に向かってつっこんできたからだ。

「下僕三号！　そのパンツをよこしなさい！」

同級生から他学年、そして先生たちに至るまでパンツ一丁にされ、あまつさえパンツ瞬間移動なる阿呆な技で次々と全裸にされていく光景。それを成している痴女に対して、俺が返せる答えは一つだけだった。

「モラル!!」

「はぐぅ!?」

俺はこの日、初めて女の顔を殴るという暴挙を行った。……一応、ぐーじゃなくて平手で。

時間は少々遡る。

俺はその日、校庭で広たちと野球をしていたんだ。

少し前に鳴介が心臓発作で死に、あぎょうさんという妖怪だか神様だか分からない存在によって復活してからしばらく。死んだように静かだった教室に笑い声が戻り、俺はこの平和な時間をじ～んと噛みしめていたわけだ。

しかし、俺は忘れていた。あぎょうさんの後に、どんな恐ろしい妖怪が来るのかを。

地獄先生ぬ～べ～は、基本的に様々な短編を集めて一つの作品にするオムニバス形式のような漫画である。しかしちゃんと縦軸となる話の時系列もあるわけで、特にメインキャラクターに関わる話なんかいい例だろうな。そしてあぎょうさん回の後に来るのは、直前までのシリアスを吹き飛ばすある意味お約束というか……なんというか……。

いや、恐ろしい！　恐ろしい敵なんだ！　けど恐ろしいの意味がちょっと違うんだよ

！

「なんだ!?」

「空間に裂け目が……！」

「こ、これってまさか地獄の……!?」

そんなわけで、俺は突如校庭上空にバリバリと音を立てながら現れた空間の裂け目を見て驚く広と克也を尻目に無言で上着を脱ぐ。よかった、今日上着来てて。……そして空間が爆発し、周囲がパニックになる中俺はただ一人爆発の中心地へと走った。爆風にも負けず、精一杯の力で大地を踏みしめて走った。ビビりな俺が”妖怪”に向かって、走ったのだ。

それには譲れない理由があった。この展開を、この世界を知る俺が今しなければならないこと。

それは!!

「おい、お前たち、私のパンツを知らないか?」

「モラル!!」

「おわ!?」

下半身すっぽんぽんで現れた鬼娘の下半身をジャンプのモラルたる海賊マークさんの代わりに隠す事だよこの野郎!!　野郎じゃないけど!!

謎の空間……おそらく地獄と繋がっているであろうそこから現れたのは、見た目だけなら大変可愛らしい桃色の髪をツインテールにした角の生えた美少女だった。愛らしい顔立ちはもちろん、幼さを残す顔立ちとは裏腹になんともボリューミーなわがままボディの持ち主である。まさにボン！　キュ、ボン！　むっちむちだ。我がクラスで言えば、プロポーションで張り合えるのは美樹くらいだろう。

そして彼女は張りがありながらも柔らかそうな肌を惜しげもなくさらし、堂々たる仁王立ちをしていた。ただし、さっきも言ったがその下半身はすっぽんぽん。上半身は装備なのか体の一部なのか微妙に分かり辛いもので胸は隠してるからいいんだが……下品で申し訳ないがチラッと見た限り、下は大事な部分を覆い隠す毛も生えてないと言う……マジモンの丸見え状態。

わざとじゃねぇ！　わざと見たんじゃねぇ！　腰に上着を巻き付けるために目をそらすわけにはいかなかったんだ！　つーか俺は大人のお姉さん専門だし！　体がムチムチで中身がババァでも見た目ロリなら専門外だし！　そして俺は誰に言い訳してんだよチクショウ!!　それもこれも鬼娘、お前に羞恥心が無いからだよ!!　いくら鬼でも

隠せよ！　そこは隠せよ!!!
「な、なんだお前は！」
「いいから何も聞かず隠せ！　俺は今、童守小のモラルを背負って生きているんだ！」
もはや自分で何を言っているのかわからない。けど思春期真っ盛り、もしくは思春期にも至っていない稚い子供たちの前にお前のような猥褻物をそのままドンと置いておけるか！　校庭のド真ん中だぞ！　低学年の子だっているんだぞ！　エロ本デビューの前に実物見せてどうする！　とんだ大人の階段ホップステップジャンプだよ！　だから俺は何言ってんだよ!!
鬼娘はそんな俺をうさん臭そうに見ていたが、本来の目的を思い出したのか……俺を無視し、こちらを見ていた広と克也に声をかけた。
「はあ～？　何を言っているのだ。……まあいい。出鼻をくじかれたが、改めて問おう！　私は眠鬼！　地獄から来た誇り高き女戦士である！　亜空間を通って現世に出る時、すさまじいエネルギーの流れでパンツが脱げてしまってな……。お前たち、そのパンツを見なかったか？　探しているのだ」
「ぱ、ぱんつ……？」
「ちょ、おい待て。ってことは今あの子は樹季の上着の下はノーパン……!?」
「無駄なところで理解力高いな克也お前！　その前に鬼ってとこにつっこんどけよ！」

「いやつっこみてーけど、おま、あの体でノーパンだぞ!? 健全な男の子としてそこは反応するっつーの！ てかお前何だよあの素早さ！ そ、それに、い、樹季が何もしなければ俺たちは今頃、ご、御開帳を……！」

「ええい煩い！ 知っているのか知らんのか、早く答え……」

はらり

「「あ」」

「おっと」

苛立った鬼娘……眠鬼が広たちに詰め寄ると、その動きの勢いに結び方が緩かったらしい上着があっけなく落ちた。そして少年二人の目の前に晒される、下半身すっぽんぽん。

俺はそっと額を押さえた。広と克也が勢いよく鼻血を噴出し眠鬼の顔を鼻血まみれにし、その怒りで攻撃を受けそうになってもそのまま目を瞑った。そして何かがボンッと音を立てて、愛らしい声で「ぴぎゃっ」という間抜けな叫びが聞こえて頬っぺたに生暖かいものがぶっかかっても目を開けずにそのまましゃがみこんだ。なんか血生臭いが、今は絶対目を開けないぞ。開けたらわがままボディーの首から上がふっとんでる光景が広がってるんだろ。ヤダよそんなの見るの……。

「あ～あ……あ～あ……」

今、それしか言葉が出てこない。

……この鬼娘、眠鬼はちょっと前に俺達に絶望を味わわせてくれた絶鬼と、鳴介の左手に封印されている覇鬼の妹なんだよな。けど元のパワーは凄いのに、今はパンツを失ったせいでその力が制御できていないわけだ。だから妖力波なんて使おうとしたら暴発する。頃合いを見計らって目をあけたら復活してたけど、頬っぺたを触れば彼女から飛んできたであろう血液でぬるっとしていた。うぎゃう……いくら美少女の血とはいえ気持ち悪い……。

つーか、俺がせっかく上着貸してやったのにケツ丸出しで倒れよってからに。「ううう……」じゃねーよ。

俺は無言でケツ丸出しで倒れている美少女に、さっき落ちてしまった上着を拾ってかけてやった。

そしてそれを見た広が言う。

「ひょっとしてこいつ……。かなりおバカ？」

おう、その認識で間違ってないぞ。

その後、眠鬼のあまりにも間抜けな様子に毒気を抜かれた広と克也は、眠鬼の正体を知りつつ彼女のパンツを一緒に探してやると言い始めた。まあ実際絶鬼なんかに比べると根はいい子だったりするからな眠鬼……。鬼だけど。

そういや眠鬼の奴、広と克也と俺を「下僕一号二号三号」とか言いやがった。ちなみに俺三号。……パンツはいてないくせに調子乗りやがってからに。パンツはいてないくせに。

俺はこの眠鬼回ともいうべき内容を、一応ちゃんと覚えてる。なんたってぬ～べ～エロ回でも屈指の振りきれっぷりを見せてくれた回だからな。

具体的に言うと眠鬼下半身すっぽんぽんで登場に始まり、童守小の生徒教師がパンツ一丁からの全裸。最終的に広たちがパンツにされて、意識を保つために郷子達にはかれるという……。うん。ヤバいヤバいヤバい。控えめに行っても大げさに言ってもヤバいって。字面にしたらあらためてヤベー。パンツになってはかれるって何だよ。漫画で見た時はちょっとドキドキしつつ、大人になってからはこの漫画で幾人の子供たちが妙な性癖に目覚めたのかに思いを馳せつつ、でもなんか好きだったギャグとエロって偉

大やなって思ったエピソード。……でもそれ現実になったらヤバい。シャレにならん。つーか俺まで被害にあったらたまったもんじゃねーよ。誰かにはいてもらったとして、もうその子と顔あわせらんねーわ。いや、むしろしっかり向き合って責任取らなきゃいけないのか……!?　ああもう！　とにかくそんな事態にさせないのが一番だっつーの！

というわけで、俺は一緒に探してやるふりをしつつ……いや実際探すんだけど、とりあえず広たちとは別行動をとることにした。

さっさとパンツ回収して鳴介に渡して事情を話してあのハレンチ鬼娘を無力化しよう。そうしよう。

（え～と、たしかパンツは石川先生が拾ってはいてたんだよな）

……っておい。

思い出せたのは良いけど、おい。

拾った女もののパンツを即着用するって、よく考えなくても石川先生やべーじゃねーか！　ちょ、いい人なのは知ってるけど性癖もう少し抑えて小学校教諭!!　頼むから!!

い、いや、もういいや。とりあえずさっさとパンツ回収だ。何て言って返してもらえばいいか分からんから、さっと行ってぱっと強奪しよう。幸い眠鬼のパンツは紐パン。

石川先生の背後から近づき、ばっとズボンをおろしてさっとパンツを奪えばいいんだ。うん、ＯＫ。これで行こう。

俺は深く考えたら負けだと割り切ると、職員室へ向かった。俺の作戦により何人かが石川先生のパオーンを目撃してしまうかもしれないが、これから起きるであろうハレンチな惨劇を思えば安いものだ。拾ったパンツをはいてた石川先生だって悪いんだし、そこは因果応報ってことでひとつ。……まあ、俺も石川先生のケツ毛をおがまなきゃならんことになるのだが。

が、誤算が一つ。

あのハレンチ娘、我慢が足りねえぇぇぇ!!　思ったよりずっと早くパンツ一丁化フラッシュ（俺命名）使ってきやがったぁぁぁぁ!!!!

突如童守小の上空に光の球が浮かんだかと思えば、その途端その光を浴びた者の服がはじけ飛び、みんなパンツ一丁になったのだ。ちなみに俺も例外ではなく、服がはじけ飛んだ。

「樹季お前、服の下に般若心経を!?」

「まさかのタイミングでばれたよチクショウ!!」

そして廊下でばったり遭遇した、何故か鼻血ダラダラで頬っぺたを腫らした鳴介に俺のお経アーマーがばれる事態に。護身のために体育の日以外体にお経書いてたのバレた！　恥ずかしい！　思わず女子みたいに内股になって両手で胸おさえちゃっただろ!!　つーかパンツフラッシュ強ぇな！　俺のお経アーマーの効果もあっさり突破しやがったチクショウ！

……それにしても、鳴介の奴どうせ律子先生あたりのボインを真正面から見たんだろうな、そして殴られたんだろうな羨ましい。俺にも大人のお姉さま限定のエロイベントもっと来いよ。殴られてもいいから。俺はロリコンじゃねーんだよ。

……って、今はそんな場合じゃない！

「鳴介！　これは鬼の仕業だ！」

「なんだって!?　やはりさっき感じた妖気は鬼……いや待てなんで鬼の妖気でパンツ一丁に……」

「鬼は無くしたパンツを探してる！　そいつ、パンツが無いと力を制御できないんだ！　今ならたいして強くない！　俺はそのパンツの場所にあてがあるから、パンツを確保してくる！　鳴介はその鬼にこれ以上好き勝手させないようにしてくれ！」

「！　わかった！　……任せていいんだな？」

「ああ！」

「よし、任せたぞ！」
短く情報交換を行うと、互いに踵を返して別々の方向に走り始める。俺は石川先生を探しに、鳴介はおそらく妖気を頼りに眠鬼を目指して。
へへっ、なんかこうしてると俺達、戦友みたいだな。赴く戦地が男の股間と痴女というのがなんとも言えんが。
（何してんだろ、俺……）
考えてたら空しくなってきた。いや、でも急がねば！　じゃないとパンツを探して眠鬼が……。
「むっ！　お前が鵺野鳴介だな⁉　私は眠鬼！　お前に倒された二人の兄……覇鬼と絶鬼の妹だ！」
と思ったら背後で早速遭遇してるーーーーーー!!　いや、でも構うまい！　俺は走るぞ！
俺は鳴介と眠鬼の遭遇にも足を止めず、「廊下を走るな」のポスターなど無視してひた走った。そして運がいい事に、正面から石川先生が歩いてきたのだ！　眠鬼のパンツをはいた石川先生が！　ああチクショウ！　やっぱり視界の暴力だったよ！　毛むくじゃらのでっぷりした体型の髭もじゃ眼鏡の石川先生が女ものの紐パンはいてるのとかどう見ても犯罪でしかないよチクショウ!!

俺は無言ですれ違いざまにパンツを奪い取った。「ああ、わしのパンツ！」と聞こえたけど諦めろ。俺だって本当は中年男からパンツはぎとるなんてしたくないんだから!!

ううう、言ってて悲しくなってきた。なんで俺がこんなこと……。で、でもとりあえずミッションコンプリートだぜ！　俺はやった。よくやった！

ちなみにボロンとこぼれた石川先生のパオーンに関しては俺の管轄外だ。各自脳内で海賊マークを貼ってくれ。

「よ、よし！　あとはこれを鳴介に渡せばとりあえず……」

パンツにモシャス事件は、とりあえず鳴介が眠鬼にパンツをとられなければ問題無いし今は保留！　俺はすぐに方向転換し、眠鬼と対峙しているであろう鳴介の元へ戻ろうとした。……が、それは肌色の壁によって阻まれる。

「キャァァーーーー！　何よこれ～！」

「いやああー！」

「あ～ん！　見ないでー！」

おれの　まえ　に　クラスメイト女子　の　ハダカが　あらわれ　た

（ど、どうしよう……）

この壁の向こうには鳴介が居るってのに、まさかこの肌色の海に割って入るわけにもいかずたたらを踏んでしまった俺。そして目ざとく俺に気づいた美樹の奴が声を上げ

る。
「きゃ！　ちょっとあんた樹季！　何見てんのよ！　ってゆーかその握ってるパンツ誰のよ変態！」
「いやお前にだけは変態って言われたくねーよ！　前に自ら裸ランドセルとかやってた痴女のくせに！」
「うっさいわね！　その時はその時、今は今よ！」
「い、樹季くん!?　やだ、恥ずかしい見ないで！」
「そ、そうだそうだ！　……いやでもその前にお前何その気持ち悪いの!?　お経!?」
「ほ、ホントだわ！　あんなにびっちりと……！」
「う、うううううう煩いわ！　ファッションだよファッション！」
「いや、それは無いわー」
「樹季、怖がりなのは知ってるけどそれは流石に……」
「う、うあ……これは、これはだから……！」
「あら、でも字は綺麗ね」
「い、樹季のくせに生意気な……！　この超絶ダイナマイトでびゅーてぃほーな美少女美樹ちゃんより裸で目立つなんて……！」
「お前は恥ずかしがるのか張り合いたがるのかどっちだよ！　オイヤメロ手をどけるな

見えるから!!　見えちゃうから!!」
何故だ。羞恥にもだえる女子たちから急に羞恥プレイを押し付けられ初めた。何この逆レイプ感。こっち見んな。
「！　あれは私のパンツ！」
あーもう、眠鬼にはバレるしよー!!!!　お前らが騒ぐからだぞ！
「樹季、それか!?」
「あ、ああ！」
鳴介の問いに答えたはいいが、俺が鳴介にこのパンツを人質ならぬパンツ質に渡す前に眠鬼の奴が完全に俺をロックオンしてやがる。やっべ。
「返せ！」
「やだよ！」
「変態！」
「誤解だ！」
眠鬼には追われ始めるわ、パンツを握り締めて返すの嫌だと言ったもんだから女子からは変態と言われるわ……最悪だ！
とにかくパンツを眠鬼にとられたらヤバい。そう思って、俺はとにかく逃げ始めた。それによって俺からパンツを奪い返すべく眠鬼が「パンツ瞬間移動」なる技を使い始め

たからさあ大変。……老若男女入り乱れた裸祭りの開幕である。これは酷い。

そして俺はしばらく逃げるのと現実逃避を繰り返したのだが、ふと思い至った。「あれ、そういえばこいつ今パンツはいてないし普通の女の子と同じくらいの力しか出せないんじゃね？」と。

普通の女の子という範囲が、某探偵のヒロインである全国大会でも名を馳せ弾丸すら避けて見せる格闘家系女子高生まで含むなら俺の死亡は確定だが、そうでないなら勝機はある。

そして話は冒頭へ。

俺は現実逃避をやめ、ハレンチ娘をビンタで迎え撃った。

その後、無力化された眠鬼は鳴介がぬ～べ～クラスで引き取るということになった。

鬼の妖気を感じて来てくれたゆきめさんと玉藻が反対したが、鳴介的には人間の間で暮らしていけば人間の心を手にいれられる……と信じているようだ。ま、目の前の二人自体そのパターンなわけだからな。言いたいことは分かる。

でも。

「予備のパンツにしてやる……」

背後の席から時折聞こえる、むすっとした声が怖いです。眠鬼の目的は鳴介に対する兄たちの敵討ちではなく、強力な霊能力者である鳴介をパンツにすることなのだが、何か俺まで狙われてるっぽい。

あれ、俺もしかして恨まれてる……？　いやでもさ、悪いことしたのお前じゃん。俺だって怒るよ！　あのビンタは教育的指導だから!!　……まあ、俺からも眠鬼に恨みが無いとは言えないけど。だってお前のせいで体育の無い日にお経を書き込んで登校してるのがばれたから、しばらくあだなが「耳なし芳一耳あるバージョンの樹季」略して「ほういち」にされたんだぞ俺！　誰だよこのセンスのないあだな考えたの！　いろいろ略しすぎて俺タダの芳一になっちまってるじゃねーか！

が、そんなのまだまだ甘い方だった。俺は数日後に彼女の有言実行によって更なる地獄を味わうことになる。

「ああ！　樹季がパンツに！」
「眠鬼がパンツをはいた！」
「フハハハハー！　パンツを取り戻せないなら、パンツを作ればいい！　まったく、簡単な事だったのになぜ気づかなかったのか！　フルパワーまで出せんが、こいつのはき心地もなかなかだぞ！　未熟ではあるが、いい潜在能力を秘めている！　予備のパンツとしては合格点だ！」
「まさか樹季がパンツにされるなんて！」
「で、でもちょっと羨ましいような……」
「あれ感触とかあんのかな……。なんかまだあいつ、意識あるっぽいし……」
「ほほう！　なら喜びなさい！　あんたたちもパンツにしてあげる！」
「え!?」

鳴介に眠鬼のパンツを厳重に保管してもらったにも関わらず、地獄先生ぬ～べ～屈指のハレンチイベントはきっちり起きました。俺が眠鬼にパンツにされたせいで。

ぬ～べ～クラス男子もみんなパンツになったよ！　はは！　俺だけじゃない！　俺だけがあんな辱めを受けたわけじゃない！　はは！　そうだ俺たちは仲間さ！

……。

ナメクジになりたい。

鳴介の奮闘があって後でなんとかもとの姿には戻れたものの、後頭部に残る生々しい感覚はなかなか消えなかった。これが大人のお姉さん相手ならラッキースケベなご褒美なのだが、中身はともかく見た目が完全にロリな眠鬼では俺的にはアウトである。俺の方が被害者なのに罪悪感しかわかねーよ……。

そして眠鬼なのだが、結局今もぬ～べ～クラスにいる。

クラスのみんなでカンパして彼女に「鬼のパンツのかわりに」ってたくさんのパンツをプレゼントしてからは、以前よりもっと馴染んだようだ。本人戸惑ってるっぽいけど、パンツ事件の前も何だかんだでクラスのみんなと仲良くやれてたからな。

……こう考えると、眠鬼が鬼の中でもいい子だってことを差し引いてもやっぱりぬ～べ～クラスの適応能力スゲーな。

ちなみに俺だが、放課後霊能力の訓練に鳴介の家に行く事が多いため、そこに住むことになった眠鬼と距離を置くと言うのはなかなか難しい。だから気まずいながら、少しずつ歩み寄ってはいる。

けど。

「樹季。あなた、なかなかのはき心地だったわよ。才能はあるんだから、頑張んなさいよね！」

霊能力の修業に苦労する俺を「いい穿き心地だった」を褒め言葉に応援するのはヤメロよ!!

ああ、憂鬱だ。

番外編

番外編：枕返し先輩プロデュース平行世界旅行ｉｎハリー・ポッター

俺、藤原樹季。死神の手違いで死んだ上に、詫びのつもりなのか若くして死ぬはずだった平行世界の自分に突っ込まれた哀れな２５歳独身男性☆　けして☆とかつけて自己紹介していい歳ではないが、今はそんな茶目っ気でも起こさないとやってらんねぇ状況に陥っている。

一言で言うと、枕返しの奴にしてやられた。ぶっちゃけ新しいパラレルワールドに放り込まれた。平たく言って枕返しを殺したい。

あ、あの野郎……！　ただでさえ平行世界に転生？　っていう奇妙な状況になっている俺にこれ以上過酷な運命を背負わせようっていうのかよ！　旅行でうっかり般若心経壁紙の無い部屋で寝た結果がこれだよちくしょうめが!!　やっぱり魔除けは必須

だったんだ。旅行に浮かれてた少し前の自分をシバキ倒したい。
しかし現状に気づいたのは情けなくも枕返しにやられてからしばらく経ってからである。気づいたのは、夏の終わりに俺に一通の手紙が来たとき……その内容とは「ホグワーツ魔法魔術学校入学許可証」。

ハリー・ポッターかよッッっ!!!!

全身全霊で突っ込んだわ!!　そのノリで手紙破り捨てたわ!!　でもって案の定追加手紙攻撃食らって窒息しかけたわ!!　馬鹿か！　馬鹿かあの量！　いくらしばらく現実を認めたくなくて破り捨てていたからって、なにも部屋を埋め尽くす量を送ってくんなよ！　資源を大事にしろよ馬鹿!!
うっすらおかしいとは思っていたんだ。俺の髪の毛はもともと茶色っぽいけど前より薄い色素になっていたし、瞳の色はいつの間にかブルーになっていた。本当なら日本の田舎にいるはずの母方のばーちゃんがイギリスから手紙よこすわ、それに「お前のことはちゃんとこっちの学校に入れるように校長先生に頼んでおくからね。ばあちゃん

と一緒の学校で学んでほしいから、英語をしっかり勉強しておくんだよ」と書いてあるわ……しかも実際に今まで壊滅的だったはずの英語がペラペラ喋れるようになっているし……！　母さんに聞けば「え、おばあちゃんは生粋のイギリス人じゃない。私はハーフで、あなたはクォーターよ」とか言うし……。

……。

うん、おかしいと思ったけど見ないふりしてました、はい。絶対ろくなことじゃないと思って触れないようにしていました。そのツケがこれだよクソが。だって平行世界に生まれ変わってからの俺の周りの状況はほとんど変わってなかったから、見分けつかなかったんだよ最初!!　住んでる場所は童守町だし、相変わらずぬ～べ～クラスだし妖怪は居るし!!　ただ、そこにちょっとプラスされていたのだ。魔法界というどデカいおまけが。

とにかく、うちのばーちゃんがイギリス人の魔女になってた。でもって、それ経由で俺にもホグワーツの入学許可証が来たっぽい。

この世界の鳴介に事情を話して相談したら「もしかしたら、妖怪枕返しの仕業かもしれんな」とのこと。ああ、そういや居たなそんな奴！　って言われてから思い出したん

だよな。たしか原作じゃ郷子が被害にあってて、平行世界の鳴介に助けてもらって事なきを得たはず。しかしいくら俺の周囲を探しても枕返しは見つからず、困り顔の鳴介に「もう逃げられてしまったようだな。元凶のそいつを見つけない限りは俺にはどうしようも出来ない……すまん」と言われた。マジか。

そして俺に入学許可証が来たことを知った鳴介は、なんとか枕返しは見つけるからこの世界の俺の今後のためにもホグワーツに行ってちゃんと魔法の使い方を学んだ方がいいと俺を諭した。……この世界の俺、霊力に加えて魔力もあるのかよ。マジかよ。霊力だけでも持て余してるのにいらねぇーよそんなお得セット。なんでばあちゃん魔女になってるんだよ。美味しい野菜を作ってくれる純日本人なばーちゃんが懐かしいよ。

そういえば何故霊能力者とはいえ非魔法族の鳴介がホグワーツのことを知っていたかと聞けば、まみ先生経由で知ったらしい。え、まみ先生いつのまにホグワーツの卒業生になってるの？　たしか前はドイツの大学に留学して、魔法は自分で魔法書の類を集めて独学で身に着けたって言ってたよね？　何、レイブンクロー？　ちょっと待ってよ、まみ先生ってちょっとお茶目な呪いを連発するなんちゃって魔女だったじゃん。何でガチの魔女になってるの。そしてガチの魔女ならなんで日本で普通に教師やってるの。もうわけがわからないよ!!

混乱した俺だったが、気づけば別れを惜しむぬ～べ～クラスのみんなに見送られてイギリスの地に降り立っていた。赤い汽車に乗っていた。立派な古城を見上げていた。ワッツ？

もう、枕返しの件は鳴介に任せて俺はこの世界の俺に戻った時俺が苦労しないように（ややこしい！）魔法を学ぶしかないと腹をくくった。俺も男だ。ぐずぐず言ってても仕方がないし、逆にファンタジーな世界を楽しむチャンスだと思うことにしよう。それによく考えたら怖い妖怪いっぱいの童守町を離れられるんだもんな！

ハリー・ポッターはあれだけブームになってたからちょっと読んだことはあるけど、昔過ぎる上に上下巻仕様になってから面倒くさくて原作読んでないし、テレビで映画がやってたら見る程度の超にわかだが心配ないだろう。要は主人公が悪の帝王を倒すまでの物語だろ？　タイトルが主人公の名前だし、そんなでっかい目印背負った少年に関わりさえしなければ、きっと魔法世界の方が平和なはずだ！　この世界の「藤原樹季」が居る限りいずれ枕返しを見つけたら彼にこの場所を返さなければならないが、それまでちょっとくらい平穏を謳歌しても許されるはずだ。うん、その分彼が戻ってきた時困らないように勉強だけはちゃんとしておこう。

そして始まった俺のホグワーツ生活だが、魔法界のぶっとんだ常識に驚くほかは酷く平和だった。

なんせ俺ってばハッフルパフだからな！　平凡だなんだと貶されることも多いが、この寮の生徒は温和でいさかいも少ない。グリフィンドールとスリザリンがバチバチやってようがノータッチだぜ！　先輩も優しくて面倒見いいし、同級生は東洋出身の俺に親切に色々教えてくれるし……最高だぜハッフルパフ！　寮のシンボルマークがアナグマなところも気に入った。だって豆太郎に似てるからな！　黄色だって好きだぜ！　あ、ちなみに豆太郎だがタヌキだけど特例でペットとして連れ込むことを許可してもらった。俺が「遠い故郷を離れて心細いのに親友のようなペットとも離されたら死んじゃう」感じのかよわい少年を演じて全力でねだったからな！　ちなみにねだった相手はばーちゃんだ！　どうやらばーちゃん、ホグワーツには結構な額の寄付をしている上にダンブルドア校長とも知り合いらしく、俺のお願いをごり押ししてくれたようだ。持つべきものは権力のある身内だぜ！　ばーちゃん最高！　手のひら返しとでもなんとでも言うがいい！　俺のばーちゃんは最強なんだ！

まあそんなわけで俺は結構この世界を満喫していた。ハロウィンの日にトロールがどうのという騒ぎがあったけど、俺は普通に先輩に誘導されて寮に戻ってたしな。正直

原作の記憶がケサランパサランよりも軽くふわっとしか残ってないから今何が起きてるかもほぼ分かってないぜ！　だけどそのお陰で心穏やかに過ごせているのだと思えば悪くない。ふふ……平和だ。

しかし、ある日を境に状況は一変する。

「あなた、ここで何してるの？」

「えっ」

ある日の真夜中、俺は豆太郎が友達になったらしい魔法生物に会いに校則で来ることを禁止されている4階の禁じられた部屋に来ていた。

最初こそ相手が三つ首の巨大な犬であることに全力でビビったが、どうやら豆太郎はかなり友好を深めていたらしく付き添いで来た俺にそいつが凄むことは無かった。友達を紹介できたことに豆太郎がはしゃいで、それがあんまりにも可愛かったからそれからも何回か一緒に会いに来ていたのだ。

この世界に来る前に習得した陽身の術（しかも魔力を得たおかげか妙に精度が上がっ

た）を使用しているため俺の本体は部屋で眠っているから同じ部屋の奴らにはばれないし、行き先が誰も来ない部屋という事もあって今まで誰にも知られずに済んだんだけど……どうやら今日は違ったらしい。

くるくるしたボリュームのある茶色い髪の女の子に、赤毛にそばかすが特徴の男の子。そして眼鏡をかけた黒髪の少年を見て、俺はようやく「ああ、そういえばこの犬って重要アイテムを守る番犬だったっけ」と思い出した。原作ににかすりもしなかったから今まですっかり忘れてたぜ……。ちょっと学校生活にうかれすぎてた。おいおいおい、もしかしなくても今って現在進行形で原作一巻のクライマックスじゃねーか!!　その場面に遭遇してから思い出すなよ俺！

そういや俺が来る前まで何故か魔法のハープが鳴ってて三つ首犬が眠ってたけど、あれか。犬が守る扉の先に中ボスがアイテム取りに向かったあとだったってわけか。

俺は彼ら3人を襲わないよう仰向けになってじゃれ付く三つ首犬を撫で繰り回しつつ、なんとか言い訳して寮に戻ろうとした。が、紅一点である女の子が無駄に潔く「もう面倒よ！　時間が無いし、あなたも来なさい！」と俺を巻き込んだためその計画は水泡に帰したのである。憐れそうに俺を見ていた少年二人が印象的だった。

……陽身の術を解いて消えてもよかったんだけど、そうすると後で言い訳が面倒くさいしな。

でもって仕方がなく一緒に行くこと相成ったわけだが、そんな俺たちの前に次々と立ちふさがるアイテムを守る罠……。まず悪魔の蔦を茶髪の少女ハーマイオニーの呪文で退け、羽の生えた鍵が無数に飛び回る部屋では1年生にしてクィディッチでシーカーを務める眼鏡男子ハリーが抜群の機動力で本物の鍵を手に入れた。続いて巨大なチェス盤が用意された部屋では、赤毛のロンが素晴らしい手腕で魔法のチェスで勝利を掴んだ。その途中で彼は気を失ってしまったが、自身の危険を顧みず友に後をゆだねた勇敢な姿には感服した。

ぶっちゃけ俺、何もしてない。

ははは……。ぬ～べ～クラスの奴らといいこの子たちといい、子供とは思えないくらい勇敢だな。……うん、正直すまん。成り行きで巻き込まれただけとはいえ、何も出来ない情けない中身大人で申し訳ない。状況についていけないでぼけっとしたら、何か全部終わってた。

ま、まあ下手に邪魔してもあれだし、俺はこのまま最後まで背景としての役割を貫き通そう。

そして訪れる次の部屋の試練。どうやら魔法薬の問題らしく、これも俺が何かするまでもなく優秀なハーマイオニーがぱぱっと問題を解いてしまった。この子すげぇな！

っていうか、むしろ試練の方が問題なのか？　いくら優秀でも1年生の女の子が解け

てしまう問題って防犯上ただの紙装備なんじゃ……いや、よそう。これは多分突っ込んじゃいけない問題だ。きっとこれは凄い難関で、それを乗り越えた3人が凄いんだ。さっすが主人公とその仲間だぜ！

で、何で俺は主人公の仲間2人が居ないのに主人公の隣に立って中ボス（仮）と対峙してるんだ？

な、なんか躓いた拍子に薬が無いと通れないはずの道を通れちゃったんだよな。通る途中でやたらバチバチ抵抗あったけど、何だかんだで通れちゃったんだよな。あれか？　霊力絡みの不思議パワーか？　いっらねぇよそんなモン！　俺的にはすっかりハーマイオニーと一緒に前の部屋に残るもんだと思ってたよ！　だって薬は1人分しか無いっていうから！　不思議ミラクルもそうだがうっかり躓いたドジっ子な自分が憎い!!

で、件の中ボスだが顔見知りだった。

チッスチーッス。呼ぶたびに舌噛みそうになる名前のクィレル先生じゃないっスかー。え、何だ眼鏡。スネイプ先生だと思ってたのに違った？　どっちでもいいわい！　どっちにしろ学校の教員が盗人とか駄目だろ。もっと人材管理しっかりしとけよホグワーツ!!

もう破れかぶれで突っ込むことに全力だった俺だが、そんな俺は無視されて（別に悲しくなんかない）２人は賢者の石がどーのこーのと言い争ってる。というか、聞くところによるとクィレル先生はこの部屋にたどり着いたものの、目的の物を手に入れるにはハリーの協力が必要だとか言ってるんだよな？　なにその矛盾。ハリーがわざわざ来なければ普通にこの人失敗してたんとちゃうか。もうわけ分からん。誰か俺にハリー・ポッターシリーズ全巻をプレゼントしてくれ。流行っていた当時映画からハリー・ポッターデビューした友達が「映画はしょりすぎ。原作読まないとわけわからん」って言っていたのを思い出すが、現在事件を目の当たりにしてる俺でもよく分からないよ。

もはやハリーとクィレル先生両方から空気として扱われていた俺は、豆太郎の毛づくろいをしながら隅っこでぼけーっと様子を見ていた。そしてクィレル先生の頭部から気色悪いおっさんの人面瘡が出現してからようやくはっと我に返って立ち上がった。なんてこった、クィレル先生は人面瘡に乗っ取られた被害者だったのか！

後々思い返せば、俺は無視されてることをいいことに途中から会話の内容をよく聞いていなかったんだと思う。だってまさかあの鳴介に取り付いてた人面瘡より（見た目的に）しょぼい感じの奴がラスボスだって思わないだろ!?　俺は悪くねぇ！

原作の内容をよく覚えていない俺は、この事件を「西洋版人面瘡（多分敵の手先）を倒してハッピーエンド」なんだと思い込んだ。だからハリーに手を掴まれて苦しみだしたクィレル先生を見て、最後くらいちょっと役に立とうと余計なことを思い立ったのだ。どもりすぎて聞き取りにくいが、丁寧な授業をする先生だったからな……何で手を掴まれたくらいで苦しんでるか知らんが、敵もろとも倒されて犠牲になるＥＮＤじゃ可哀想だろう。ハリーとしても後味悪いだろうし。

「よし、ハリー！　そのまま押さえとけ！」

「！　フジワラ!?　」

よーし気にしないぞ！　「そういえば居たっけ」みたいな顔で見られたけどお兄さん

心広いから気にしないぞ！　っていうか、何でダメージ与えてるお前まで苦しそうなの？

とりあえず余裕かましてる時間は無いと、俺が覚えているカス性能な霊能力の中でも唯一攻撃に転用できる能力を発揮すべく懐からさっとあるものを取り出した。2人は杖だと思ったろうが、残念違う。1年生レベルで、どっちかっていうと霊能力との兼ね合いが難しくて魔法の実技が苦手な俺が魔法でこの状況どうこうできるわけないだろいい加減にしろ！　と、逆切れはほどほどにして、俺は取り出した物……日本から持参した筆ペンで自分の手のひらに念を込めながら般若心経を書き込んだ。普段から魔除けのために出来るだけ体にお経を書き込んでいる俺だが、これには霊を退ける他にちょっとした副次効果がある。……霊を退ける反発力を利用して、疑似的に霊に触れるようになるのだ。触れるっていうか、正確には弾き飛ばす感じなんだが。

たいてい俺が恐れる妖怪の類には効かないし、主に浮遊霊を追い払う程度の力しかないけどあのしょぼそうな人面瘡相手ならいけるだろ。聖書の方がいいかなとふと思ったが、聖書の内容とか暗記してないし鳴介によればこれはお経そのものの効果よりも、俺が自分の霊力を文字として現した結果らしいから洋風オバケにも効果があるはずだ。

俺は気合を込めるために、叫びながら拳を振るった。

「お経パンチ！」
「ふご!?」
　おっとクィレル先生、キンタマ狙ったのは勘弁な！　でないとか弱い小学生の俺じゃあいくら軟弱そうとはいえ大人の男にダメージ加えるとか無理だから！
　宿主がダメージをくらったのと同時に、取り付いていた人面瘡は魂状になって飛び出した。よし、計算通り……！　鳴介、お前ほどじゃないけど俺も霊能力を生かして人一人救えたぜ！　今度手紙に書くから褒めてくれよな！
『貴様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!』
　しかし人面瘡はしぶとかった。なんかすごい形相で俺に突進してきたから、思わず茶羽の悪魔に遭遇した時の要領で靴（これにもお経が書いてある）を脱いでそれで思いっきり引っ叩いた。でもってそれはハリーに向かって飛んでいく。
　まずい！　今度はハリーに取り付くつもりか!?　いや……、たしかハリーには謎のハンドパワーがあったはず！
「ハリー！　潰せ！」
「え!?　あ、うん！」
　俺の言葉にとっさに体が動いたのか、ハリーが飛んでくる人面瘡を寸での所で両手で

パンっと挟んで潰した。一瞬ハリーの体を包むように慈愛に満ちた気を感じたけど、あれがハンドパワーの正体か？　よく分からないが、守護霊に近いものを感じる。

『ぐあああああああ!?』

人面瘡は断末魔をあげると、あっけなく弾けとんだ。……よくよく見れば弱弱しい魂が外へ逃げていくのが見えたので、おそらく倒すには至らなかったのだろう。しかし俺たちはなんとかアイテムを守り抜き、一人の教員を助けたのだ。魔法学校1年生にしては上出来だろう。……まあ、一人は主人公だから俺はおまけみたいなもんだけど。

その後俺たちは駆けつけた校長に事情を説明し、それぞれ寮に帰って疲れ果てた体をゆっくりと癒した。

しかし俺は後日聞いた人面瘡の正体に卒倒する羽目になる。

あの人面瘡が名前を言ってはいけないあの人と称される闇の魔法使いヴォルデモート？　奴はいつでも復活の機会を狙っている？　ヤダー、ラスボスじゃないですかヤダー……あれ、俺ってそんな奴相手に何したっけ。ああ、お経パンチなんていうふ

ざけた名前の技でお家から追い出した上にゴキブリのごとく引っ叩きましたね。ええ、そうでした。

「あべしっ」

俺はそう一言言い残し、白目をむいて気絶した。

どうやら俺の憂鬱な日々は、魔法の世界に来ても続くらしい。

番外編：枕返し先輩プロデュース平行世界旅行ｉｎハリー・ポッター2

気づけばうっかりホグワーツ2年生になっていた。

俺は未だに元の世界へ戻れずにいる。手紙で鳴介と連絡はとりあっているが、枕返しの奴は色んな次元を行き来しているため探すのが非常に難しいとのこと。しかも俺が知る地獄先生ぬ～べ～の物語は俺が居ない間に終わってしまったらしく、鳴介は九州へ転勤する事になったと聞いた。

鳴介は自分も場所は違えど引き続き枕返しを探すと言ってくれたし、童守町ではなんと玉藻先生が奴を探すことを引き受けてくれたというから驚きだ。……イギリスに暮らす今、夏休みで日本に帰った時くらいしか俺が自分であいつを探すことは出来ないし、申し訳ないが彼らに頼ろう。もし帰れる時が来たらちゃんとお礼出来るように今から何か考えとかないとな。帰れるか分からんが。

まあそんなわけで俺は当分、もしかしたら一生前の世界へは帰れないのかもしれない。

そうなると向こうにはこっちの世界の俺の意識が入ってるのか？　鳴介に聞いたと

ころこの世界の俺は転生した後の俺とまったく同じシチュエーションで新しい人生を送っていたらしく（なんと別世界の２５歳の俺が中身ってとこまで同じだった）、実は生活してててほぼ違和感が無かった。

魔法の世界があるか無いか、本当にそれだけの違いなのだ。

だから最近はもし帰れなくても、俺とこの世界の俺はお互いそんなに支障は無いのかもしれないと思っている。

いや、ラスボスに喧嘩売った時点で俺の方は支障ありまくりだけどな！　自業自得だけど!!

それについては考え始めると頭と腹が痛くなるので、とりあえず霊能力の修行は自力で進めようという事だけは心に誓った。今度例の人面瘡が現れたらあとくされなく徹底的に成仏させてやろうと思う。

そういえば夏休み日本に帰った時、久しぶりに広たちと会った。１年しか経っていないのにずいぶん大人びたというか、成長したように感じられて「ああ、俺の知るぬ～べ～の物語は本当に終わったんだな」と思った。きっと色々な出来事が彼らを成長させた

のだろう。途中から怖い思いをしなくて済んだのは嬉しかったが、クラスのみんなは好きだったからちょっと寂しく思ったのは内緒だ。

そうそう、鳴介には遅ればせながらゆきめさんとの結婚祝いを送った。場所は遠く離れてしまったが、枕返しの件で世話になる以外でも普通にこれからも友人でいたいものだ。あんなにいい奴なかなか居ないからな。俺が二十歳を過ぎたら、一緒に酒も飲みたい。……ちびっこい体にも慣れたけど、早く大人になりたいぜ。

そして夏休みを終えた俺は、現在ダイアゴン横町に新学期の買い物に来ている。

本当ならばーちゃんが一緒に買い物に来てくれるはずだったのだが、腰を痛めたらしく辛そうだったから一人で来た。ばーちゃんは心配そうだったが、俺も中身だけとはいえ大人だ。豆太郎も一緒だし、特に問題は無い。

途中教科書を買うために寄った書店でギルデロイ・ロックハートという人のサイン会が開かれており、何故かハリーが一緒に写真を撮られていた。すげぇなあのギルデロイって人。ハリーすっげぇ嫌そうな顔してるのに全然気にしてない所か有難迷惑以外の何ものでも無さそうな自分の書籍全巻プレゼントとか平然と行ったぞ。ちょっと羨

ましいくらいの無神経さだ。

あれくらい無神経で自信満々だったら、きっと人生楽しいんだろうな……。まあ見習おうとは思わないが。

「よ、ハリー。重そうだな。大丈夫か？」

「あ、フジワラ。はは……重いよ。どうしようコレ「ハリー！　その本を貸して！　サインをもらってきてあげるわ！」……大丈夫になったみたい」

「お、おう」

重そうだった本は、ハリーの隣に居た赤毛のおばさんが奪うように持ち去ってサインの列に並んだ。……サインもらってきてあげるって言ってたけど、あのままあげちゃえばいいんじゃないかな。ハリーもそう思ったのか、近くに居た赤毛の女の子（多分おばさんの子供）に「あれは夏休みお世話になったお礼に差し上げますって言っておいて」と言づけていた。需要のある場所に供給する。うむ、間違っていないぞハリー。

しかし直後に一緒に居たハーマイオニーに「あらハリー！　なんてもったいないことするの!?　しかもあれ、教材に指定されてる本よ」と言われて愕然としていた。俺も愕然とした。急いで買い出しリストを見たらたしかに載っている……マジか。おい、ギルデロイ著作物だけで他の教科書の合計と同じくらいの冊数あるんだが。ちょ、この教材許可した奴誰だよ！

……まあ、落書き対象としては優秀すぎるくらい優秀そうだけど。多分俺の教科書の彼は年末には愉快な髭と眉毛と厚化粧で彩られていることだろう。おっと、鼻毛も忘れちゃいけないな。鼻毛真拳使いに生まれ変わらせてやろうじゃないか。タイトルもギギギーギ・ギーギギに書き直しておこう。魔法界の写真は動くから、落書きも描いたら動くのかな？　だとしたらちょっと楽しみかもしれない。

俺はそこまで考えてからとりあえず見なかったことにして、賢者の石の件でちょっと話すくらいの間柄になったハリーと世間話に興じることにした。

「夏休み元気してたか？　……あ、あと俺の事は樹季でいいよ。俺もハリーって呼んでるし」

「そう？　わかった。う～ん、後半は楽しかったよ。ロンの家に遊びに行ってたんだ！　イツキは？」

「俺はほとんど日本の実家に帰ってたかな。一昨日イギリスに戻って、ばーちゃんの家で野菜とか薬草の手入れ手伝ってた」

そんなたわいもない話をしていると、青白い顔をしたプラチナブロンドのぼっちゃんことドラコ・マルフォイがハリーに絡んできた。でもってその親父さんも絡んできた。そしてロンのお父さんと仲が悪いらしく、険悪な雰囲気になったと思ったら大の大人が取っ組み合いの喧嘩を始めた。おい馬鹿ヤメろ店ん中だぞ。子供も近くに居るのに肘

とか当たって怪我したらどーすんだ。
見過ごすわけにもいかず、俺は喧嘩両成敗ってことで２名にそれぞれキンテキを食らわせた。子供になってからは身長も低いし力も弱いから、積極的に急所を狙っていくことにしている。じゃないと勝てねーんだよ。
２人は震えながら蹲って恨めしそうな顔で俺を見てきたが（痛くて声は出ないらしい）、俺は親指でくいっと外を示して「外でやれ」とだけ言っておいた。ついでにロンとぼっちゃんには「ああいうの、反面教師っていうんだ。いくらお父さん好きでもああいうところは見習っちゃいけないぞ」と注意しておく。ロンには微妙な顔をされてぼっちゃんには睨まれ嫌味を言われたが、すっと親父連中のゴールデンボールを蹴り上げた足を持ち上げると目をそらされた。うむ、マグルだろうが魔法使い族だろうが男の弱点は皆共通だということだな。
ちなみに女子には「やり方が下品」と不評だったが、ハリーは体を震わせ笑いをこらえていた。

でもって無事教材も買い終わり、赤い汽車にのって再び来ましたホグワーツ。そして

始まるハッフルパフでの2年目生活。……どうでもいいが、ハッフルパフって真ん中のフをスにかえてパフを二倍にすればハッスルパフパフというハッスルダンスとパフパフを合わせたドラクエに出てきそうな技っぽい名前になるなぁと、汽車の中で暇だったからぼんやり考えてた。ハッスルパフパフ……うん、ありだな。おっと、だけどネタが通じるとは思わないし通じたら通じたで寮生に袋叩きにされそうだからそっと胸の奥底にしまっておこう。そしてヘルガ・ハッフルパフ先輩すみませんでした。

例のギルデロイ・ロックハート氏が新任教師として赴任してきた時は授業内容にざわついたなぁ。なんだよ教科担任自身に関するテストって。おもいっきりネタ解答しといたわ。そしたら「不正解だが、詩的な解答なのでハッフルパフに3点さしあげましょう！」とか言われて吹いたわ。……クラスメイト達の視線が痛かった。

いや、あの人授業じゃなくてファンイベントの会場だと思ったりパフォーマンスを見物していると思えばそれなりに面白いんだけどさ……。闇の魔術に対する防衛術って、かなり重要な内容の授業じゃん？　魔法が苦手な俺でも頑張って覚えようとしてたわけよ。今思うと、豚箱送りになっちゃったけどクィレル先生の授業ってやっぱり丁寧だったよな……。

とりあえずこのままじゃいかんと、闇の魔術に詳しいっていうスネイプ先生におすすめの教材は無いか教えてもらった。この人も性格は陰険だけど授業内容は丁寧だ。そ

して教えてもらった教材はやはり参考になった。……ちょっと難しかったけど。
ちなみに以前俺が使ってた筆に興味を示していたから、後々この時のお礼にとクリスマスに筆と硯と墨を贈っておいた。生徒が教師にプレゼントするのが大丈夫か分からなかったから匿名だったけど。賄賂って思われても嫌だしな。

まあ、そんな風に何もなかったわけではないけど……最初こそ学校生活は平和だった。そう、初めは。
だけど、途中で不吉な事件が起き始めたんだ。

まずハロウィーンに、フィルチさんの愛猫であるミセス・ノリスが石になって発見された。去年といい今年といい、ハロウィーンという日は本当に悪霊でも彷徨い歩いていそうなくらいの厄日だ。来年からはきっちり仮装して魔除けしておこうか。
ミセス・ノリスが発見された場所の壁には「秘密の部屋は開かれたり。継承者の敵よ、気をつけよ」と血のような赤い文字で書いてあった。そしてその後マグル出身の生徒が次々に何者かに襲われて石化するという事件が頻発したのだ。もうこれ学校閉鎖してしっかり調査した方がいいんじゃ？　と思ったが、「継承者」の話で持ち切りになりなが

らもホグワーツでの学校生活はそのまま続いた。

……たしかこの事件って蛇と日記がキーワードだったよな？　でもって、今までの被害者って運が良かっただけで蛇の魔眼って本来の効果は即死効果だよな？　やっべ、これやっべ。

ハリーに近づきすぎなければ大丈夫だろうとたかをくくっていたが、こうなってくると俺も無関係ではいられない

とりあえず元凶である日記に取り付いたやたら美青年な幽霊（映画の印象）を駆除すれば問題ないんだよな？　と、日記の方を探すことにした。蛇？　いや、無理だろ。勝てないだろ。そいつ相手にするくらいだったら除霊が効きそうな奴相手にする方がまだましだわ。

一応先生に「これって文献とかに乗ってるバジリスクとかコカトリスの仕業じゃないですか？」と、注意を促すために相談してみたんだが「不確定な情報で級友たちを混乱させてはいけません」と怒られてしまった。……まあ、証拠なんてないしなぁ。これが鳴介相手だったら俺の霊能力について理解もあるし、多分一緒に調べてくれたんだろうけど……。魔法の成績がよろしくない生徒がいきなり「勘」だの「予言」だの言いだしても信じてもらえないか。

誰だったかなー日記の持ち主。たしかハリーの知り合いだったよなー。秘密の部屋

の入口ってたしか女子トイレだろ？　ってことは女子だよなー。やべー覚えてねー。女子トイレもいくつかあるから秘密の部屋に行けるトイレ分からないし、分かったとしても入り方知らないから先生にチクるわけにもいかないしなぁ……。また怒られるのが落ちか。

悪霊が取り付いてそうな品なら、たとえ直接見なくても雰囲気で結構わかるんだが……何故か普段は必要以上に鋭い俺の霊視は仕事しない。あれ、今回の敵って幽霊でいいんだよな？　勘だが、微妙に見当違いをしていそうなのは気のせいだろうか。

誰が持ってるか特定できないからしらみつぶしに探すしかないけど、この学校人数多い上に他の寮の生徒となるとそれも難しい。学校の見取り図でもあれば以前ぬ～べ～クラスで流行ったフーチ（※五円玉と糸を使った中国由来の占い）を使って探すことも可能なのだが、いかんせんそれが無い。たしか誰か地図を持っていた気がしないでもないけど……いかん。にわか知識過ぎてほとんど覚えてねぇわ。まあ原作読んだの２５歳だった俺が煌くティーンエイジャー☆だった時だしなぁ……しかも流行に乗っておこうと一回読んだだけじゃあこんなもんか。

あれこれ考えながら自分に出来る範囲で色々してみたが、ホグワーツの生活は何気に忙しく、気づけばクリスマスも終わり年末も過ぎて新年を迎えていた。

「どうしたもんかなぁ……」

寮という生活スタイルだと、どうしても常に人の目がある。しかも犠牲者が増えたことで18時以降は寮の談話室に戻る事、授業の移動は先生が引率するとが決定した。下手にそれをやぶって一人行動して蛇に遭遇したらもともこもないので、案外日記探しに割ける時間は少ないのだ。

多分物語的に考えたら1年の時みたいにハリー達が何とかして、また1年が終わってめでたしめでたしって感じなんだろうけど……。実際に住む世界として生活してる身としては安心しきれないのが本音だ。

う～ん、こりゃあ占いの授業が出て来たら本格的に勉強しようかな。多分観る事や霊気の探知が得意な俺と相性はいいはず。こういう探し物のもやもやを解決できるなら、是非身に着けたい技能だ。

しかし、ある日ふと思い立って我がハッフルパフのゴーストである太った修道士さんに「女の子の幽霊が居る女子トイレって知らない？」と聞いてみた。するとあっさり「嘆きのマートルのことかい？」と答えが返ってきた上に、わざわざゴーストに聞かなくても、生徒でも普通に知ってる人は知っているらしい。……実に灯台下暗しである。不覚。

トイレ……幽霊……。ぶっちゃけ花子さんのトラウマが抜けきってないから出来れば行きたくない。でも、一応確認だけしときたいしなぁ……。ううっ、女子トイレに行くなんて同級生に言うわけにもいかないし、これは一人で行くしかないか。嫌だなぁ……確認だけしたらさっさと帰ってこよう。

運よく日記を持った人物が現れて、それを奪えたらラッキーなんだけど。

とか思ってたらマジで現れた件。

「ねえ、あなた」

「ん？」

件のトイレに来てマートルさんにビビりながらも（この場合幽霊ってよりもマートルさんタイプが苦手。繊細過ぎて扱い方が分からない）ざっとトイレの見取り図を描いてフーチで入口の場所を探っていた時だ。声をかけられて振り向けば、目が覚めるような赤毛。そして俺の意識はそれが誰か認識する前に暗闇に沈んだ。

……不意打ち対策、今度からもっと考えよう。

誰かの声が聞こえた。

「イツキに何をしたんだ！」

「ああ、彼かい？　こそこそと部屋の入口をかぎまわっていたから、連れてきたんだ。安心したまえ。気絶しているだけで、まだ生きているよ。まあ、それもあとわずか。……バジリスクに処理させて適当な廊下に放り出しておけば、新たな犠牲者ってことで校内を賑わわせただろうけどね……面倒だし、君と一緒にこの秘密の部屋で永遠に躯として転がっていてもらおうか」

意識は戻ったが動けない俺の近くで何やら物騒な事言われてる。

とりあえず様子だけ見れば、横たわる赤毛の少女、やたら美形な青年、そしてハリー・ポッター……うん、物語クライマックスですね分かります。

またこのパターンかよ!!　いや、今回は完ぺきに俺が迂闊だっただけなんだけどさぁ！

冷や汗をだらだら流しつつ、様子を窺っていれば謎の美青年幽霊が自己紹介しはじめた。え、ヴォルデモートの過去であり現在であり未来……？　あ、記憶？　つまり幽霊っていうよりちょっとした付喪神みたいな？　いや違うか。でも俺が幽霊探そうとして見つからなかった理由はちょっとわかった。分かった気もするが、まあ控えめに言ってよくわからん。フィーリングで分かった気になってただけだ。

え、どういうことなのと思って薄眼で見ていたら、奴が空中に自分の名前……「トム・マールヴォロ・リドル」という名を書き、それを入れ替えた。すると「Ｉ　ａｍ　ｌｏｒｄ　ｖｏｌｄｅｍｏｒｔ」という文が現れる。

……お、おう……本名のアナグラムか。なんつーか、何故か妙にしょっぱくて生暖かい気持ちになった。あれだな、人の黒歴史ノートのぞいちゃったみたいな？　そしてもとの名前が嫌だからって理由のわりには素材はもとの名前なのか……。多分、格好いい名前にしようと思って色々考えたんだろうな……。うん、お前は頑張ったよ。ヴォルデモートっていう名前は強そうだし格好いいよ。トムからよく頑張って考えたよ。

「まあどうでもいいんだけどな！　オラァッ！」

「な!?」

俺はハリーに校長の不死鳥フォークス（こいつも実は豆太郎の友達である）が組み分

け帽子を託したところで、勢いよく飛び起きてトムくんに足払いをかけてすっころばし、手に持っていた杖を蹴り飛ばした。
「イツキ！」
「ようハリー！　これお前のだろ？　返すぜ！　豆太郎頼む！」
「クッ、よくも！」
　俺はトムの手から離れた杖を、ローブの下に隠れていた豆太郎に取りに行かせた。そこにもう一振りの杖（多分赤毛の子のだ）を取り出したトムの魔法が迫るが、うちの豆太郎を舐めてもらっちゃ困る。
「キュウ！」
　豆太郎は得意のエクトプラズマを使った変身で巨大な一つ目入道の姿になると、その体で魔法を弾いた。霊媒物質であるエクトプラズマが、本体の豆太郎に届く前に魔力とぶつかりあって消滅したのだ。エクトプラズマの量は減ったが、豆太郎はぴんぴんしているのでまるで問題ない。豆太郎、俺と一緒に鳴介に修行つけてもらってたから結構強いんだぜ！　むしろ俺より強いぜ！
　まあいきなり現れた一つ目入道に杖を差し出されたハリーは驚いたろうけどな……。杖が楊枝に見える。
「チィッ、なんだあのトロールみたいなやつは！　来い、バジリスク！」

忌々しそうに吐き捨てたトムが蛇語でバジリスクに呼びかけると、シュルシュルと音がしてサラザール・スリザリンの像の口が開き何かがはい出てこようとしていた。
「馬鹿野郎来させるかよ！」
「ぐぶ!?」
目を見たら死ぬとか馬鹿かよ！
とりあえず命令している本体をどうにかしようと、最近得意になってきた急所狙いの一撃を奴の股間に叩き込んだ。そのまま前のめりになったトムの目にチョキにした手を突き出し目つぶしをし、咽喉にチョップをえぐりこむように加えてから渾身の力で蹴り倒してのしかかりマウントポジションをとった。そして喋る間を与えないように顔を狙ってひたすら拳を振るう。
合間合間に「馬鹿な！」「何故記憶の僕に物理攻撃が!?」「まだ完全に復活していないのに何故！」みたいなこと言ってたけど、そんなん知るか！　なんか殴れたから殴るんだよ!!　強いて言うなら最近の俺は顔と首以外の体全てに直にお経を書き込むというスタイルのお経アーマーを纏っているからかもしれないとしか言えんわ！　同級生には「イツキ、それってＫＡＮＺＩかい？　ワオッ、とってもクールだよ！」と意外と評判いいんだぞ!!　ピーブスの野郎も定期的に殴ってるわ！
「イツキ！　ナイスだけど駄目だ！　バジリスクが出てきた！　目を瞑って！」

「ふ、ふふふ……。無駄さ。バジリしゅくは僕の命令をきゃん壁にしゅいこうすりゅ……」

俺の拳をうけてぼっこぼこに晴れ上がった顔で、トムは勝ち誇った笑顔を浮かべる。クッ、カッコついてねぇぞって笑う暇も無いな。に、逃げないと殺される！　即死効果の眼も恐ろしいが、巨大な蛇ってだけでもうアウトだろ！　捕まったら絞められて一瞬で全身粉砕骨折だわ！　あと絶対毒持ってるよな!?　即死の眼を筆頭に、絞殺死、窒息死、中毒死ってバリエーション豊富過ぎんだろ!!

「ま、豆太郎来い！　お前が敵う相手じゃない！」

「きゅ、きゅうう～」

一つ目入道に化けていた豆太郎も、動物だからこそ余計に本能で相手の強大さを感じ取ったのだろう。すぐに変化を解いて俺の腕の中に戻って来た。だけどそこで終わらないのが豆太郎の凄いところだ！　なんと、バイクに化けて俺たちを乗せて逃げてくれたんだ！

しかし巨体であるというのはそれだけである種のスピードである。バジリスクの追撃は、俺たちをいやおうなしに追い詰めた。

そしてそんな中、ハリーと一緒に必死に逃げつつふと思い至る。

（サラザール・スリザリンの残した動物ってことは、下手したら玉藻先生より長生きして

るって事か……）

「おい待て大妖怪じゃねぇか！　おいバジリスク！　あの幽霊もどき絶対お前より格下だろ!?　それでいいの!?　昔の飼い主の命令とはいえお前はあんな雑魚にしたがっていいの!?　おいハリー訳せ蛇語に！　バジリスク大先輩をご説得しろ！」

「まさかの説得!?　いや、無理だよ！　あいつ、本当にトムの命令以外聞き入れようとしてない！」

「だけど死ぬだろ!?　このままだと死ぬだろ!?」

「高確率でね！　嫌だけど！」

「俺も嫌だ！　さあハリー！　ネゴシエイターとしての才能を今こそ開花させるんだ！」

「だから無理だよ!?」

「バジリスク！　さっさとその煩いムシケラどもを殺せ!!」

俺が雑魚だの格下だの言ったからか、トム先輩がさっきよりもお怒りだ。やっべ火に油注いだ。

しかし、天は俺たちを見捨てなかった！

途中で不死鳥のフォークスがカムバックして勇敢にもバジリスクに飛びかかり、その眼をつぶすという偉業を成し遂げたのだ！　なんて勇敢な鳥だ!!
しかし、それでも蛇は俺たちを追ってくる。蛇なだけあってしつこいぜ！
「ハリー！　さっきの帽子まだ持ってるか!?」
「う、うん！」
「手入れてみろ！　もしかしたら何か入ってるかもしれない！」
「帽子の中に？」
「おう！　フォークスは校長の鳥だろ？　もしこれが校長のよこした助けなら、中に何も入ってなかったら俺怒るわ！　全力で校長の顎にシャイニングウィザードぶちかますわ！」
「それもそうか……よし！」
意を決したハリーが組み分け帽子に手を入れると、そこから美しいルビー（多分）の宝飾が施された一振りの剣が引き出された。
「キタ！　伝説の剣的なアイテムキタコレ！」
「でも突き刺すには近寄らなきゃ……！」
「馬っ鹿、伝説の剣様だぞ？　飛ぶ斬撃ぐらい余裕だろ！　ジャンプ漫画の斬撃はだいたい飛ぶんだ！　魔法界ならそれくらい出来て当たり前のはずさ！」

「（ジャンプ漫画……？）そ、そうか！　よし！　はああ!!」
気合いと共に、ハリーが離れた位置から剣を振りぬいた。
勝ったな。そう一瞬前の俺は思っていました。剣はヒュインと空気を切っただけで、一瞬何とも言えない空白の時間が生まれる。
「イツキの馬鹿！　何も出ないよ!?」
「ガチで普通の剣ですか!?　ギガスラッシュくらい標準装備しておけよ！」
後から思い返せば、剣に随分大きな期待を寄せていたようだ。無機物であるが、心なしか剣が申し訳なさそうにしていた気がする。誠に申し訳ない。でも俺たちだって必死だったのだ。勘弁してほしい。
「はははは！　無様だね。さて、そろそろ君たちの命運も尽きるかな？」
「やっかましいわ！　おいハリー！　蛇は無理でもこのままトム先輩をひき殺そう！」
「ははは……は？」
「！　そうだね！　バジリスクはこのさい後回しだ！　まずジニーを助けないと！　あいつを倒せばジニーは助かるし、バジリスクも命令する相手が居なくなれば僕の声を聞いてくれるかも！」
「よし！　豆太郎、標的トム・たまごボーロ・リドル！」
バイク（豆太郎）に乗った俺たちはまるで風になったようだった。天才的シーカーで

あるハリーの指示で俺がハンドルをきってバジリスクを撒くように秘密の部屋を駆け巡り、その時が迫るとハリーは俺の後ろでまるで勇者のように美しい剣を振りかざす。
「轢くのもいいけど、狙いは日記だ！　あいつの本体は日記なんだイツキ！　きっと日記を壊せば……！」
「よっしゃわかった！　横すり抜けるからしっかり狙えよ!?」
「うん！」
　ハリーが頼もしく頷いてくれたので、俺も腹をくくってハンドルを握る。そして豆太郎に「あとちょっとだ、頑張ってくれ」と呼びかけた。いくら霊媒物質で作っているからといって、それを発生させているのは豆太郎なのだ。疲れないはずが無い。あとでおもいっきり美味いもん食わせてやるからな！　あと少しだけ頑張ってくれ！
「く！　させると思うか!?　アバダ・ケダブげむぉ!?」
　トムがヤバそうな呪文を使いそうだったので、さっきのやり取りなど無かったかのように軌道修正してアクセルを踏み込み最速で奴を轢いた。霊媒物質まじパーフェクト。俺のお経アーマーと同じように、物理攻撃が効かないと思い込んでたらしいトム先輩を吹っ飛ばしてくれた。錐揉みに回転して頭から落ちてたけど、やはりそれでは倒せないようだ。恐ろしい形相でよろよろと立ち上がり、再び俺たちに杖を向ける。

しかし、この時点で俺たちはすでに勝利していたのだ。

「さあバジリスク、餌だぞ！」

ハリーはトム先輩を轢く際、少女の肌を傷つけないように器用に剣を使ってとっさに日記をジニーの腕からかすめ取っていたのだ。流石の反射神経である。

そしてそれを背後に迫っていたバジリスクに投げつけた。思いがけずバジリスクが近くに迫っていたから、剣で日記を切る暇がなかったからだろう。しかし結果的にそれが功を成した。

投げつけられた日記に、攻撃だと勘違いしたバジリスクが噛みついたのだ。……極上の猛毒の詰まった牙で、黒い日記は貫かれたのである。

すると日記からインクが噴出し、言いようのない断末魔のような音があふれ出す。

「が、あ!?　まさか、この僕、が……！」

同時に、トム先輩の体も光に焼き尽くされるかのようにボロボロと崩れ去っていく。

「あああああああああああああああああ!!!!」

そして日記と共に悲鳴を上げて、トム先輩は消え去った。だけどそれで終わりじゃな

い！

「仕上げだ！　もうヤケだよな!?　ハリー！」

「まあね！　このままバジリスクに止めを刺す！」

「おう！　頼むぜ！」

日記が弾けとんだ衝撃を受けたのか、バジリスクが一時的に動きを止めたのだ。そこに、バイクの背からフォークスに乗り換え（？）たハリーが上空からせまる。

そして……バジリスクの脳天を、銀色の刀身が刺し貫いた。

「極限状態のハイってコワイ」

後日、俺は寮の自室で布団をかぶりながらブルブルと震えていた。ここ数日授業も全部休んで引きこもっている。まさかの引きこもり生活リターンズだ。

何度かハリー達が訪ねてきたようだが、俺としてはそれどころじゃない。

最初は偶然だった。

次は自衛のための情報収集に自ら行動した。

けど、結果的に俺は2年連続で主人公と一緒にボス退治に参加してしまったのである。つーか2年連続で姿を変えて同一人物がボスって何だよ。しかもラスボスだぜ？

もうちょっと出し惜しみして部下とかの中ボス挟んで来いよ！　なに全部ラスボス自ら出張ってきてんだよ！　働き者か！　いらんわ！

人の口に戸は立てられぬといったもので、ハリーとジニーには俺があの場にいた事を広めないようにお願いしたにも関わらず……俺が秘密の部屋でハリーと一緒に戦ったという噂はあっという間に校内に広がってしまった。

これが何を意味するかって？　今後闇の陣営に目をつけられるかもしれないってことだ。お腹痛い。すでにボスの恨みを買ってるのにさらに上乗せとかいらない。

俺はますます憂鬱になった魔法学校での生活を、真剣に引きこもりのままやり過ごせ

ないかと考えた。

新しいお話
秋の空と燃えるいずなの恋心（物理）（＃１１８　謎の人体発火現象より）

夏が過ぎ、風が少し肌寒い秋のものとなってきたころ。鱗雲が浮かぶ空の下、校庭でうきうきと焼き芋をしようとしていた鳴介のもとにイタコのいずながやってきた。

美樹、郷子と共に焼き芋（なお俺たちが食べる分はない。何故なら鳴介の次の給料日までの貴重な食糧だからだ）見学していた俺は、いずなの悩み相談に「あ、この話か」と思い出して途端に気まずくなった。

……ここは退散しておくか。

「ごめん、俺ちょっと用事あるから……」

「ちょっとー、どこいくのさ！　薄情なやつね！　おねーさまが突然発火しちゃうってのに心配じゃないわけー!?」

が、何が不満なのか分からないがいずなに後ろ襟を掴まれ引き留められた。

おま、俺は一応お前のためにこの場から離れようとしてるんだぞ！　だってこのあと

お前素っ裸になるじゃん！　見る方の気まずい気持ちを分かれよ！　あと誰がお姉様だ！　お前の事お姉さまお姉さま慕ってるのは美樹だろ！

だが俺のことなど知ったこっちゃないと、いずなは俺の襟を掴んだまま話を進める。

「で、続きなんだけどさ。初めは日に一度発火する程度だったんだけど、日に日に回数が増していって……。制服は燃えちゃうし、着られる服もどんどんなくなっちゃうしで最悪だよ！」

いずなが何を相談しているかといえば、ここ最近炎上するといった内容のものだ。これだけ聞けば俺なんかは「ネットで炎上でもしたか？　ＳＮＳやるのはいいけど気をつけろよなー」などと思うところだが、元の世界ならともかく、こっちの時代ではまだネットはさほど普及していない。ＳＮＳなんてものが流行りだすのはまだ先の時代の事だろう。

……いずなが困っている「炎上」とは、文字通り炎で燃え上がることについてだ。しかも燃えるのはいずな自身の体である。

「ハハハ、どーせタバコの火が原因だろ、この不良娘」

しかし焼き芋に夢中の鳴介は真面目に取り合わず、いずなに芋の入った袋をあずけるとマッチで枯葉に火をつける作業にとりかかった。

いや、鳴介。これ多分冗談とかじゃなくてだな……というか、おい!?　いつまで襟掴

んでるんだ早く放せよ!?　こ、このままだと……！

俺が危機感を感じた時は、すでに遅かった。視界を埋め尽くすのは、モミジなんかよりよっぽど赤いリアル炎である。

「きゃああ!?」

「ぎゃあああああああああ!?」

俺といずなの悲鳴が響き渡り、そこでやっと周りが事の重大さを知ったようだ。遅いよ！

「!?」

「いずなさん!?」

「お姉さま!?」

本人の申告通り、一瞬でいずなの体は炎に包まれ炎上した。そのままどさっと倒れ、美樹と郷子の悲鳴が響く。

そしてそのいずなに掴まれていた俺の服も炎上した。

あっちいいいいいいいい!?

なんとか地面を転げまわって火を消すことに成功したが、首の後ろが火傷でひりひりする。痛い。

だが俺が涙目になっている一方で、体ごと大炎上したいずな本人は肌を少し黒くしな

がらもぴんぴんとした様子でむくりと起き上がった。……服は下着もろとも焼け落ちたので、全裸だが。

これを見るのが気まずかったからこの場を離れようと思ったのに、今は火傷でそれどころじゃねぇよ!! 痛い痛い痛い。火傷いってぇ!

「ひ!? お、お姉さま!? 大丈夫なんですか?」

「服……貸してくれる? 美樹ちゃん。……ほら! 見たでしょ! こーいう事よ!」

「か、体は火傷一つないのね。不思議……」

俺は火傷したよ!

やけっぱちのように叫ぶいずなに言ってやりたかったが、火傷の痛みにそれどころではない。み、水うううう! 氷ー!

「いもが、いもが〜〜〜〜! 給料日まであと五日これですごすつもりだったのに〜〜〜〜!」

そして俺と同じく鳴介にもピンピンしているいずなを心配する余裕はない。こっちは貴重な食糧がいずなごと燃えてしまったのだ。

……滂沱の涙を流す鳴介には申し訳ないが、ちょっとは俺の事も心配してほしい。

その後場所を移して、童守小の図書館で人体発火現象について調べることになった。
……この学校、無駄に心霊現象とか専門的な本多いよな。
といっても、俺は火傷の処置をしてもらうために保健室行きだったため、詳細は後から美樹に聞いたのだが。
鳴介が言うにはこういった現象は騒霊現象（ポルターガイスト）と同じで、不安定な精神が引き起こすと言われているらしい。特に霊力が強いとそういったことも多いようで……うん、これ俺も他人事じゃないな。幸い中身は思春期などとうに過ぎているものの、精神は常に不安定だし。主に物騒な霊もろもろのせいで!!
でもって、そこから思春期の抑圧された性欲が引き起こす説も有力であることから、恋でもしたんじゃないか？　とからかわれたいずなが怒って飛び出していったようだが……うん。鳴介っていい奴なんだけど、そういったところのデリカシー無いよな。それがモテない原因の一つじゃないか？　霊能オタクうんぬん抜きにして。
まあ、いずなとの相性もあるんだろうけどさ。

そしてそのいずなだが、現在我が家の俺の部屋に居座っている。
おい！

「お前ー！　俺に火傷させといて部屋にまでくるなよなー!?　火事になったらどうすんだ！」
「わ、悪かったって！　でも無性にイライラしちゃってさ。豆太郎に癒されに来たんだよ！」
　一応悪いとは思っているらしいが、あまり謝られている感がない。というかおい、やめろやめろ！　豆太郎が焼き狸になったらどうするんだ！　抱き上げるな頬ずりするな！　いずなお前、可愛い管狐がいっぱいいるだろう!?
　俺が慌てて豆太郎を奪い取ると、いずなは不満そうに頬を膨らませた。……だがそのまま怒るかと思いきや、しおらしくも肩を落としてうつむいた。……珍しい。明日は雨か？
　さすがにその様子を見てしまうと、中学生の女の子を落ち込ませたままにするのも忍びなくて罪悪感に似たものを覚える。
　俺はため息をつきながら、いずなの側に腰を下ろした。
「……鳴介にもう一回相談してみたら？」
「フンッ、もうあんなデリカシーのない０能力教師になんか頼るもんか。人が相談して

るっていうのにさ……」

あちゃー……。完全にへそを曲げてるな。しょうがないけど。

「まあ鳴介も悪かったけど、ちゃんと困ってるって伝えれば助けになってくれるって」

「この間ちゃんと言ったじゃないか！」

うっ、これはどうにも……。

……まあ鳴介には俺からも後でいずなの現状を改めて伝えるとして、今はちょっとでもストレスを軽減させた方がいいだろうな。このままプンプンされてちゃ本当にいつ燃えるか分からないし。

「あー……。じゃあ、俺でよければちょっと話きくぜ？　あ、でも外でな！」

「あんたに～？」

ジト目で不満そうに見てきたいずなであったが、それでも逡巡してから「まあ、いっか」と何やら妥協をしたようだ。……年下かつビビり癖有りの小学生男子が頼れないことは分かるが、妥協された感がどうも腑に落ちない。

いや、確かに霊的なことに関してはアドバイスとか出来ないかもしれないけど！　確かこいつの発火現象の原因って実際鳴介が言うように恋が原因だったよな？　だったら俺でも少しは何か言ってやれるぞ多分！　なんたってお兄さんだからな。ちゃんとお付き合いして彼女がいたこともあるからな！

……いや、女心がわかるかと言われると……まあちょっとあれだけど。……うん……。

とまあ、そんな流れで近くの公園に移動したわけだが。

「で、実際感情が不安定になる理由に心当たりとかあるのか？　鳴介が言うみたいに原因がそれなら、つきとめてそれを取り除くのが一番の近道だと思うけど」

「……！　心当たりが、ないわけじゃないけど～……。やっぱりあんたみたいなお子様に相談してもね～」

原因を知りつつ遠回りに聞けば、言いにくいのか、それともやっぱり小学生男子に相談するのが馬鹿らしくなったのか話そうとしない。ええい、面倒くさい！

「なあ、もし恋とかならいっそ告白してみたらどうだ？　いずな可愛いんだし、告白されて嫌な気する奴いないだろ」

「はあ!?」

どうせそういう流れになったはずだよな！　と、我ながら無責任と言われても仕方がないようなことを言ってみる。

……まあ、あれだよ。人体発火で苦しむのを告白一つでどうにかなるなら安いもの、と言いたいところだけど、告白って思春期の女の子にとっては人体発火と天秤にかけてもそうそう踏み切れるもんじゃないよな……。

でも下手すると命に関わることだろうしなぁ……。服にも困ってるみたいだし、早めに解決した方がいいだろう。焚きつけるのは悪い事じゃないはず。

とかなんとか思ってたらいずなが燃えた。

「わああああああ!?　え、ちょ、ごめん!?　なんかごめん!?　でもナンデ!?」

「あ、あんたが変なこと言うから！　ガキンチョのくせにませたこと言うんじゃないよ！」

「ごめん！　軽率に告白とか言ってごめん！　あ、うわあ!?　服、服ーーーーー！」

あれよあれよという間にいずなの服が燃え尽きて、とても目のやり場に困ることになった。

俺の守備範囲に中学生は入ってないの！　裸とか見ちゃってもラッキースケベとか思う前に気まずいだけなの!!　さっきは火傷が痛くてそれどころじゃなかったけど、やっぱり気まずい！　なにか隠すものーーーー!!

結局その日はうやむやになり、こっそり母さんの服を拝借していずなに着せ家に帰した。

……やっぱり彼女がいたことあっても、ふられた俺もまたきっと朴念仁……鳴介の事

デリカシー無いとか言えねぇ……。

地味にへこみつつ、どうしたもんかとその日の夜は頭を悩ませることになった。

そして、翌日。

服に困っているだろういずなのために要らない服を集めて届けようとしていた美樹と郷子と一緒に、俺はいずなのもとへ来ていたりする。

……いや、こっそりついてこうと思ったら見つかったんだよな。俺に尾行の才能は無いみたいだ。

ちなみに姿こそ見せていないが、鳴介も近くで様子を窺っている。こっちは幸いまだ見つかっていない。今下手に姿を見せると、いずながへそを曲げそうだしなぁ……。

もとより人体発火の最悪の例を鳴介が知らないはずもなく、ちょっとからかいすぎたかと本人も反省していた。俺からもう一度いずなの状態について報告すると、いざという時に対処できるようについてきてくれたのである。

そしてこういったことに関しての情報収集能力に関して侮れない美樹が、いずなに人体発火に関してのその最悪の例……足首を残して人体が消滅してしまったという事例を提示した。

するとさすがに服で困るだけではすまないかもしれないと、いずなも顔面蒼白にして焦りだす。

「じょ、じょーだんじゃないよ！　やだよそんなの！」

「だったら、やっぱり原因を突き止めて解決するしかないんじゃ……？」

言い方がちょっと控えめになってるのはご愛嬌である。いや、どのタイミングで発火されるか分からないしな……。言葉選びも緊張するわ。

しかし昨日と違い、今度ばかりは命が関わっていると知ったからか、同性の美樹や郷子が促したこともあって「実は……」といずなが口を開いた。

……う～ん、普段は生意気さの方が際立ってるけど、こうして顔を赤くして恥ずかしがってるところを見るといずなやっぱり可愛いんだよな。内面知らなきゃ告白されて嫌な野郎なんてそうそう居ないと思うけど……この話って結局どうなったんだっけ？

ぬ～べ～の中でいずなの彼氏が出てきた回とか無かったはずだし、やっぱりふられてしまうのか……。

……どうしよう。焚きつけといてなんだけど、罪悪感じみたものがわいてきたぞ。

しかし俺が今さらなことを思っている間に、あれよあれよと話は進んでいずなが告白する流れになっていた。やっぱりこういうことに関しては美樹と郷子、女の子の押しが

強い……。

あれ、俺居なくてもよかったかな……？

そしていずなの意中の相手であるが、爽やかイケメンを絵に描いたような奴だった。……あれだ、少女漫画の住人のようなジャンルのイケメンだ。こう、背景に点描ふわふわ表現が見える感じの……。

そしてそいつを見ただけで、顔真っ赤にしてあっという間にいずなが炎上した。うん、分かりやすいな！　原因確定だよ！

が、俺の嫌な予感は的中してしまったらしい。いや、ふられたとかじゃないんだ。その前に終わってしまったというか。

……いずなの片思いの相手である爽やかイケメンくん、彼女が居た上にその子と路上チューをな……かましてくれてな……若いってすごいね……。

「い、いずな……？」

恐る恐ると、何度も何度も服を燃やしながら必死に彼に話しかけようとチャレンジしていた少女を窺う。

……あかん。俺でもわかるくらいに、いずなの霊力がどんどん上昇してきている。

「いずっ　あち!?」

肩に手を添えた瞬間、いずなの体は燃え上がった。

「いかん、霊力が異常に上がっている！　このままでは炎から身を守る力を上回って燃えてしまう……！　メルトダウンだ！」
「ぬ～べ～!?」
「え!?」
さすがにまずいと思ったのか、隠れていた鳴介が飛び出してくる。しかしいずなは体を燃やしながら、どこかへ向けて走り出してしまった。俺たちも当然追いかけて……たどり着いた先は海である。
しかし現状では炎の温度が上がりすぎているため、このまま飛び込めば炎を消すどころか水蒸気爆発すると鳴介。
うえええええ!?　ちょ、全裸になる回数が多いからてっきりちょっとビターなエンドな漫画的にはラッキースケベ回かと思ってたら真面目に命の危機だよあいつ！
……しかし、俺の心配など関係なく。
いずなは誰の手を借りることもなく、行き場のない感情に自分で決着をつけた。
「ばっかやろー!!」
海に向かって泣きながら思いっきり叫んだその体から、ぱっと炎が霧散する。
（……なんか、悪かったな。俺、いない方がよかったかも）
あまりにも激しく眩しい青春の燃える恋心と、それが散った瞬間。少女が大人になる

ために経験した苦い失恋を間近で一通り見てしまった事に、ただただ申し訳ない気持ちがこみ上げる。これ、詳細を忘れていたとはいえなんとな～く起きる出来事を知ったうえでついてきた俺ってかなり野暮では？　……いやマジで俺ここに居ない方がよかったんじゃ……！

「人間だれしもストレスを解決するすべを人生のどこかで学ぶものさ。心のコントロールが出来てはじめて大人と言えるのだ。霊能力だって同じこと……。いずなもまた一歩、一人前の霊能力者に近づいたのだ」

などと鳴介がなんかいいことを言ってしめる。その後見られていたことに気付いて、羞恥心と怒りにより対象を見つめるだけで発火させられる能力を発揮したいずなに鳴介が燃やされるという一幕があったわけだが……。うん……これが”落ち”だとしたら、今回はこれで終わりなんだろう。話的に。

それにしても、心のコントロールかぁ……。俺ももとは大人と言って差し支えない年齢だったけど、それが出来ているかと聞かれれば首を傾げるしかない。

つーかできてねぇよ！　常に心なんて不安定だしビビりっぱなしだしで！

子供のころは漠然と、年を重ねれば大人になれるって考えていた。……俺は今回のいずなのように激しくぶつかって、乗り越えたことがあっただろうか？　俺は果たして、

自分を大人だと思っていいのだろうか。
とかなんとか、これから自分の霊能力をもっとコントロールしていかなければならない俺の心に地味に突き刺さった鳴介の言葉だったが……。
まあ、なんだ。
いずな無事だったみたいだし、今回は怖い霊にも遭遇しなかったし、穏便に終わった方だよな。鳴介燃やされたけど。

が、一区切りついたのに俺は何故かいずなに絡まれている。
なんだよもー！

「一部始終見てくれちゃってたんだから、あんたもちょっとは甘酸っぱい話を聞かせなさいよ！　ほらほら、お姉さんに話してごらんなさい？　クラスで気になる子とかいないの～？　可愛い子いっぱいいるんだし、一人くらいいるわよね～？」
「あー、もう！　いないって！　しつこい！」
「人の裸何度も見たんだからそれくらい白状しなさいよ！」
「大きな声で言うなー！　不可抗力！　不可抗力を主張する！　見ちゃったのは悪いと思ってるけどわざとじゃないから！」

何度も（心の中で）言うが俺は二十五歳のお兄さんなので小学生中学生は守備範囲外なのだ。五年三組に可愛い子が多いのは認めるが、恋愛感情とか芽生えてしまったらロリコンである。傍目には問題なくても俺自身がやばい判定をくだすのでアウトである。

……美樹と郷子と別れた後だったのは幸いか。女の子三人でかかってこられたら俺は勝てる気がしない。勝てなくても言える事なんぞないが。

……ううっ、そりゃ俺だって恋愛とかしてみたいけどさぁ！　今はそんな余裕ないっつーの！

……恋愛しても問題ない年になるころには、霊力を操れるようになって彼女作れる余裕出来てたらいいな……はあ……。